

 Victor

JVC

VHS VIDEO 10TH ANNIVERSARY

VHS

コミュニケーション

日本ビクター株式会社

VHS VIDEO 10TH ANNIVERSARY



コミュニケーション

日本ビクター株式会社

VHSネットワーク

昭和51年9月。日本ビクターはホームビデオの“あるべき姿”として、ひとつのご提案をいたしました。それが $\frac{1}{2}$ インチによるビデオ・ホーム・システム——すなわち VHS 方式ビデオでした。

ビクターではホームビデオを開発するにあたり、ビデオには3つの大きな楽しみがあると考えました。すなわち①テレビのエアチェック②ビデオカメラによるオリジナルソフトづくり③レコーデッド・テープなどの各種ソフト再生。そしてこの3つを十二分に楽しむためには、「少なくとも10年先まで見越した余裕ある基本設計」と「コミュニケーション・メディアとしての規格の互換性」こそ、ホームビデオに求められる基本条件であると考えたのです。

そうして誕生したVHSビデオも、おかげさまで今年10周年を迎えることができました。この間、「余裕ある基本設計」は、多機能化、高性能化というビデオの付加価値向上の課題を次々とクリアさせ、加えて頑なに守り通してきた「規格の互換性」により、世界中の方々からご支持を得て、VHSビデオは今日、世界に1億1千万台以上の普及を見るに至りました。

世界に1億台以上のVHSビデオがあるということは、言い換えれば「1億台有余の端末機を有する一大VHSネットワークが形成された」ことを意味します。VHS開発にあたって念頭においたビデオの3つの楽しみの世界は、現在、それぞれが互いに関連しあいながら大きく成長し、新しい展開を見せ始めております。これから21世紀に向けて、VHSネットワークがますます広がり、ビデオによるコミュニケーションが一層、身近なものとして定着することを願う次第です。

そしていま、10年というひとつの節目を迎え、さらにこれからの発展を期すにあたり、これまでのVHSビデオの歩みと、その底に流れるポリシーを、本書を通して一度ご理解いただければ幸いです。

昭和61年9月9日

日本ビクター株式会社
ビデオ事業部

時代を迎えて



VHSビデオを発表してちょうど10年目の昭和61年9月9日。VHSネットワーク時代にふさわしい、より身近なコミュニケーション・ツールとして、本体重量わずか750gという超コンパクトなビデオムービーGR-C9が発表された

目次

夜明け前—————5

1. VTR開発前史
2. VHS方式の誕生

①規格確立の時代'76～'78(昭和51年～53年)—————13

②機能開発の時代'79～'81(昭和54年～56年)—————35

③用途拡大の時代'82～'84(昭和57年～59年)—————59

④クォリティ追求の時代'85～(昭和60年～)—————97

VHS コミュニケーション21—————121

ジェームス三木／加藤 寛／沼田早苗／泉 麻人／手塚 真

ビクターVHSビデオの流れ—————130

VHS関連年表—————132

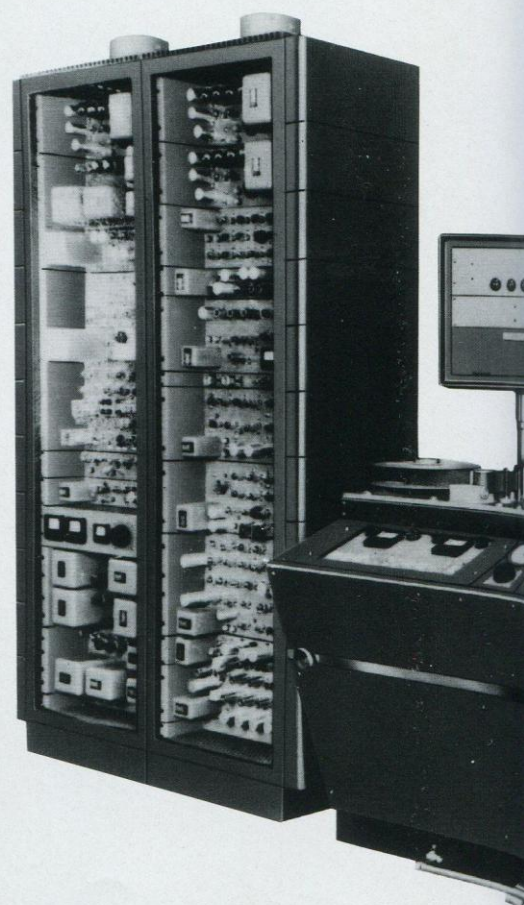
夜明け前



VTR開発前史

開発期のビデオ年表

開 発 期	昭和	
	30.	・VTRの研究に着手
	33.6	・VTRの開発に着手
	34.10.9	・回転2ヘッドヘリカルスキャンVTR特許申請
	12.末	・回転2ヘッド方式VTR「KV-1」完成
	35.1.9	・「KV-1」公開
	秋	・「KV-1」第2次試作、カラー化完成
	38.4.15	・工業用回転2ヘッド方式VTR「KV-200」発表
	39.6	・放送用「KV-300」完成(9月 KV-300F発売)
	40.2.28	・医学用「SVC-1000」発表
	4.28	・放送用線順次カラー「KV-300LSC」発表
	同	・教育用小型「KV-700」(白黒)発表
	41.1	・放送用高性能「KV-600」、工業用「KV-620」発表
	2	・家庭用を目指した小型「KV-800」(白黒)発表
	11	・小型カラー「KVC-800」発表
	43.4	・スローも可能「KV-810」発売
	44.3	・低廉、軽量「KV-820」発売
	3.3	・D.F.C方式カラー「KVC-8200」発表
	6.17	・小型VTRの業界統一の規格案まとまる
	10.	・電子機械工業会統一I型 規格制定 (45.2 VTR事業部発足)
V T R 事 業 化 期	45.2.	・初のポータブルビデオ「PKV-830」発表
	3.	・統一I型VTR「KV-340」発売
	6.	・統一I型VTR「KV-350」発売
	11.	・統一型カラーVTR「KVC-3500」発表
	49.1.9	・統一型ポータブルカラーVTR「PV-4800」発表
	44.6.11	・VCR(Video Cartridge Recorder)を開発発表 (ソニー、松下、ビクターの3社、業務用VTRで提携)
	45.3.6	・「VCR発表視聴会」開催(青山ビクタースタジオ)
	46.10	・3社によりU規格のColor cassette VTR発表 (47 ビデオ事業部に名称変更)
	10.26	・VCRアンサンブル「CE-7000」 VCRレコーダー「CR-6000」発表
	48.5	・チューナー付「CE-7100」発表
	51.1.8	・ポータブルビデオカセットレコーダー (CR-4000)発表



2ヘッドVTR「KV-1」(昭和34年)

“5000億産業”あるいは“ポスト・カラーテレビの本命商品”としてVTRの存在が脚光を浴び始めたのは昭和45年頃—すなわち $\frac{3}{4}$ インチのU規格によるビデオ・カセット・レコーダー(VCR)が誕生してからのことである。そして、さらに5年を経て、 $\frac{1}{2}$ インチによる小型軽量、長時間設計の画期的な家庭用VTRが出現するに至り、世の中は急速にビデオ時代へと突入していくことになる。

しかし、こうした今日のVTRの発展を支えた開発技術への取り組みは、すでに昭和30年にさかのぼって始まっていた。

今日のVTRの原点 回転2ヘッド方式の開発

VTRは、1957年(昭和32年)アメリカのアンペックス社による2インチ4ヘッド方式のものが実用化のはじまりで、その2年後には同社およびRCAからカラーVTRが発表された。

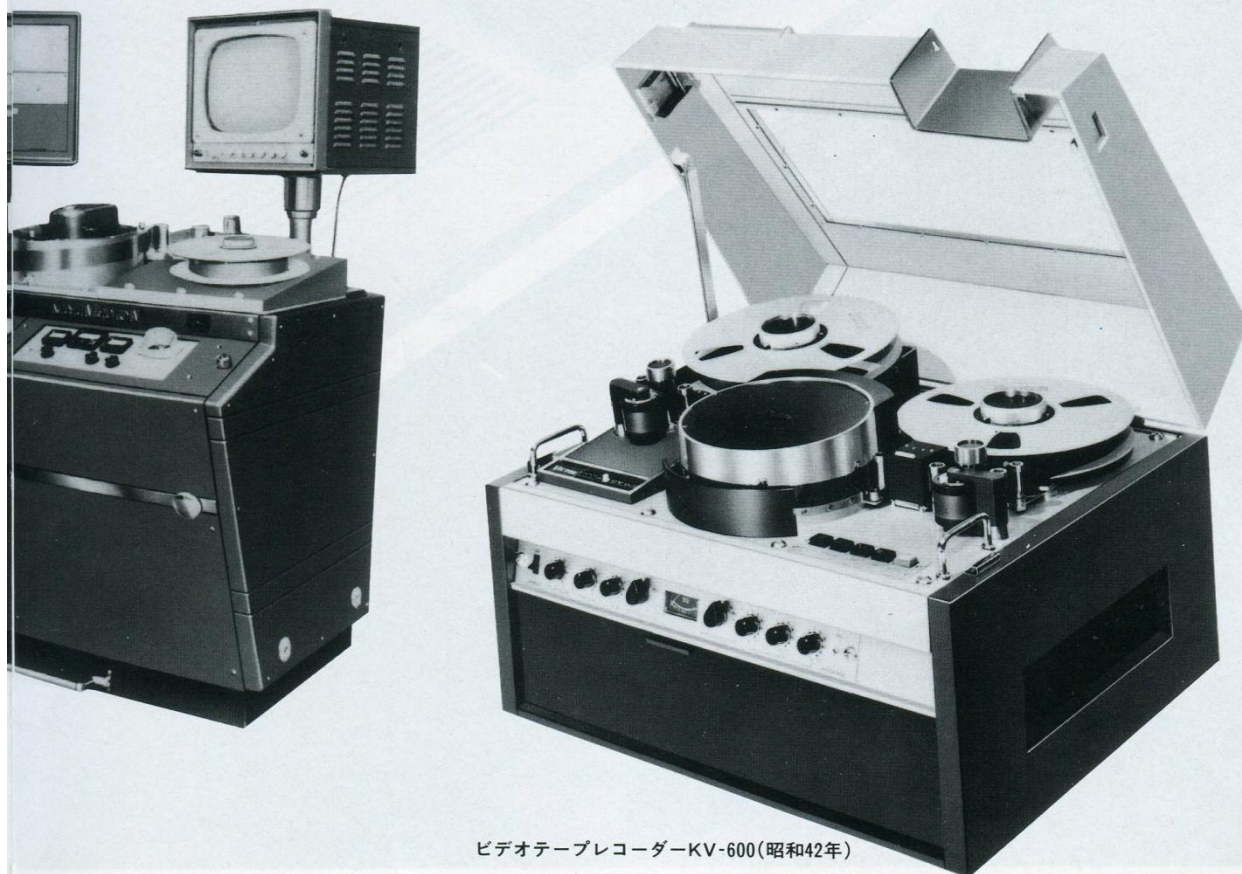
一方、わが国では、それに先立つ昭和30年、日本ビクターが他社に先がけ、全く独自の方式によるVTRの開発に着手していた。“テレビの父”高柳健次

郎顧問を中心とする開発グループが目指したのは、アンペックス社の4ヘッドVTRに対し、2ヘッドでテレビの画像を磁気テープに記録しようという試みであった。

研究開発に取り組むこと4年。ついにこの方式は〈回転2ヘッド・ヘリカルスキャンVTR〉として特許申請されるに至る。4ヘッドでは不可能であった停止画面をも可能にし、さらに4ヘッドの問題点、調整ズレその他によるバーノイズの除去までクリアした2ヘッド方式VTRは、まさに鮮明画像の獲得という点で、際立った特長を示すものであった。

かくして昭和34年、現在のビデオの原型ともいえるべき世界初の2ヘッドVTR(KV-1)が完成。また翌年には、これまた世界初の2ヘッド放送用カラーVTR(KV-2)が発表され、国内外の放送局にも広く採用されることとなったのだった。

2ヘッドVTRの誕生——それは、現在まで、いやこれからも続いていくであろう家庭用ビデオの原型として、それ以降も貴重な技術ノウハウを提供していくことになる。



ビデオテープレコーダーKV-600(昭和42年)

VHS方式の誕生



すべてに“画期的”という言葉こそふさわしかった。
10年前の昭和51年9月9日。家電業界はもちろん、マスコミを通じて時ならぬビッグニュースが駆け巡る。小型・軽量、長時間(2時間)を実現した1/2インチ・テープ幅によるビデオ・ホーム・システム——VHS方式が初めて世の中に陽の目を見たのであった。

消費者ニーズを徹底追求 家庭用の“あるべき姿”が洗い出された

そのVHS発表からさかのぼること5年。当時(昭和46年)、世界に先がけ、3/4インチ業務用VCRを発表したばかりの日本ビクターは、時を同じくして“ポストVCR”——すなわち本格的な家庭用小型ビデオの開発に入っていた。

本格的な家庭用ビデオとは何か……開発スタッフの間で真っ先に掲げられた2大テーマは、それぞれに相矛盾する次のような条件だった。

まず、本体のコンパクト化。ドラムを小さくテープ幅を狭くすることでステレオ・カセットデッキ程度の大きさに絞り込もうという設計方針である。

次に、テープの収録時間については2時間を目標

に据えるということ。3/4インチVCRの録画時間は1時間。事実、当時のテレビ番組は、その大方が1時間以内の番組であった。しかし、一般ユーザーの声を集めてみると、スポーツ中継や映画など1時間の枠内には収まらない長時間番組に対する録画ニーズが圧倒的に多かったのであった。

この条件の基に試作機の開発に着手、それぞれの段階を通して「家庭用ビデオのニーズ(条件)」が、さらに徹底して洗い出され、整理・確認されていった。

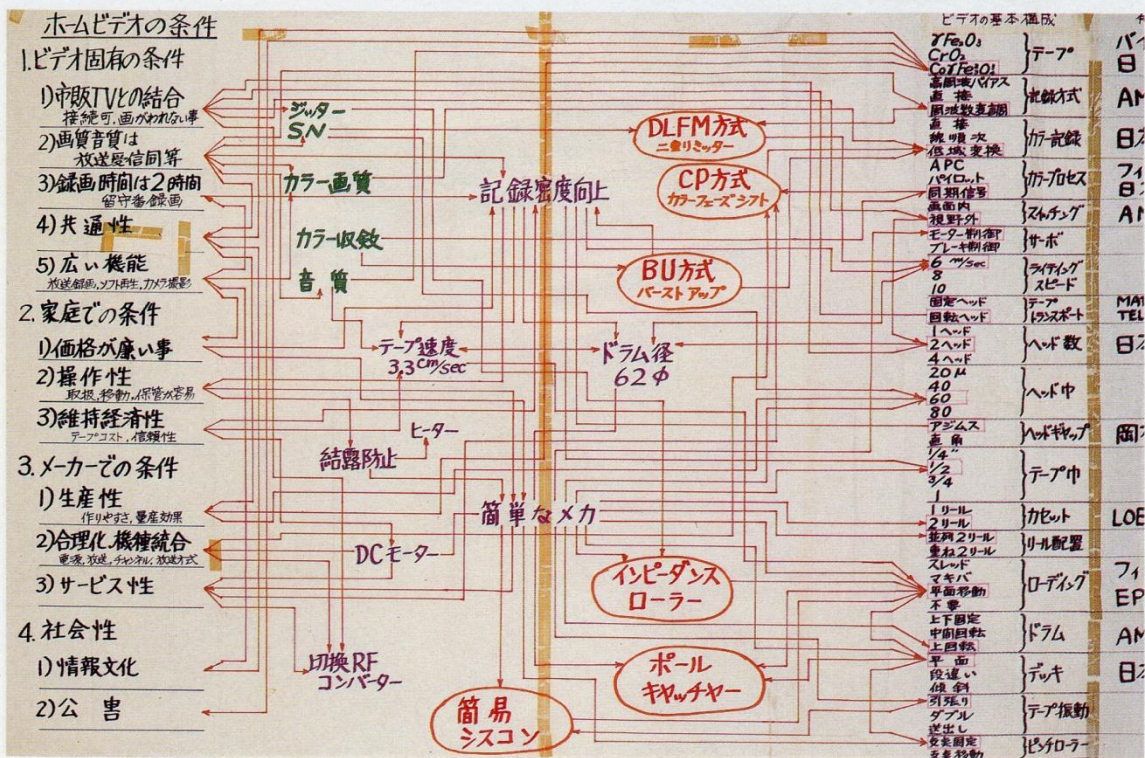
1. ビデオ固有の条件として、

- (1) 市販テレビと結ぶことが出来ること。
- (2) 画質・音質は放送受信と同等であること。
- (3) 録画時間は2時間あること。
- (4) 他社機種との共通性(テープの互換性)があること。
- (5) テレビカメラを使えるなど、広い機能を持つこと。

2. 家庭内での条件として、

- (1) 価格が安いこと。
- (2) 操作が容易であること。
- (3) 長く使っていくのに、経費(テープ代など)

VHS開発マトリックス



開発陣がVHSの開発にあたって描いた「開発マトリックス」。シワと変色が10年の歴史を感じさせる

が安上がりであること。

3. メーカーでの条件として、

- (1) 生産性が高いこと。
- (2) 合理化されていて、機種統合が可能なこと。
- (3) サービス性がよいこと。

4. 社会性として、

情報文化の手段となり得ること。

以上、いずれもが「家庭用」を前提とする限り、どれひとつおろそかに出来ない「条件」だったわけである。

相矛盾しあう“条件”をクリアした 数々の新開発技術のノウハウ

ニーズ優先の技術開発——家庭用ビデオに求められるニーズを明確化させ、それに対応する技術開発を推進する。

このポリシーにのっとり、次々と画期的な独自の新技术が開発されていくことになる。

- パラレルローディングの採用／カセットから引き出すテープ量を極力少なく抑え、ドラム径62mm(3/4インチVCR・U規格の約半分)を実現。小型化、

経済性を獲得するとともに、その作りやすさから生産性にも大きく貢献した。

- DCモーターの採用／ACモーターに比べ重量が軽く、消費電力を減少させるとともに回転数を自由に变化できるメリットがあった。(これは、後の可変速再生やポータブル化にも大きなメリットとなった)
- DL-FM方式の開発／ロースピードでもテープに高密度記録が可能で、しかも画像のノイズを大幅に減少させる画期的な方式。(さらに、この方式はヨーロッパのテレビ方式とも対応できるメリットがあり、後の欧州規格の実現、そしてVHSの世界市場進出にも大きな役割を果たすことになる)
- PS方式／テープを隙間なく高密度で記録するとともに、画像を鮮明に再生する方式。
- BU方式／カラーの色ムラをなくすための記録方式。

などなど、こうした技術のノウハウすべてが前述した「家庭用ビデオのニーズ」をガッチリと支えることになった。



昭和47年に試作したVHS第1次試作機。サイズはA4判と小型だったが、ドラム径は74.5mmだった。テープは1時間で、チューナーはなかった

普及の大前提は互換性 将来を展望したスタートだった

かくしてVHS方式が“家庭用ビデオのあるべき姿”をクリアして完成をみるに至ったのは開発に着手してから4年後、つまり発表より1年前の昭和50年のことだった。

しかし、ソフトを伴う新型製品の普及において大前提となるのは互換性の問題である。ことにビデオはコミュニケーション・ツールとして有望な市場が予想されるだけに、各社間のビデオ（テープ）が相互に、自由自在に使用可能であることが望ましい。

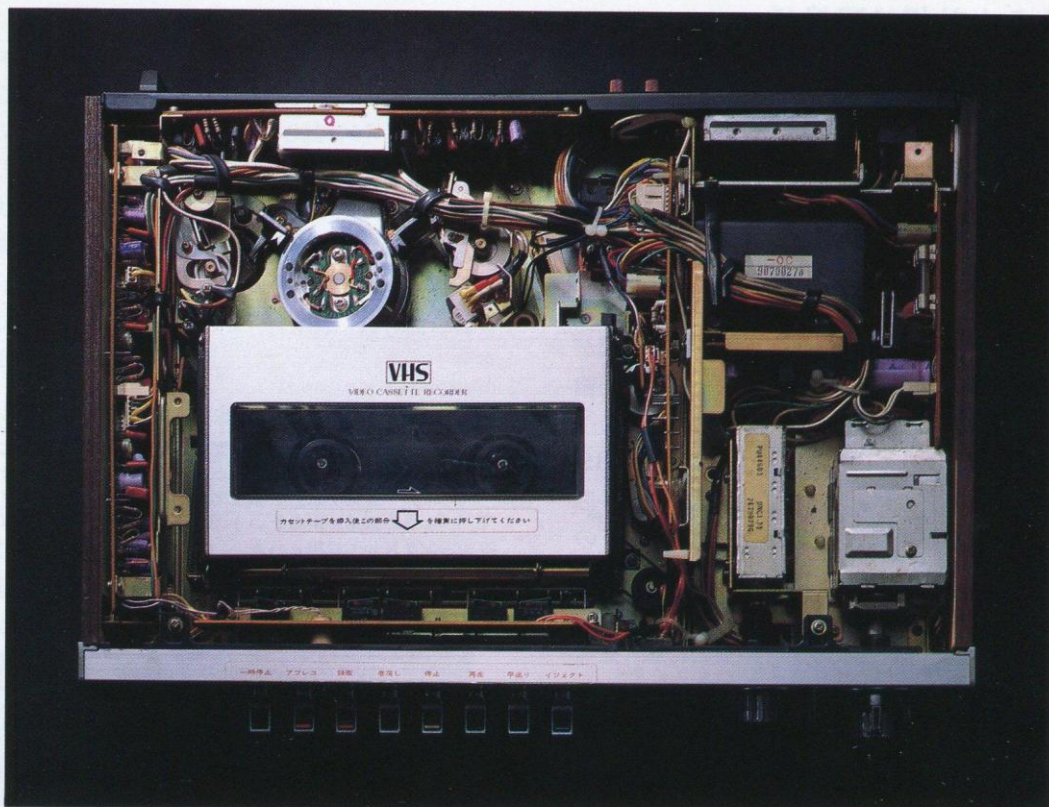
そこで、ビクターでは開発からさらに1年、VHSビデオの試作機をタタキ台として各家電メーカーとの意見交換の場を持つことに務めたのだった。その結果、メーカー数社による合意を得た上で、昭和51年9月9日の華々しいデビューとなったのである。

それは技術的にも、またビデオ産業の将来に立った視点からも、本格的な家庭用ビデオにふさわしい文字どおりのエポック・メイキングなスタートともなったのである。

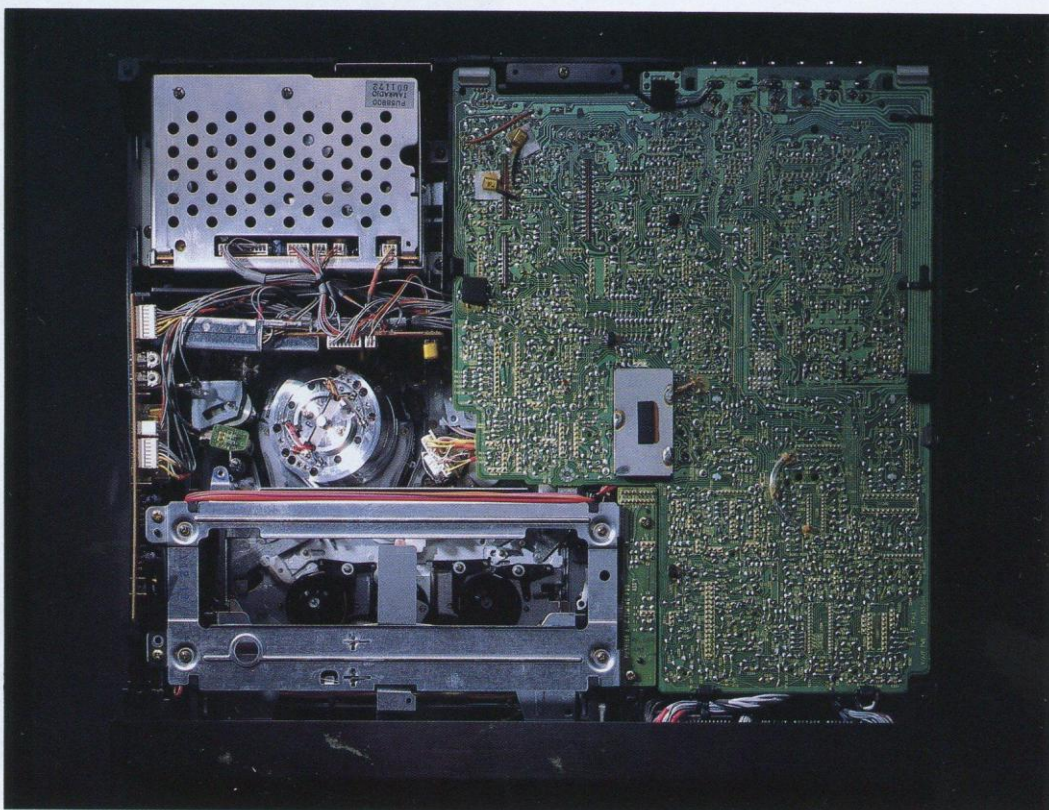
(※) VHSの語は、ビデオとは関係のない部品用にすでに商標登録されていた略号だったのが、ちょうど「ビデオ・ホーム・システム」の頭文字に一致するし、堅実なメカニクの語感があるということから家庭用ビデオのネーミングとして採用された。



HR-3300完成前の第4次試作機。ドラム径は62mm、テープカセットもほぼVHSと同じものに仕上げていた



昭和51年9月に発売されたVHS第1号機HR-3300の内部(上)と、現行の最高級モデルHQ方式搭載ステレオハイファイビデオHR-D755(下)の内部の比較。10年の歳月はここまで技術を進歩させたが、その底に流れるVHSの設計思想は変わらない



1

規格確立の時代

'76~'78

(昭和51年~53年)

●ビデオの新しい奔流VHS方式の登場	14
HR-3300,HR-3600,HR-4100	
PUBLICATION	
ホームビデオ時代の到来を告げたHR-3300発表会	18
WORLD	
VHS、アメリカへ上陸。'77サマーCESの話題を独占	20
AGREEMENT	
VHS6社で欧州方式の規格統一。ヨーロッパでVHSの地位を確立	22
CAMPAIGN	
“ハードを売らずにハートを売ろう”で、新需要を刺激したアルバムビデオ	24
PROMOTION	
ビデオのことなら何でもおまかせ。VIC第1号が虎ノ門にオープン	26
DEVELOPMENT	
急伸するVHS需要に対応して水戸にビデオテープ専門工場完成	28
TOPICS	
青梅マラソンでも威力を発揮。ビデオによる着順確認システム	30
COMMERCIAL	
VHSの開発思想を高らかに謳った“小さなビデオの大きな宣言”	32

ビデオの新しい奔流 VHS方式の登場

HR-3300。このVHS方式の第1号機をビデオ史という大きな流れの中の一点になぞらえるならば、それはまさに、ホームビデオという新しい奔流の原点といえるだろう。HR-3300を生み出した基本姿勢は、現在まで続くホームビデオの流れの中に脈々と生き続けている。

一例を挙げるなら、HR-3300に採用されているDC(直流)モーター。これはVTRのポータブル化やスローモーションなどのスピードコントロールに直接つながるものであり、さらには将来のいっそうの小型化、世界各国の様々な電圧と周波数への対応、すなわちVHSの世界化にいたる無限の可能性を見越したものであった。

VHSビデオはその第1号機にして、すでに家庭用ビデオとして満足しうる基本性能を備えていた。それ故、その後のVTRの進歩は、ビデオ固有の機能の開発による用途の拡大、そしてより目的にかなった使い勝手の広がりへと向かう。

HR-3300の優れた特長を受け継いでまず登場したのが、スチル、簡易スローモーション、2倍速の特殊再生を可能にしたHR-3600である。この機能は、ビデオを単に放送を録画・再生するタイムシフトマシンから、タイムコントロールマシンへと脱皮させ、ソフトを駆使したより幅広い用途を生み出すものであった。

さらに、続いて送り出された世界初の家庭用カラーポータブルビデオシステム、本体重量7.5kgと小型化されたHR-4100とカラービデオカメラ2機種とのコンビは、誰にでも手軽にビデオソフトを作れるという新たな楽しみを多くの人々に提供した。

これらの3機種のラインナップにより、周辺機器の充実と利用範囲の拡大、使い勝手の良さという普及の条件を満たしたVHS方式ビデオは、生活にうるおいを与えるものとして、映像文化の基盤を確立していく。

新開發CDI

2 映像がどんなに鮮やかなのは、なぜか
新開発(DL-FM方式)と、新しいカラー信号処理方式、
さらにはビデオの心臓部、ビデオヘッドに、相模の橋頭
とも言えるナローギャップを実現した、新ヘッド
を採用。こうした数々の新しい開発によって、
色とり・色とりでない極めて安定した長時間
が実現されました。

4 どんなテレビにもつけられるのか
今、お手持ちの、どんな型のどんなテレビにも、このビデオカセットプレーヤーをアンテナケーブルでつなげ、即座にビデオが観れます。RFコンバーターが内蔵されており、再生の時には、お手持ちのテレビを空チャンネルchまたはchに合わせるだけ。特別な装置は必要ありません。

5 消費電力は、どうか
消費電力は、わずか10W。しかも、待機時は0.5Wと省エネ設計。しかも、電源スイッチは、リモコンで操作可能。しかも、電源スイッチは、リモコンで操作可能。

消費電力は、どうか
 消費電力は、35ワット。身近にある電球や蛍光灯と比べてみ
 さい。まさにこれからのビデオによさわしい、低消費電力
 使用電源調製装置は、50Hz・60Hzを問わず共通、転居時の移
 動までのような「わすれないうち」や「まわしないうち」があ
 ります。
 でも簡単に使いこなせるか
 テーブルにのせて使えばいい

6 誰でも簡単に使いこなせる
テープレコーダーなんの難いところでは。カセットの着脱、CMなど、不要な部分カットして録音する時便利なポーズ(一時停止)機能。これは、再生中にテープを止め、そこから録音に移行する。簡単な操作で行えるようにしている。そのほか、テープの巻戻しと自動巻戻し機能が同時に実装。オートシットオフ機能など、テープをより身近なものにしている性能を賞する人も無数と書き、シンプラに激した設計が生まれた(操作性の良さ)と。

VHS VHSとは...

●サーチ機構内蔵……見どころを早く出せる（チューブの調出し）ができます。このサーチボタンを（ON）にしてテープを巻戻すと、カウチングの音が出たら「0000」まで戻った時、テープはそこで自動的に停止。見たい場面がすぐ映ります。

●UHF・VHFデュアルチューニング……

「……内線……」裏番組の録画ができてます。
録画スタート。あなたが見たい番組と裏番組に合わせ、
裏番組を録画させ、あとでじっくり、裏番組をご堪能ください。
●スリープ録画……このスイッチを入れておけば、テープが巻
き終わると電源が切れます。おやすみになっても、録画の途中であ
れば、ビデオ装置として録画は続きます。電気のムダ使いを減ら
すことができます。

テレビ切替スイッチ……カセットテープの再生を楽しむ
テレビ放送をそのまま見たら……切替のスイッチです。
テレビ切替スイッチ……別売りのビデオカメラで、番組を自分
で楽しむ。ビデオカメラを接続して録画を行う場合には
ビデオカメラの電源を切る必要がある。

デジタルビデオカメラの性能が向上し、高画質・長時間撮影が可能になりました。また、レコーダーとの同時録音や、後から再生もできるようになりました。

デジタルICメモリー・ビデオタイマー
3000売別り.....留守番録画ができます。この
タイマーには、タイマー装着スペースがとってある
ので、コンパニオンに装着することができます。

デジタル表示、簡単なボタン操作で、24時間の録画後は、テープが巻くと自動停止に電源が切れます。

8 はかにどんな工夫がされているか
例えば、録画・再生中のビデオ信号を取り出し、端子や、音声信号を取り出す。



15



Victor

ビクタービデオカセット VHS

HR-3600

¥279,000

再生画像のスピードコントロールを実現。
スピード・プレイが思いのままに楽しめるビクター倍速ビデオ。

スピードプレイ

世界にはまだビデオ
VHS



VHS方式ビデオカセット

HR-3600

●再生時のスピードプレイ(倍速)可能 ●スチル再生/簡易スローモーション再生可能 ●ポーズリモコン可能 ●ビデオタイマー内蔵 ●HR-3300の数々の優れた特長をそのまま受け継ぎ、しかも互換性のあるVHS方式を採用

ホームビデオ時代の到来を告げた HR-3300発表会

昭和51年9月9日。ホテルオークラ「有明の間」に集まった多くのマスコミ関係者の前に、ついにHR-3300は、ベールを脱いだ。

「新しい1/2インチビデオをビクターが作っているらしい。そんな噂を耳にされて、記者の方がずいぶん取材に見えましたが、ようやくここに発表の運びとなりました」

と、松野社長(当時)に紹介された「ビデオカセット」は、13.5kgという小型・軽量機。そして何より、その鮮明な画像で、出席者の注目を集めた。

ひき続き、徳光副社長(当時)が設計思想を記者団に説明。

「我々はまず、家庭用VTRはどうあるべきか、そこからスタートいたしました。そして①小型軽量。カセットテープレコーダー程度で、しかも操作がやすく消費電力が少ないこと。②2時間の長時間録画が必要。③画質は放送のときのそのままであること。以上3つの実現をめざしたわけです」

小型軽量化するためのメカの簡易化。「DL-FM方式」の開発による画質の向上など、数々の工夫を凝らして、ひとつずつハードルがクリアされていった。

しかしながら、それでもなお、問題がすべて解決したわけではなかった。互換性の問題である。

ビデオ産業の将来という、広い視野に立った立場から徳光副社長が詳しい説明を続けた。

「ビデオも、個人として使用しているぶんには、それほど問題はないのですが、親しい人とテープを交換したりソフト産業の面から考えると互換性は必要不可欠のものとなります。この将来ある商品を育てていくという意味からも、われわれが世界で初めて開発した『DL-FM方式』採用のVHSを各社間でタタキ台にしてもらおうべく打診してここまで来たわけです」

統一されたVHS規格に 各界から期待が集中

翌日の新聞各紙は大きくスペースをさいて、VHS方式の画期的な「ホームビデオ」をとりあげた。「ビクターのビデオ、ベールを脱ぐ。VHS方式市販品で最も小型」(電波新聞)。「ビクター新型VTR来月発売」(日本経済新聞)。

多様化していく社会の中で、家庭生活にうるおいを与えるものとしての、また貴重な記録機器としてのビデオが果たす役割に、各界から期待が集中したHR-3300のセンセーショナルな発表会だった。





VHS、アメリカへ上陸 '77サマーCESの話題を独占

日本国内における開発発表(昭和51年9月)の余勢をかって、VHS方式によるホームビデオが初めてアメリカに上陸したのは翌52年6月4日だった。

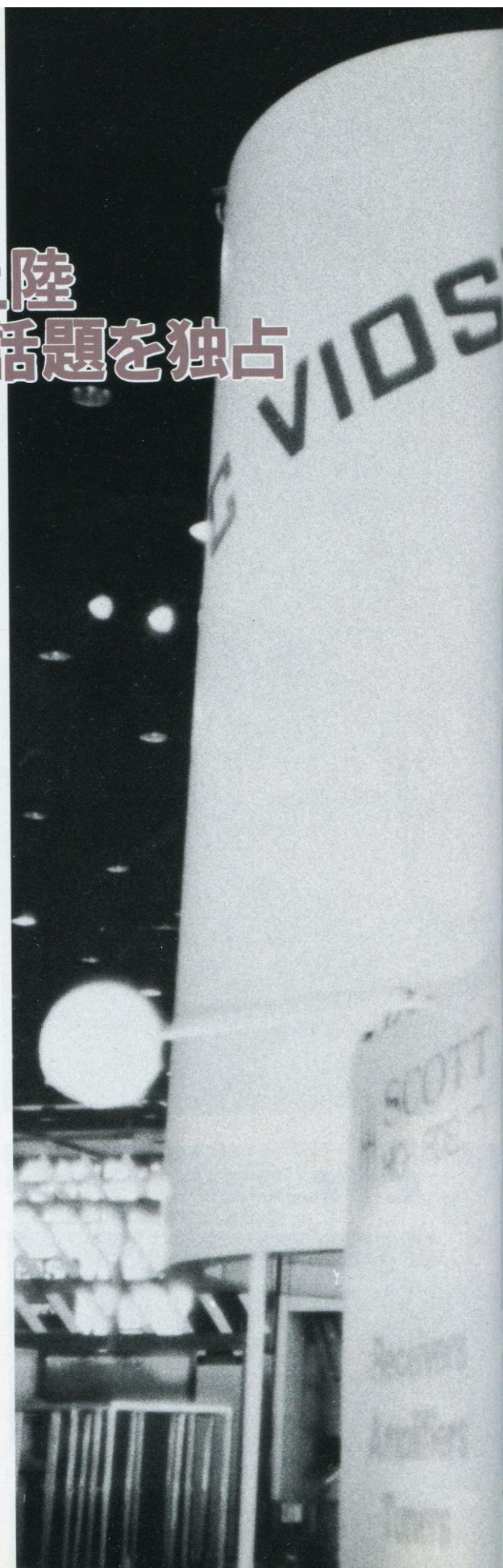
発表会場となったイリノイ州シカゴのハイヤット・リーゼンシー・ホテルには、米国を代表する一般紙、業界紙、雑誌など約50社の記者たちが詰めかけ、現地でのホームビデオに対する期待と関心の高さを裏づけた。

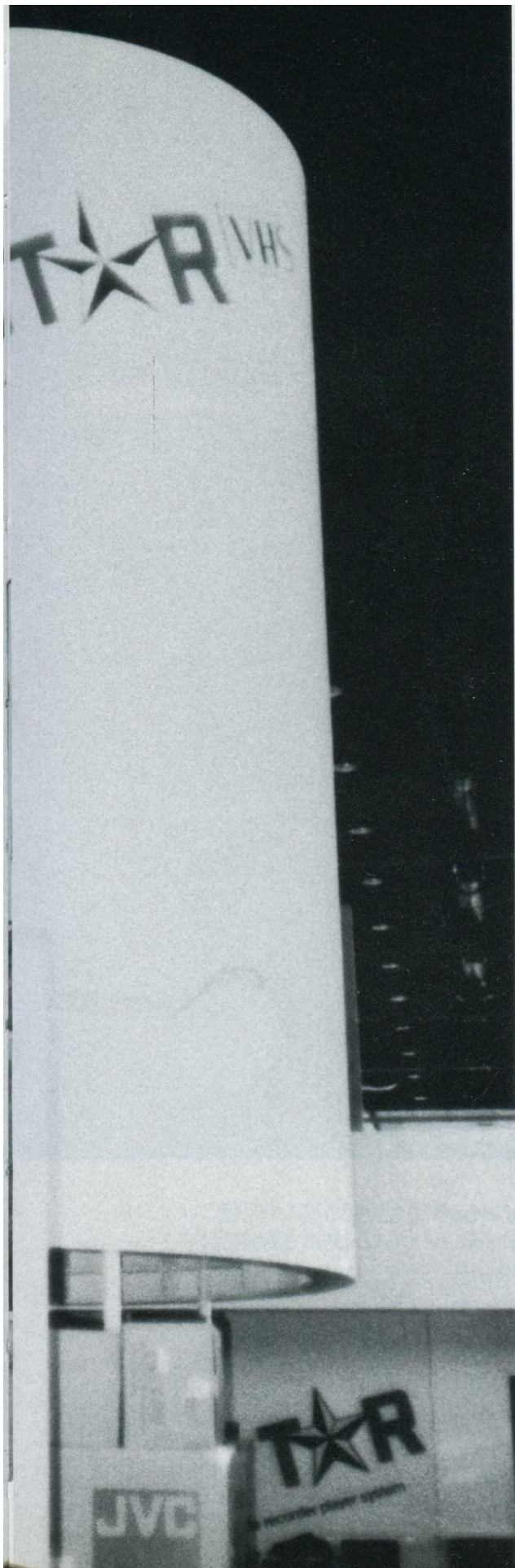
“VIDSTAR(ビディスター)”の愛称で、その年の10月発売が発表されたのは、タイマー付ビデオ「HR-3300U」と標準レンズ付ビデオカメラ「GC-3300U」の2機種。会場では、ニューヨーク・タイムズ、リーダーズ・ダイジェストなど一流紙、有名誌の記者たちが初めて目にするVHSに驚嘆のまなざし。異口同音に「情報は伝わっていたが、これほど素晴らしいものだとは予想できなかった」と、そのコンパクト性、鮮明画像、簡単操作に舌を巻く様子が印象的であった。

現地シカゴでは、引き続き翌日から業界恒例のビッグ・イベント「1977年サマー・コンシューマー・エレクトロニクス・ショー(CES)」が開催され、ここでもJVCブースの「ビディスター」は賞賛の嵐に包まれた。

唯一ホームビデオを展示した同ブースではVHS35台を一挙に公開しての大デモンストレーションを展開、期間中は終始一貫して黒山の人だかりとなった。「VHSのディーラーになりたい」の申し出も殺到、さらにTV方式の異なる欧州などからの海外ディーラーも多数訪れ「PAL方式、SECAM方式での発売はいつか」などの質問も連発されるほどであった。

こうして'77サマーCESでの話題を独占、文字どおりの大ヒットとなったVHSは、記念すべき海外進出の第一歩を飾った。





VHS6社で欧州方式の規格統一 ヨーロッパでVHSの地位を確立

昭和52年後半から53年にかけての1年は、VHSが“世界規格”としての体制固めを大きく前進させた時期である。

かねてからの米国市場進出はもちろん、ことにヨーロッパにおけるVHSの飛躍的な市場開発の波は目をみはるものがあった。

VHSの余裕ある基本設計で 実現したPAL、SECAM対応規格

昭和52年10月18日、国内のVHS採用の6社(赤井電機、シャープ、日本ビクター、日立製作所、松下電器産業、三菱電機=50音順)は、共同でヨーロッパのテレビ方式に合わせたVHSの統一規格を打ち出した。

周知のとおり、欧州のテレビ放送は日本、米国などのNTSC方式と異なるPAL、SECAMの2方式。VTRの世界的評価が高まる折から、この欧州2方式を満足させる規格統一は、まさに待望のものであった。

この新しいVHS欧州方式の基本思想は、次の3点に集約される――

- ①広範な機能(スチル、スロー、倍速再生可能)
- ②高品位の画像(優れた解像度、S/Nなど)
- ③高密度記録(ゆとりある互換性)

そして、これらはいずれもビクターがVHS開発当初より一貫して追求してきたホームビデオの基本条件を満たす“余裕ある設計”をベースに、VHS採用6社の技術力が結晶となったものだった。

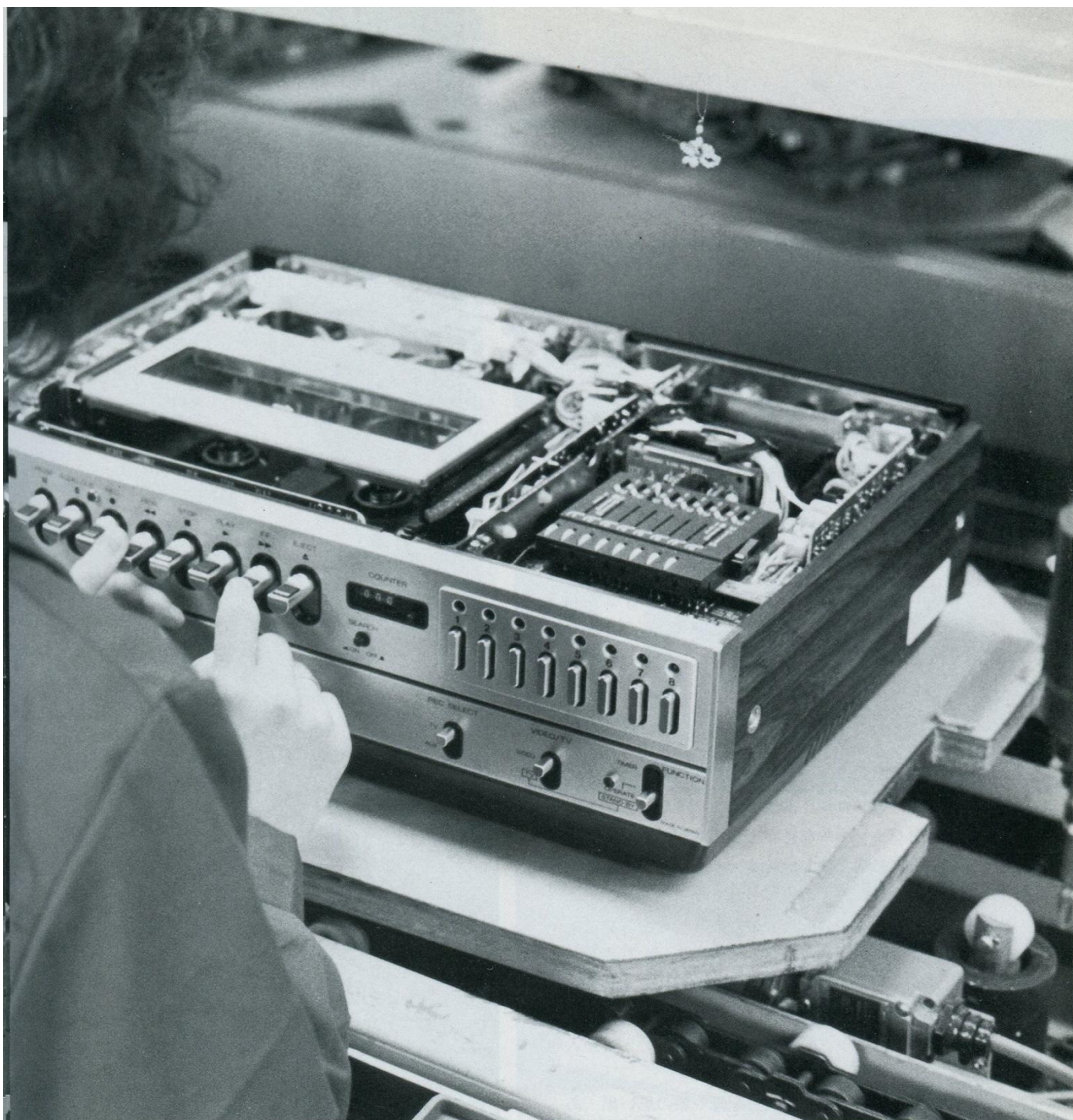
しかも、VHSの基本設計はPAL、SECAM方式において、日本のT-120カセットより、わずかに長いテープを使うだけで、3時間の連続録画再生をも可能とし、芸術やスポーツ分野など長時間のテレビ番組が多数あるヨーロッパ各国の事情にも対応したのである。

VHSの優位性に高い評価 ヨーロッパでの快進撃が続く

VHS欧州方式の規格統一が実現してからわずか1年の間に、ヨーロッパにおけるVHSの体制固めは着々と進んでいった。

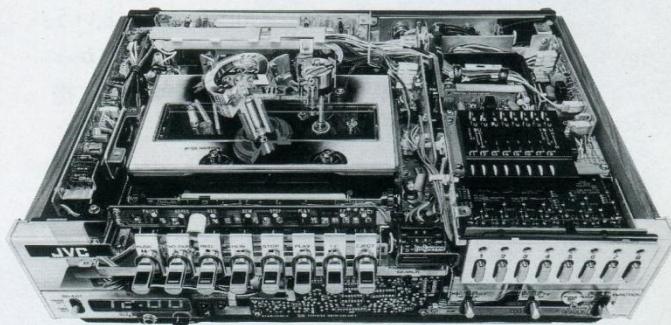
52年12月、西ドイツの有力メーカー、サバ社とのOEM供給契約を皮切りに、翌53年3月にはフランス最大の家電メーカー、トムソン・ブラント社、さらに西ドイツ、ノルデメンデ社とのOEMほか業務提携が成立。





続いて6月、イギリス最大の電子・電機メーカー、ソーン社のVHS採用の決定。さらに12月には西ドイツを代表するテレフンケン社とのOEMほか業務提携……といった具合。いずれもVHSの基本思想を高く評価しての契約成立であった。

また、この間、JVCビデオフランス、JVCドイツ、といった現地の直系販売会社も設立され、ヨーロッパでの積極的な市場開拓が実施されていた。



“ハードを売らずにハートを売ろう”で 新需要を刺激したアルバムビデオ

単なるテレビ番組の録画再生時代から、市販ソフト、あるいはビデオカメラなどと合わせシステム的に使用される時代へ——家庭用ビデオの急速な普及に伴い、消費者のあいだには、ビデオの新しい用途を受け入れる基盤が整いつつあった。

とくに、ポータブル・ビデオ (HR-4100) や 2 管式ビデオカメラ (GC シリーズ) の登場は、ビデオの究極的な楽しみ “手軽なオリジナル・ソフトづくり” への夢を刺激するに充分なものだった。そうしてこの時期、その夢への橋渡しをする重要なキャンペーンが全国規模で展開され、大いに注目を集めた。「アルバムビデオ」による販促活動がそれである。

自分自身でプログラムをつくることにより、ブラウン管をパーソナルな世界として活用できるビデオの利点。この従来にないメリットを活かした販促活動がアルバムビデオの提案であった。

“ハードを売らずにハートを売ろう” を合言葉に、電器店では各家庭のアルバムに収められた写真を収集、それぞれを一本のストーリーあるビデオテープにまとめあげた。パンありズームありで画面に動きをつけ、そのバックにはBGMやナレーションを入れてムードを盛りあげていく……。

画面に流れる各家庭の成長記録や旅の思い出、あるいは個人の半生などなど……それはまさに「自分の思い出が画となり音となって再現される」という、人間誰しもが潜在的に求めながらも満たされなかった“感動の世界”を、ビデオを媒体にして人々に提供する試みであった。

ビデオの持つ限らない効用をユーザーの心を通してアピールしたアルバムビデオづくり。その反響は、次に続く“撮るビデオ”への発展を、さらに身近なものとして裏付けることにもなった。





当時の電器店には、たいていこうしたアルバムビデオづくりのコーナーがあった



お客さまから大切な写真を預かり、感動のドラマをつくる

ビデオのことなら何でもおまかせ VIC第1号が虎ノ門にオープン

「単なる機材のショールームではなく、より幅広くビデオの楽しさを知ってもらうための場所」として昭和52年10月、東京の虎ノ門にオープンしたのが、VIC (Video Information Center) だった。

VHSビデオやビデオカメラの展示、テレシネ、ライブラリーなどの各コーナー、本格的なスタジオ施設など、ソフトづくりに欠かせない諸設備を充実させる一方で、ビギナーから中級、上級者まで、各種コース別に設けられたビデオ講座用のセミナールームも用意された。

つまりVICは、ビデオスタジオ、ダビング、研修などビデオを有効に活用するためのさまざまな設備・機能をもった“総合ビデオセンター”としてスタートしたのである。

VICは、ユーザーのための キーステーション

VICは、その後、急成長するビデオの普及に合わせ各地に広がり、現在では、北は北海道・札幌から南は九州・熊本にいたるまで、全国19か所を数えるにいたっている（他にも鹿児島と沖縄にはビデオルームを設置）。

最近では、VICをキーステーションにしたユーザー同士のコミュニケーションが発達し、後述するビデオケーション会員やビデオリポータークラブの会員同士が、地域はもとより、全国規模で“ふれあいの輪”を広げるというケースが続出している。

ビデオの楽しさを多くの人に知ってもらうための拠点として、あるいはビデオ分野の販促センターとして、一般ユーザーはもとより、販売店からも、ビデオノウハウの吸収に活用されるVICには、連日、訪れる人があつと絶たない。





急伸するVHS需要に対応して 水戸にビデオテープ専門工場完成

発売以来、“ポスト・カラーテレビ”の呼び声にふさわしく飛躍的な伸びをみせるVHSビデオ。それに伴ってビデオ・カセット・テープの需要も内外で急速に高まってきた。そこで昭和53年5月、日本ビクターでは業界トップのミュージックテープ生産量を誇る水戸工場に早くもビデオ・カセット・テープの専門工場を増設した。

白亜の新工場は一部3階建てで延べ建築面積は3600平方メートル(約1100坪)。工場内部は“大敵”のゴミやホコリを徹底的にシャットアウト。0.3ミクロン以下のチリでも1立方フィート当たり1万個以下、場所によっては100~1000個と、まるで外科手術室なみの環境にクリーンアップされた。

すべてに自動化された生産設備の中で、白衣に身を固めて働く職員の姿は、工場というより研究所といった趣き。入室の際もいったんエアシャワーで身体のホコリを除去しない限り内側のドアが開かない仕組みなど、ビデオテープの品質管理には完璧なまでの注意が払われたのだった。

年々伸長を続けるビデオテープの需要に対して増産体制を整えた水戸工場は、今日も名実ともにテープ生産の拠点として稼働中である。





青梅マラソンでも威力を発揮 ビデオによる着順確認システム

今やアメリカのボストン・マラソンと並び世界的な市民マラソン大会としてすっかり定着したのが東京の青梅マラソン。その着順確認にもVHSのビデオ・システムは威力を発揮した。

昭和42年に始まった青梅マラソンは、年々規模がマンモス化、コースとなる路上には毎回、全国各地や外国から参加したランナーたちが長蛇の列をつくるのが恒例だ。ことに参加者が一万人を超えるようになってからは、完走着順カードが手渡されるゴール前は大混乱。待機のランナーが1キロも渋滞するなど、正確な着順やタイムの判定が不可能となり、関係者を悩ませていた。

ビクターが考案したビデオによる着順確認システムが初めて導入され、そうした悩みを一挙に解消したのは53年の第12回大会だった。ゴール付近の国道に立てられた3台のヤグラにそれぞれビデオカメラ(GC-4800)をセット。折り返し点から戻ってくるランナー群を3本のレーンに振り分け、スムーズなゴール通過の模様をビデオ撮り。画面に映し出される各人のゼッケン番号とデジタル時間表示から着順とタイムを正しく判定する——まさに一目瞭然のこの試みは大成功をおさめた。

従来は1週間以上もかかっていた全データの整理はビデオの威力でわずか2日間にて完了。しかも全完走者の正確な記録が確認され、大会事務局はもとより参加したランナーたちを大いに喜ばせたのだった。

後日、この時のテープはVIC東京でも公開され大反響。参加者からはダビング依頼が殺到するなど、ここでもまたビデオの新しい可能性が大いにアピールされた。





VHSの開発思想を高らかに謳った “小さなビデオの大きな宣言。”

昭和52年3月20日。この日は日曜日で、翌日の春分の日に続く連休の初日だった。久々に朝寝坊を楽しんだ人々は、ねぼけまなこで朝日新聞の朝刊を開いて、おそらくは、眠気も吹き飛んでしまったのである。

朝日新聞の中央見開きには、なんと2面(全30段)にわたって大きな広告が掲載されていた。そして太明朝体で黒々と書かれたヘッドコピーは「小さなビデオの大きな宣言。」……。このまさにコピーのイメージそのままの大きな広告こそ、ビクターが初めて打ち出したHR-3300の、というよりVHSビデオそのものの広告だった。

全2面の上半分は、待ちにまった本格的な家庭用ビデオの登場で、暮らしがどう変わるかといったビデオの効用を説いた記事と、VHSビデオ開発の歴史とコンセプトをわかりやすく解説した記事で構成。下半分がいわゆる商品広告となっている。

新聞全2面広告というのは、現在でもそれほど多くは、お目にかかれない。まして当時としては非常に珍しく、家電業界では初の試みだった。家庭用ビデオとして、いくつかの規格が開発されては消えていった当時の状況の中で、これぞ家庭用ビデオの本命として登場させたVHS。少なくとも10年先までを見越した余裕ある基本設計、やがて世界規格となることを確信した、その自信と誇りが、この「小さなビデオの大きな宣言。」という言葉と、大きな広告にこめられていた。

1977年6月23日 日曜日 第1000号 第1000号 第1000号

広告特集

＊ビデオ・レディー＊

最先端をゆく日本の

ビデオの登場は、日本の映像文化に大きな変革をもたらした。かつては映画館やテレビが中心だった娯楽生活が、今では家庭用ビデオが主流となっている。この変化の背景には、技術の進歩と消費者の意識の変化が関係している。本記事では、日本のビデオ市場の現状と未来について詳しく解説する。

ビデオ選び、七つのポイント

ビデオを選ぶ際には、以下の七つのポイントに注意することが大切だ。

- 1. 記録方式**：VHS、Betamax、U-maticなど、様々な記録方式がある。それぞれの長短を比較検討しよう。
- 2. 再生機との互換性**：購入するビデオは、すでに持っている再生機で再生できるかどうかを確認しよう。
- 3. 画質と音質**：高画質・高音質のビデオを選ぶことで、より良い視聴体験が得られる。
- 4. 価格帯**：予算に合ったビデオを選ぶ。高品質なビデオは価格が高くなる傾向がある。
- 5. 付属品**：ビデオには、リモコンや充電器などの付属品が付属している場合がある。必要に応じて確認しよう。
- 6. 信頼性**：有名メーカーのビデオを選ぶことで、品質と信頼性を確保できる。
- 7. 返品保証**：購入したビデオが気に入らない場合は、返品保証があるかどうかを確認しよう。

ビデオ再生機

＊ビデオ・レディー＊

Victor

小さなビデオの

いったい、家庭用ビデオとは…を大切に考えたVHSビデオは、高精度の技術がコン

お茶の間に、想像もつかなかったような大きな楽しみが広がるVHSビデオ。安心してお使いいただ

- 置く場所を選ばない小型設計
- くっきりと鮮やかな映像、びずみの少ない
- 番組を1本のカセットに納まる20時間録画
- 維持費が少なくて済む28Wの
- 機構、アンプ機能、スリーブ機構、RFコンバーター内蔵、さつさ子防画

2

機能開発の時代

'79~'81

(昭和54年~56年)

●現在にも生きる基本機能を次々に採用して多様化	36
HR-3500,HR-3750,HR-4110	
●基本性能、互換性重視で登場。初の4ヘッド6時間ビデオ	38
HR-6700	
●用途に応じてシステム化。画期的なポータブルタイプ	40
HR-2200	
CAMPAIGN	
カメラ撮りの楽しさを伝えた「いきいきビデオまつり」	42
PROMOTION	
●ビデオによる映像の祭典「東京ビデオフェスティバル」大盛況	44
●市民の手づくりニュースがON AIR。発展するビデオリポータークラブ	46
●ひろかれ! 全国のビデオ仲間の輪。情報交流システム「videocation」発足	48
TOPICS	
●企業内ビデオの活性化を目ざしてビジネスビデオ・シンポジウム開催	50
●“テレビの父”に文化勲章。輝く高柳健次郎顧問の栄誉	52
●VHS開発で個人にも企業にも栄誉。エドアルト・ライン賞と機械振興協会賞	54
COMMERCIAL	
●アイデア大好評につき継続中。「夏の甲子園」ポスターキャンペーン	56
●爽やかなお色気で大ヒット。ジャニスの“ファインスロー”	57

いま 現在にも生きる基本機能を 次々に採用して多様化

'79年から'81年にかけて新たに開発され、VHS方式ビデオに採用された様々な機能には、現在でもホームビデオの基本機能として活用されているものが多い。いわばこの時期は、ビデオの“録る”楽しみ、そして“撮る”楽しみが拡大され、ビデオ時代の到来とともに不可欠になってくるビデオの本質的な機能が開発されていく時代であり、またビデオがそれらの将来につながる基本機能を獲得しながら多様化していく時代であったといえる。そしてそのことは、ビデオの用途がさらに大きく拡大されていくことでもあった。

昭和54年6月に同時発表されたHR-3500、HR-3750、HR-4110の3機種がこの多機能化の流れに先鞭をつける。これらの機種は、新開発の《ファイン・スローシステム》のほか、“撮る”ビデオを手軽に楽しめるダイレクトカメラ端子、映像と音声の立ち上がりを良くして、美しいつなぎ撮りを実現したAE機構、自動顔出し／カウンターサーチ、次のモードにすぐ移れる連続ボタン操作機能などVTRの操作性をさらに向上させた数々の機能を標準装備し、また大幅なLSIの使用などによりメカのシンプル化を図ることで、より高い品質、信頼性を得ることに成功していた。

新開発の《ファイン・スローシステム》は、それまで回転2ヘッド方式では不可能とされていた鮮明画像によるスローモーション再生を実現したもの。1/30～1/4の可変速スロー再生が可能であり、しかも再生スピードのコントロールは、各機種ともワイヤードリモコンによって離れた場所からでも操作できるようになっている。

HR-3750はスプリットキャリア方式の音声多重記録用チューナーを内蔵しており、LEDレベルインジケーター、録音レベルのマニュアル調整機能(自動／手動切り換え可能)などを搭載したステレオタイプのVTR。音声多重放送が本格化しようとしている時代に対応した機種であったといえよう。



ファインスロー&カメラ直結 ビデオカセット

HR-3500

●再生速度を変えられるスピードセレクト機構を搭載。新開発の〈ファイン・スローシステム〉によるノイズバーのない鮮やかなスロー再生が可能 ●独自のAE機構を搭載 ●7日間の番組予約ができるオン・オフタイマーとワンタッチ選局可能な電子チューナー



本格的音声多重完全内蔵タイプ

HR-3750

●スプリットキャリア方式の本格的な音声多重記録用チューナーを搭載 ●音声ノイズリダクション回路内蔵/録音レベルの自動・手動の調整可能 ●《ファイン・スローシステム》/ダイレクトカメラ端子/AE機構/LEDオーディオレベルインジケータ



鮮明なつなぎ撮りが可能 1機2役ポータブルビデオカセット

HR-4110

●シンプルなパラレルローディング方式のVHS規格で、小型・軽量、機動性にとんだポータブルタイプ ●ビデオカメラを接続しての自作ビデオソフト作りはもちろん、別売のカラーテレビチューナーTU-41型と組み合わせてTV録画も可能な1機2役のシステムタイプ ●《ファイン・スローシステム》/AE機構/ダイレクトカメラ端子



基本性能、互換性重視で登場 初の4ヘッド6時間ビデオ

ビデオ録画・再生の心臓部である磁気ヘッドに、標準、3倍の各モードそれぞれの専用ヘッドを2個ずつ備え、新開発独立専用4ヘッド方式採用したHR-6700。基本設計2時間のVHS規格を活かしながら、最大6時間(T-120使用・当時)の録画・再生を可能にした長時間モードを搭載しての登場だった。

独立専用4ヘッド方式は、標準モード(2時間)録画時のテープパターンを損ねることなく、ビデオの長時間化を実現した画期的な技術。従来の2時間ビデオとの優れた互換性を保ちながら、VHSビデオの基本性能である高画質、高音質を実現しており、ここにもVHS方式開発の基本思想は生き続けていた。この各モードに専用の磁気ヘッドを使用するという方式は、その後のVHSビデオにも受け継がれ、ビデオの使用目的や状況に合わせて使い分けられる据置型ビデオには欠かせない機能となるとともに、独立専用4ヘッドは“鮮明画像”の代名詞とも呼べる方式となった。

このビデオの長時間化も、また時代のニーズに応えたものであったといえよう。それはひとつには、テレビ録画やオリジナルの映像作りが盛んに行われるようになり、次第にビデオテープの使用量が増加してくるにしたがって大きくなってきたテープコストに対する要望、つまりテープの経済性という点で。もうひとつには、この頃から本格化に拍車がかかりはじめたテレビ番組の長時間化による大作映画(『影武者』、『地獄の黙示録』など)のノーカット放送や、スペシャル・ドラマの放映などを1本のテープで録画したいというビデオユーザーの声に応えたという点で。いずれも、その後(昭和57年4月)発売されたT-160テープとともに、テレビという情報を伝達し娯楽を得るためのメディアと、ビデオとを組み合わせることによって、映像情報を自由に操る楽しみが、多くの人々に理解され始めたこの時代にマッチしたものであった。

結論—6時間ビデオは4ヘッド。

ビデオにとって大切なこと、それは録画した映像を「鮮明」に再現することです。

ビデオの生命は何といっても「鮮やかさ」です。たとえ好きな番組を録画しても、それが鮮明な映像で再現できなければ、楽しさも半減します。ビクターのVHS方式ビデオは、この「鮮やかさ」をはじめ、「使いやすい」「大きさ」「経済性」など家庭用ビデオに考えられるあらゆる条件を考慮して開発されたビデオ。その基本性能の良さは国内はもとより、海外でも高く評価されています。

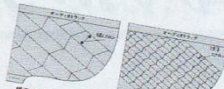
VHS方式ならではの優れた技術の数々が鮮明画像で2時間録画・再生を実現しました。

現在、家庭用ビデオのほとんどが回転2ヘッド方式による録画・再生方式を採用しています。この回転2ヘッド方式とは、ビデオテープに映像信号と音声信号を記録(再生)する方式です。ビクターVHS方式ビデオ

この基本構造をベースに(アジマス記録方式)と呼ばれる映像信号の超高密度記録技術や、映像信号のクロストークを無くしたPSカラー方式などを採用するとともに、独自の開発による(DL-FM方式)を採用、ノイズの少ない鮮明な画像で、一定の長さのビデオテープに最長2時間の録画・再生可能という高性能を得ています。

あらたな長時間録画へのニーズに、ビクターは基本設計重視の(4ヘッド設計)で応えます。

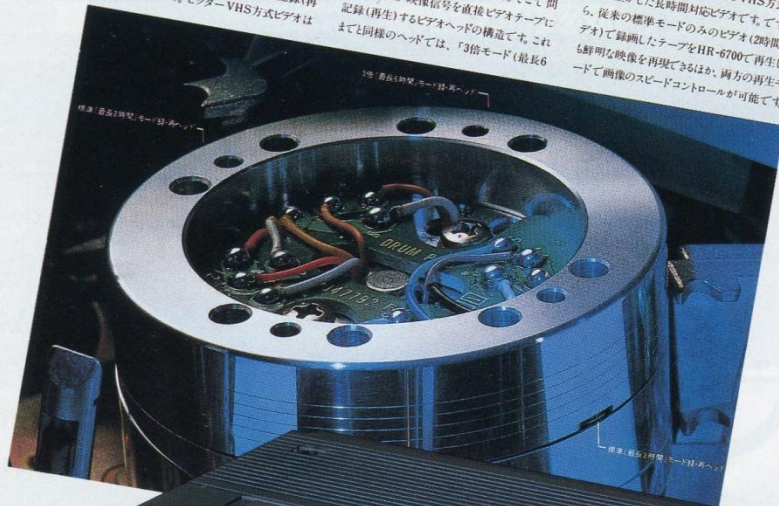
ビクターVHSビデオのビデオトラック(映像信号が記録されるトラック幅)は58ミクロン。つまり記録していくことによって、一定のビデオテープで最長2時間の鮮明映像を得ている訳です。しかし、これと同一のテープに6時間分の映像を記録すると、ビデオトラックはその3分の1、つまり約19.3ミクロンとなります。そこで問題になるのが映像信号を直接ビデオテープに記録(再生)するビデオヘッドの構造です。これまでと同様のヘッドでは、「3倍モード」(最長6



時間録画)ではトラック3本分を同時に再生してしまい、映像を美しく再現することができません。そこでビクターは、これまでの回転2ヘッド方式にあらたに「3倍モード」専用ヘッドをプラスした(4ヘッド設計)を開発。「標準モード」(最長2時間録画)でも「3倍モード」でも鮮明な映像を楽しむビデオを実現しました。

4ヘッド設計により、従来の標準モード(2時間ビデオ)機との互換性にも優れています。

HR-6700は、基本設計2時間のVHS方式の良さを生かした長時間対応ビデオです。ですから、従来の標準モードのみのビデオ(2時間ビデオ)で録画したテープをHR-6700で再生しても鮮明な映像を再現できるほか、両方の再生モードで画像のスピードコントロールが可能です。



4ヘッド・6時間録画ビデオ HR-6700

●VHS規格との互換性を生かしつつ、新開発の4ヘッド方式により6時間録画・再生が可能●標準・3倍のどちらのモードでも再生スピードが自由に変えられるスピードコントロール機構●IW6Pのランダム予約プログラムタイマー内蔵●《ファイン・スローシステム》/AE機構/ダイレクトカメラ端子

用途に応じてシステム化 画期的なポータブルタイプ

“機能開発の時代”に開発され、採用された新しい機能は、VHS方式ビデオが本来持っている小型・軽量、長時間、鮮明画像という基本条件をベースに、多様化し始めたビデオユーザーの幅広いニーズに応えるべく開発されたものであり、VHSビデオの可能性の大きな広がりをお語るものであった。

昭和55年6月に登場したポータブルビデオHR-2200は、まさにこうした多様化するニーズに対応した画期的なベストセラー機である。本体重量4.4kgと、大幅な小型・軽量化を実現したポータビリティ設計の中に、10倍速の正・逆シャトルサーチ機構、ファイン・スローシステム、録画ロック機構などの豊富な機能を盛り込んだHR-2200。このVTRが現在でも根強い人気を持ち続ける人気機種であるのは、多機能であることに加えて、4モーターとマイコン制御によるフルロジックコントロールシステムやフルリモコンの採用によるやさしくて確実な操作性を持っていることが、その要因であるといえるだろう。

そしてもちろん、VHS方式による鮮明な画像と音作りへの配慮によって、ソフト作りのコアとなるVTRにふさわしい質の高い基本性能を備えていたこと。さらに、90分で急速充電ができるカートリッジタイプのワンタッチ着脱式バッテリーや、据置型としての使用も可能にしたシステムチューナーTU-22など、多彩な関連アクセサリをそろえ、その人の使用方法、目的によって自由に組み合わせることができるコンポ感覚のシステム性を持っていたことも見逃せないポイントである。

本機の高性能と使い勝手の良さは、かつてポータブルビデオ市場にいち早く参入したことによって蓄積した多くのユーザーの声、情報を十二分に活かして改良点としてフィードバックし、市場のニーズをしっかりと把握したうえで、初めて生み出されたものといえよう。

ポータブル・ビデオカセット
HR-2200

●FRP(ガラスファイバ強化樹脂)採用等による大幅な小型・軽量化(4.4kg)を実現した世界最小のポータブルタイプ ●4モーターとマイクロコンピュータ制御によるフルジョグコントロールシステム採用によるフェザータッチの軽快な操作 ●ポータブルタイプで初の10倍シャトルサー機構を採用/新開発D-Dヘッドモーター採用/ファイン・スローステム/3電源タイプ ●パワースイッチ・録画ロック・過放電防止回路などの省電力設計 ●チューナーアダプターTU-22など、自由に組み合わせられるコスト感覚のシステム性



いまビデオはよりアクティブに――
精度と使いやすさがきわだつハンディポータブルビデオシステム、新登場!!

[illegible]

カメラ撮りの楽しさを伝えた 「いきいきビデオまつり」

「暮らしにビデオを」をメインテーマに、多くの人々に気軽にビデオを楽しんでもらうことを目指して開催されたのが、「いきいきビデオまつり」だった。

皮切りの会場となった池袋サンシャインビルでは、500坪という広いスペースに300台ものビデオ機器を設置。単一機器のイベントとしては最大規模のものとなった。

とくに、この催しでは、カメラ撮りにも重点が置かれ、撮る楽しさを存分に体験してもらえるよう会場の設営にも工夫がなされた。

それまでのビデオ展即が、とかく量の展示に終始していたのに対し、質の展示へと方針を変更、ビデオライフの展開に重点を置いた催しだったのである。

「いきいきビデオまつり」は、ひき続き福岡、近畿、北海道、神奈川、東海、京浜地区と全国展開。各地の会場では、それぞれ地域の特色を生かした趣向で、ビデオの楽しさがアピールされた。

たとえば「ケン玉」や「モグラたたき」などの遊びを取り入れ、動きのある画面をその場で再生してウケた苫小牧会場(北海道)。子ども中心のコーナーを設けて、そこで遊ぶ姿を撮ってもらい、家族連れの人気を集めた和歌山会場などなど。

各イベント会場でとくに目立ったのは、お母さん方や中高生の若い人達が、お互いに連れの人を撮ったり撮られたり、そしてそれをその場で見て、ドッと歓声をあげるといった光景だった。多数の参加者に、ビデオの楽しさを文字通りハダで伝えたという点で、このイベントはその後の「体験販促」に大きな影響を与えた。





ビデオによる映像の祭典 「東京ビデオフェスティバル」大盛況

新しい映像づくりの手段としてのビデオに注目し、その普及、育成を旨とし、ひいては映像文化振興の一端を担うことを目的に企画、開催されたのが、「東京ビデオフェスティバル」(TVF)である。

昭和54年3月の第1回大会応募総数は257点。そのうち、海外からの作品が24点を数えるなど、第1回から国際色豊かな大会となった。年齢的にも、下は14歳から上は63歳までと幅広く、社会的に広まったビデオ撮りの裾野の広さを物語った。

栄えある第1回大賞受賞作品は、神奈川県川崎市立御幸中学校・放送部制作の『走れ!江の電』。市民に親しまれているローカル私鉄電車への愛着が、四季おりおりの風景をバックに描写され、そのみずみずしい感性が受賞の理由となった。

また、自分だけの映像を通して今までの生き方をふり返った浅野良一さんの『名もなき村の名もなき生は』、同時録音だけの編集で独特の味わいを出した小林正彦さんの『蓬』^{よもぎ}が、ともに特選に選ばれるなど、各作品とも個性にあふれ、プロにない感動を与えるものとして高い評価を受けた。とくに大賞受賞者が中学生だということで、ビデオはプロとかアマといった区別を超えた最も身近なメディアであることを多くの人々に認識させることとなった。

また、新しい映像メディアの出現に、各マスコミもこぞって注目し、TBS「テレポート6」、フジTV「小川宏ショー」、日本テレビ「11PM」などが相次いで特集を組んだ。

このTVFは、応募点数も年々増加。国際色も豊かになり、昭和60年の第8回大会では応募総数1,413点のうち海外作品は517点にものぼっている。

また昭和57年2月には、フランスのパリにおいて「日本ビデオフェスティバル」が開かれ、TVFの作品が多数紹介されるなど、いまやTVFは国際的にも認められた映像の祭典として知られている。





← 江の電をバックにVサイン。御幸中学放送部のスタッフ

市民の手づくりニュースがON AIR 発展するビデオリポータークラブ

テレビ録画主体の“録って見る”から、カメラを使って“撮って見る”——VHS開発当初からのポリシーであるビデオ本来の特質、「創造性」がユーザーの間で顕著な進行を見せ始めたのは昭和53年頃からだった。ちなみに、この年のカラービデオカメラの生産量は12万5千台で、前年に比べ3倍強も伸びたといわれる。

こうしたホームビデオの普及に呼応し、時を同じくして既成の放送局においても従来になく新しいタイプの番組が出現し始めた。昭和53年、名古屋のUHF局中京テレビが『6時のニュース』の枠内に設けた“あなたもビデオリポーター”のコーナーがそれである。つまり一般視聴者が自作のビデオ映像で番組づくりに参加するという、世界でも類をみない極めてユニークな試みだった。

「視聴者の側に埋もれているニュースを、視聴者自身の視点で報じてもらおう」

この大胆な発想を支える“手づくりニュース部隊”が、地元市民で組織される「ビデオリポータークラブ(VRC)」の存在であった。

地域のニュースはもちろん、トピックス、祭り、スポーツ、趣味etc……それぞれがごく身近な話題をビデオに収め、そのテープが公の電波に乗ってオンエアされるというこの新趣向は大きな反響を呼び、スタート以来、全国のテレビ局から問い合わせが相次いだ。やがてその波はビデオによる映像文化の浸透とともに全国各地のテレビ局と地域周辺のアマチュアビデオファンを巻き込み、全放送エリアの8割をカバーするなど、当初の予想をはるかに上回る発展を遂げる。

現在では、地元放送局と日本ビクターの共同運営によって、全国12の地域で活発なビデオによるレポートが一般ビデオファンの手で展開中。しかも最近では単なるオンエアだけにとどまらず、地域それぞれが独自の企画を打ち出して様ざまな活動の中からビデオの楽しみを実践に移している。

潜在人口を含めれば、今や「ビデオリポータークラブ」のメンバー数はたやすく割り出せない数字になったといっても決して過言ではないだろう。



58年2月には全国のVRC連絡会が開かれた

中京テレビ「6時のNEWS」で あなたのビデオ作品をオン・エア!!



あなたもテレビカメラマン

ビデオリポータークラブ 会員募集中!

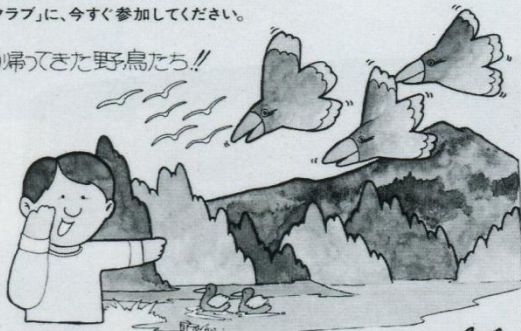
「ビデオリポータークラブ」は、会員の皆さまがビデオに録画した、身近なニュースや話題を、中京テレビ「6時のNEWS」でオン・エアするという画期的なクラブです。もちろんビデオ撮影技術講習会や、ビデオ撮影ツアーなど楽しい企画も盛りだくさん。あなたのビデオライフを広げる「テレビリポータークラブ」に、今すぐ参加してください。

こんな作品をお寄せください。

● ツチノコ発見!! (ボク等はツチノコ研究会)



● 帰ってきた野鳥たち!!



● わが村の奇祭・珍祭



● 持タネスワープ!
現場の実況録画を。

● 子供たちの遊び場には危険がいっぱい。



(こんなところでしか
遊べない子供たち)



くわしくは当店でおたずねください。

 Victor 日本ビクター株式会社

ひろがれ、全国のビデオ仲間の輪 情報交流システム「videocation」発足

昭和56年6月。業界で初めて、会員制によるビデオ愛用者の情報交流システムがスタートした。名づけて「Videocation(ビデオケーション)」——ビデオとコミュニケーションを合成したその造語が示すように、全国に浸透したビデオ仲間の輪を広げよう、というのが大前提のテーマであった。

ビデオの普及とともに消費者の知識や体験が急速に増え、生活環境の多用化に応じた新しいビデオの利用技術の欲求が一段と強まる状況を捉えた「ビデオケーション」システム。それは、単にハードを売るだけをよしとせず、一貫して消費者の暮らしに夢とうるおいを提供しようという、VHS開発当初からの基本姿勢を反映する活動のひとつでもあった。

会員に定期的に届けられるビデオ情報交流誌『Videocation』には、ビデオやカメラの新しい使いこなしと利用技術の向上、仲間との交流、より身近なビデオへの接近等々、ビデオによる豊かな生活環境づくりを提案する編集方針が貫かれ、その誌面を軸としてユーザーとメーカーが直接に、しかも双方向のコミュニケーションを持ちながら結びつく——その具体的な手段として、「ビデオケーション」には次のような会員メリットが設けられた。

- 全国のビクタービデオセンター「VIC」の機能及び設備の優先利用
- 販売店単位の自主企画(ビデオファンクラブ等)の併設
- 所有のビデオやカメラを不慮の事故から守る「動産保険」への自動加入(業界初)

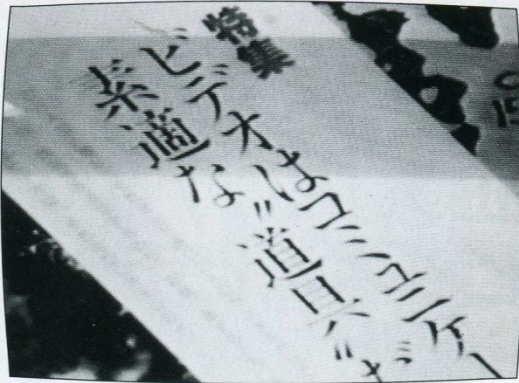
ビデオの可能性の追求を目的に、消費者情報を吸収しつつ、新たな使いこなし情報を送り返すことで、映像に関心のあるすべての人々とビデオを通して“新しい関わり方”を求めていくこの情報交流システムも、発足以来すでに5年。ビデオ仲間の輪は各地で着実に広がり続けている。

「表現」とは、国語辞典的にいえば、心に思ったことを言葉や色や音や態度など、何らかの形によって表わすこととす。しかし実際には、私たちが心に思ったことを何らかの形に表わそうとするときは、ただ形にするだけでなく、無意識であれ意識的にであれ、何かを前提としています。たとえば文章を書くとき、そこには「読む」という行為が前提としてあります。同じように、話すという行為には聞くという行為、音で表現するという行為には聴くという行為、色や態度で表現するという行為には見るという行為が前提となっています。いいかえれば、読む人、聞く人、見る人……を前提としているのです。つまり何かを表現したいときには、必ず「誰か」を特定する必要がある。不特定多数であれ、に伝えたい、自分の表現したものによって誰かとコミュニケーションしたいという欲求がひそんでいるのは事実です。とすれば、より正確に伝えるためには、相手に何も伝わらないからです。自分の想いをただ形にしただけでは、相手に何も伝わらないからです。ビデオによる表現も同じことです。私たちがビデオで何かを撮るという行為には、必ず「誰か」に見せたい、見る人に何かを伝えたいという欲求があります。どうすれば相手により正確に、自分の想いを、感動を伝えられるか。今回はその問題を考えてみましょう。

vid
ビデオ情報交流



ビクターのビデオケーシング活動は、NHK
テレビでも紹介された



企業内ビデオの活性化を目ざして ビジネスビデオ・シンポジウム開催

情報伝達に、コミュニケーションに……年々、活発化していく企業内でのビデオの積極的な活用——そうしたニーズを先取りして、業界初の大規模な意見発表会が開かれたのは昭和55年11月のことだった。題して「第1回ビジネスビデオ・シンポジウム」（日本生産性本部主催、日本ビクター後援）。初の試みにもかかわらず、当日の会場には各企業から250名にも及ぶ参加者が席を埋め、企業のビデオに対する関心の深さをうかがわせた。

シンポジウムは、まず「ビジネスビデオ活性化のために」と題した講演でスタート。文字+音+映像に加え、送り手の感情や感覚まで盛り込めるビデオ独特のメディア性と、その機能が組織のパワーアップにもたらす数々の利点について説明された。

引き続き行なわれた参加者からの直接データの吸収では、ビジネスビデオの現状について問題提起、それぞれの回答、疑問、悩みについて分析が行なわれるという趣向。

さらに事例発表会では、各企業がビジネスビデオの具体的な活用手段をレポート——ビクターのビデオ事業部からも「工場人員採用と定着性をめざして」の発表があり、工場で働く従業員のナマの声や姿をビデオに収録、郷里の父兄に見てもらおう、といった活用法が大きな反響を呼んだ。

その他、独自のニュース番組をビデオで制作、放送し、自社に関連の深い社会情勢を社内に伝達する商社、あるいは全国の販社に向け、販促のための市場情報を定期的にビデオで送るメーカー……などなど、職種の違いを超え、ビデオが様々な形で企業の生産性に貢献する姿が浮き彫りにされたのである。

こうして「ビジネスビデオ・シンポジウム」は第1回にして、企業内におけるコミュニケーション・ツールとしてのビデオの可能性を、より明確に示唆する極めて有意義な研究発表の場としてスタートした。





分科会の会場では、熱のこもった事例発表が行われた



“テレビの父”に文化勲章 輝く高柳健次郎顧問の栄誉

日本政府は昭和56年度の文化勲章受章者のひとりに日本ビクターの高柳健次郎顧問を決定した。

これは“テレビのタカヤナギ”として世界的に知られる高柳顧問の多年にわたるテレビジョン研究に対して贈られたもので、前年の文化功労者としての顕彰に引き続く栄誉。今日のテレビ文化発展の基礎を築いたその偉大な業績に、業界はもとより各方面から多大な賛辞が寄せられた。

高柳顧問がテレビジョン研究を志したのは、ラジオさえ日本にまだ存在しなかった大正12年、神奈川県立工高教諭時代のこと。たまたま横浜の書店で見かけたフランスのアマチュア雑誌に空想の産物として描かれた“テレビ”のポンチ絵(マンガ)がきっかけであった。

「いま流行のテーマでなく、10年20年先に欠かせないものを研究すれば、必ず世の中のためになる」という恩師の言葉を天啓と受けとめ、テレビの開発に着手したのだった。

そして、ついに大正15年。世界で初めてブラウン管を使った画面にイロハの「イ」の字を映し出すことに成功した。が、それはまだ実用的な画像からはほど遠いものでもあった。「将来のテレビは走査線が400本以上の高級な方式でなければならない」と考えた高柳顧問は、さらにブラウン管の改良、積分方式映像など、多方面に精力的な研究を重ねていった。

昭和8年、ツボルキン博士のアイコノスコープ(撮影用真空管)発明を機に一気に脚光を浴びた、この「高柳式テレビジョン」こそ、今日のテレビ時代の基盤を築いた画期的な開発技術に他ならなかったのである。

一方、VTRの開発においても高柳顧問の先見の明は光り輝いた。昭和30年、ビクターにて開発に着手した世界初の2ヘッドヘリカルスキャンVTRがそれだ。当時、アメリカで開発されていた4ヘッド

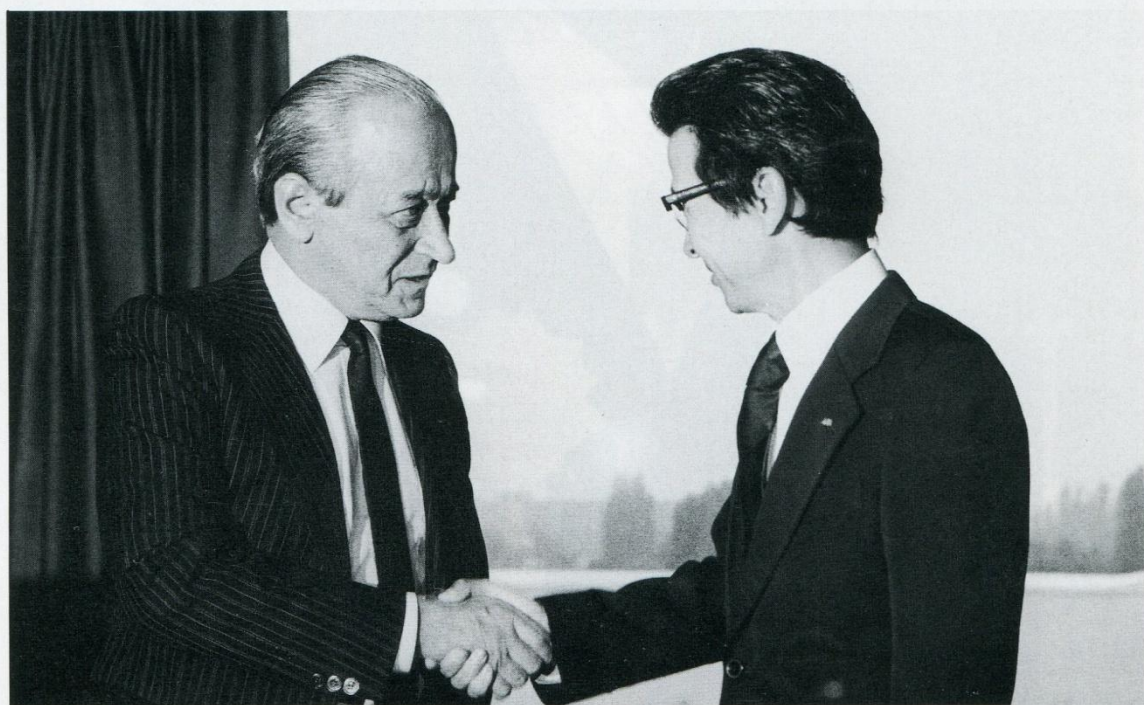


VTRの欠陥を補い、さらに数段の進歩を獲得した2ヘッドVTRは、その研究に4年の歳月を費やした後、KV-1型として陽の目を見た。そしてこの完成こそ、現在、世界のトップレベルをゆくVHSビデオ開発の足がかりともいえるものだったのである。

純白カラー、VHS、VHD……と続く日本ビクターの映像技術における源泉を創り出した高柳健次郎顧問には、まさに“映像文化の父”という称号こそふさわしいのかもしれない。



VHS開発で個人にも企業にも栄誉 エドアルト・ライン賞と機械振興協会賞



栄誉ある賞をエドアルト・ライン氏より手渡され、同氏と固い握手をかわす白石部長

西ドイツの著名な物理学者であり、優れたジャーナリストでもあるエドアルト・ライン氏が、世界のテレビジョン技術開発をいっそう促進させるために'76年に設立した「エドアルト・ライン財団」。同財団がテレビジョン技術開発で顕著な成果をあげた技術者に贈る「エドアルト・ライン賞」の第1回目の授賞者のひとりに、昭和54年3月、日本ビクターの白石勇磨開発部長（現取締役研究開発本部次長）が選ばれた。

'77年度（昭和52年度）には授賞対象者がなかったため、今回が初めての授賞となったものだが、この賞はいわば「テレビジョン技術開発分野のノーベル賞」ともいうべきものだけに、その第1回目の栄誉に輝いたことは意義深く、このニュースは業界紙だ

けでなく、一般紙にも取り上げられた。

白石開発部長の受賞理由は、「2時間以上の録画の要求に応え、実用的な家庭用ビデオテープレコーダーシステムへの道を開拓した」というもの。これに先立つ昭和53年には、白石部長を中心とするVHS開発グループに対し、日本テレビジョン学会から「テレビジョン技術振興賞」が贈られているが、まさにVHSビデオの設計思想が世界的に認められたわけである。

白石部長は今回の受賞に関して「受賞はたいへん名誉なことですが、これは私個人でなく、日本ビクターを代表して頂いたものです。VHSの完成に力を尽くした、会社のいろいろな部門の人たちに、一緒に喜んでいただきたいと思います」と語った。



表彰状を受ける矢道社長と広田開発部次長

ビクターのVHSビデオに 機械振興協会賞

昭和56年11月。日本ビクターのVHSビデオが、財団法人・機械振興協会(岩田式夫会長)の栄えある第16回「機械振興協会賞」を受賞した。

通産省と日本経済新聞社の後援で昭和47年から実施されているこの機械振興協会賞は、産業界における最高の権威を持つ賞といわれ、すぐれた研究開発とその実用化で日本の機械工業技術の進歩向上に著しく貢献した人や企業に与えられるもの。

従って、賞の性格から表彰は重工業が主対象であり、民生機器関係の受賞は極めて異例のことでもある。この年の第16回は、各工業会・学会などから推



薦の45件のうち10社の10テーマを選定、その中でビクターのVHSホームビデオは「ファインスロー機能を有する多機能VTRの開発」として選ばれた。

VHS方式の開発発表から5年。この受賞により、VHSビデオが広く民生用電子機器の主役として活躍、さらにはわが国の産業界への貢献度も併わせて公的に高く評価されたこととなった。

アイデア大好評につき継続中 「夏の甲子園」ポスターキャンペーン

夏の風物詩として、今や国民的行事のひとつに数えられるのが「夏の甲子園」——すなわち「全国高校野球選手権大会」だ。毎年毎夏、ブラウン管の前では全国の膨大なファンが1個の白球が生むドラマに酔い、球児たちの全力を尽くした爽やかなプレイに熱い声援を送る。

この晴れ舞台にターゲットを合わせ、ビクターが大規模なポスター・キャンペーンを展開したのは昭和54年の第62回大会から。甲子園出場校のネームを大きく扱ったイラストによる大型ポスターのキャッチフレーズは、

「感動、ビデオで撮る甲子園」

「興奮、ステレオで見る甲子園」

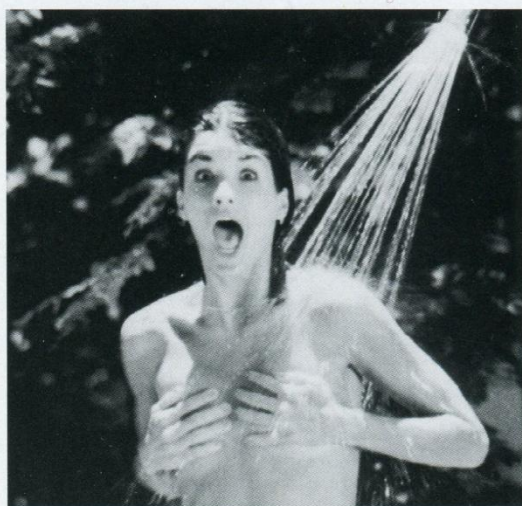
と、ビデオ新時代にふさわしいアプローチ。全国各地の主要駅や学校周辺、さらに店頭でもアピール

され、その的を射たユニークな試みが大いに注目を集めたのだった。

大好評のこのポスター・キャンペーンは、現在も毎年展開中で、優勝校の地元はもとより、全国都道府県で引っぱりダコの人気である。



爽やかなお色気で大ヒット ジャニスの“ファインスロー”



昭和54年から55年にかけて、ビクター・ビデオの新技术“ファインスロー”を強力にアピールしたテレビCMが話題を呼んだ。

ブラウン管に登場したのはニューヨークの超売れっ子モデル、ジャニス・ディキンソン嬢。「ハッ」とする爽やかなお色気で視聴者の目をクギづけにしたのはこんな2編——

〈シャワー編〉緑いっぱいの庭の一隅、干してあるシーツの向こうでシャワーを浴びるジャニス。と、突然シーツがハラリ……

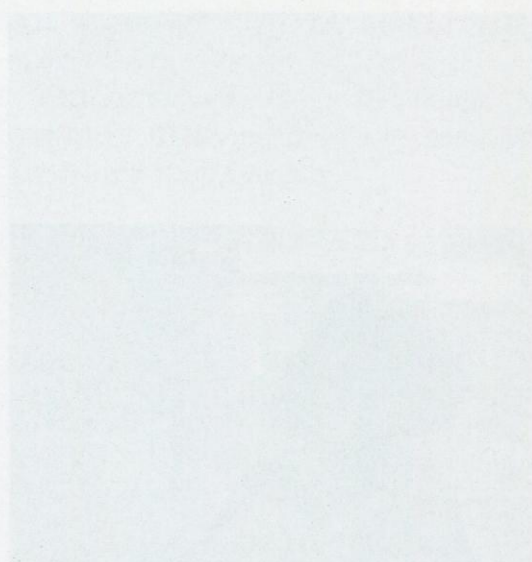
〈スカート編〉海辺のジャニス。風のいたずらでワンピースのすそがフワリ……

いずれも“ファインスロー”でもういちどゆっくりの商品コンセプトが訴えられ、世の男性心理をほのかにくすぐった。

オン・エア後には「こんどはいつ?」「ポスターはないのか」の問い合わせも殺到、翌年にはジャニスがカンガルーにKOされる〈ボクシング編〉も制作され、ビデオでくり返し楽しむ“決定的瞬間”のオモシロさが茶の間に伝わった。

COMMERCIAL

アイデア本好きは長き歩みで 「夏の甲子園」に矢張りスパン



「夏の甲子園」に矢張りスパン

「夏の甲子園」に矢張りスパン

「夏の甲子園」に矢張りスパン

「夏の甲子園」に矢張りスパン

「夏の甲子園」に矢張りスパン

「夏の甲子園」に矢張りスパン

「夏の甲子園」に矢張りスパン

「夏の甲子園」に矢張りスパン

「夏の甲子園」に矢張りスパン

「夏の甲子園」に矢張りスパン

「夏の甲子園」に矢張りスパン

「夏の甲子園」に矢張りスパン

「夏の甲子園」に矢張りスパン

「夏の甲子園」に矢張りスパン

「夏の甲子園」に矢張りスパン

「夏の甲子園」に矢張りスパン

「夏の甲子園」に矢張りスパン

「夏の甲子園」に矢張りスパン

「夏の甲子園」に矢張りスパン

「夏の甲子園」に矢張りスパン

「夏の甲子園」に矢張りスパン

③

用途拡大の時代

'82~'84

(昭和57年~59年)

●使いやすさを徹底追求した大型カラー操作ボタン	60
HR-7100,HR-D120	
●AV時代の高音質・高画質。VHSハイファイ方式ビデオ	62
HR-D725	
●ビデオ空間を大きく広げたVHSコンパクト方式	64
HR-C3	
●“撮るビデオ”時代の幕開け。VHSビデオムービー登場	66
GR-C1	
PUBLICATION	
●ビデオの用途を飛躍的に拡大したVHSコンパクト方式の登場	68
●一体型ムービー時代の到来。GR-C1ついに登場	70
WORLD	
●VHS世界進出が本格化。日独英合弁の「J2T」稼動開始	72
●西独でもVHSテープを生産。「JVCマグネテープ社」設立	74
AGREEMENT	
●フランスの最大手電機メーカー、トムソン社と技術援助契約	76
●アメリカでもVHSの地位確立。ゼニス社とOEM契約	78
●ハイファイでも規格統一。VHS方式で10社が合意	80
DEVELOPMENT	
●HR-C3を月産30,000台。順調に稼動開始した横須賀工場	82
CAMPAIGN	
●素朴な疑問に答えて大ヒット。「親切なデンキ屋さん」	84
TOPICS	
●世界のジャーナリストも集まったビクター創立55周年総合展	86
●国賓として来日のペルチーニ伊大統領、横浜工場を見学	88
●G大賞受賞、そして南極探検と話題独占のCITYJACK	90
●高野専務、国内外で最高の栄誉。“マン・オブ・ザ・イヤー”と“藍綬褒章”	92
COMMERCIAL	
●戸きんさい きんさい、戸わしらのビデオは「CITYJACK」	94
●ほのぼのタッチで“使いやすさ”をPR。石原真理子の「サ」のつくビデオ	95

使いやすさを徹底追求した 大型カラー操作ボタン

ビデオの普及率が10%を越えると、伸び率はそれまでのゆっくりとしたカーブから急激に加速され、ビデオユーザーのピラミッドは急速に拡大していく。そのピラミッドの頂点となる機種として、高画質・高音質を極め、多機能化を果たしたマニア志向の最高級機が求められ、また一方で着実に人気を高めつつあった“撮るビデオ”にも、より手軽なハンドリング性が求められてきたのが、この時代である。

そうした中で、ビデオの楽しみは、かつてのビデオマニア層から女性や子供、お年寄りへと広がっていった。そして、4ヘッドによる高画質をベースにしたクオリティ追求傾向のなかでも、誰にでも簡単に操作ができ、家族全員で楽しめる普及時代のビデオ作りが求められるようになってきた。ビデオユーザーのピラミッドの底辺拡大の動き、いわば本格的ビデオ大衆化時代の訪れである。

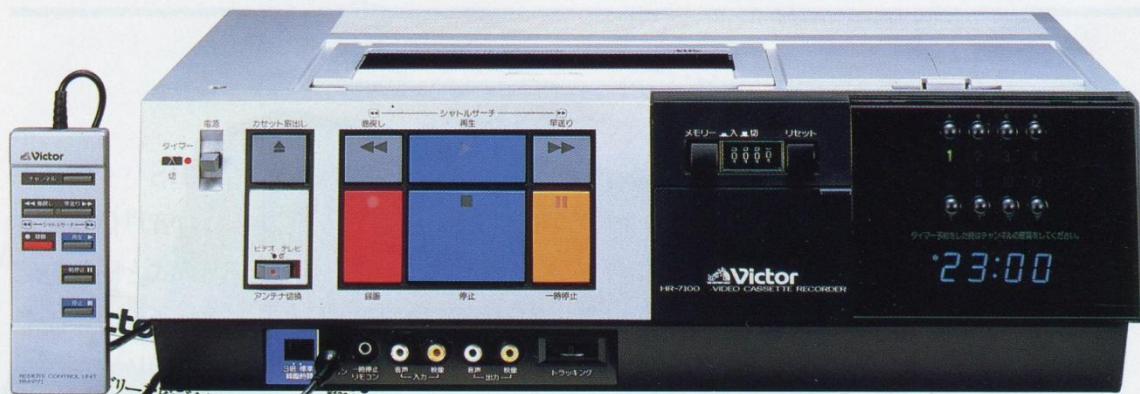
この大衆化のテーマを商品として具現化したのが昭和57年10月に発表されたHR-7100であった。初めて女性の手によってデザインされたこの機種は、大型でわかりやすくファッショナブルなカラー操作ボタンや、誰にでもすぐに覚えられるタイマー操作など、それまでのビデオが持っていた、いかにもマニア好みでメカニクな印象と趣きを異にする、ビデオ大衆化時代に求められる“親しみやすさ”を持つ“普及タイプビデオ”のはしりだった。

この使いやすさ、親しみやすさを徹底追求していくデザインの思想はその後さらに発展し、色と形で機能を表わすピクトグラム(○△□の図形表示)の採用につながっていく。世界共通の機能表示であるこの記号を、そのまま操作部に活かしたピクトボタンは、翌58年7月に登場したHR-D120で初めて採用され、以後、ピクトサインとして普及タイプのみならず、高級機の表示部にも使われ、使いやすさを象徴するものとなる。

ファッショナブル・ビデオカセットー

HR-7100

●鮮明な映像の4ヘッド8時間設計●各操作が色で区別され、押し間違いの少ないフェザータッチのカラフルで大きな操作ボタン●シャトルサーチ機構●美しい静止画再生とコマ送り再生●録画終了時刻だけを設定して録画できるスリープ機構●同時刻同番組の毎日繰り返し予約もできる10日間！プログラムタイマー



フリー・ビデオなんでも
15分・30分・1時間・2時間・3時間・4時間・6時間・8時間の予約が可能。録画の自由度を高める。ビデオの特性

¥139,800
(新発売)



使いやすさ・鮮やかさ・便利さ・ほんとに
うれしいことだらけです。



使いやすさをカタチにした

HR-D120

●使いやすさをカタチにしたピクトボタン採用と豊富な表示機能を持つマルチディスプレイ装備●標準・3倍のどちらのモードでも鮮明画像の4ヘッド設計●2WIPの録画予約タイマー／ワンタッチタイマー装備●録画予約のミスは「タイマー」点滅で知らせる親切設計●AEF機構／ビデオ・オーディオ端子／画質調整ツマミ／オートリワインド



AV時代の高音質・高画質 VHSハイファイ方式ビデオ

昭和58年7月、10社統一規格として発表されたVHSハイファイ方式は、音声専用回転ヘッドによって、FM変調された音声信号をビデオテープの深層部に記録し、その上に従来のVHS方式と同様の配置の映像信号を記録していく、深層記録方式とよばれるもの。従来機との互換性を保持しつつ、マルチヘッドなどの最先端技術を駆使して、ビデオの音質を飛躍的に向上させるエポック・メイキングな技術だった。

同年12月に発売されたVHSステレオハイファイビデオの第1号機HR-D725は、ハイファイの高音質に加え、新開発エクストラ4ヘッドとダイナミックアパコン回路の採用による高画質と充実した基本性能を持っていた。さらに業界初のサイマルキャスト機構、正逆方向17通りの多彩な特殊再生機能、従来のステレオタイプビデオと互換性を保ち、アフレコも可能なステレオノーマル音声、簡易インサート機構、モード予約も可能な2週間8プログラムタイマーなどのフル機能を、しかもそれぞれに高性能を極めて搭載した本機は、まさに“ホームビデオの最高峰”と呼ぶにふさわしいビデオだった。

“THE VIDEO”の称号を冠されたこのビデオは、すべてのビデオファンの手による、作品作り用、ライブラリー用、市販ソフト再生用など、あらゆる用途のためにフルに活用できるマスター機として、記録的なロングセリングを誇った。また、長時間でしかも高音質が求められるコンサートライブなどの記録など、ビデオの新しい活用法を生み出したほか、厳しい耳を持ったオーディオマニアからも高い支持を得て、オーディオデッキとして活用されただけでなく、AV(オーディオ&ビデオ)という新たなジャンルを確立した。

ホームビデオの可能性をさらに大きく広げたハイファイビデオの出現により、ビデオは家庭情報・娯楽の主役機器へと大きく変貌を遂げていく契機となった。

これからのビデオはどうあるべきか、という問いに
ビクターは、この一台でお答えします。
全身、未来形。ステレオHi-Fiビデオ(HR-D725)。



THE VIDEO

①ビクターステレオHi-FiビデオカセットVHS
HR-D725 ¥298,000 (ワイヤレスリモコン付属)



VHSステレオハイファイビデオ HR-D725

●高音質記録・再生の「ステレオハイファイVHS方式」を採用●エクストラ4ヘッドとダイナミックアバコン回路の採用による録画・再生画質の向上●17通りのスピードプレイが両モードで可能(8種のスローモーション、6種のシャトルサーチ、ファインスチル、コマ送り、逆転)●業界初のサイマルキャスト記録・再生●2W8Pの予約タイマーは録画モード予約も可能/ワンタッチタイマー装備●ステレオAFM/簡易インサート機構●カメラ直結端子●再生時の画質コントロール機能/自動頭出し機能/AEF機構/テープ残量表示/オートイジェクト/オートリワインド/ハイファイ専用・音声ミックス出力端子

ビデオ空間を大きく広げた VHSコンパクト方式

ビデオが人々のライフスタイルのなかに定着していったこの時期は、ユーザーそれぞれが自分の生活や趣味の道具としてビデオを使いこなす、ビデオのマルチユース化時代といえる。

こうした時代のニーズに応えたVHSコンパクト方式は、単に軽い、小さいというだけでなく、あくまでも鮮明な画像、高い信頼性・操作性という従来のVHS方式の基本思想の上に立って開発された。この方式を採用して商品化されたコンパクトビデオカセットHR-C3は、実に特許39件、実用新案96件にも及ぶ新技術を導入することにより、VHS方式との互換性を維持しながら、本体重量2kg、容積比37%(当社比)という驚異的な小型・軽量化を実現している。

さらに、同じコンセプトによるコンパクトビデオカメラGZ-S3は、重さ1,250gの超小型・軽量ボディに、TPOを問わず、誰もが最高の画質で手軽に撮影できる充実機能と使いやすさを収めたもの。また、続いて発売されたGZ-S5は、イメージセンシング方式TCLオートフォーカスセンサーにより、ピント合わせ不要のスナップ感覚のビデオ撮影を可能にした。これらのカメラで採用されたレンズグリップスタイルのデザインは、以後、ビデオカメラのスタイリングの主流を占めることになる。

さて、このHR-C3とGZ-S3/S5をシステム化したコンパクトビデオシステムが“CITY JACK”である。専用のショルダーフレームを使っての一体化や豊富なアクセサリによるシステム化も可能な、この“CITY JACK”の登場によって、ホームビデオは時間、距離、場所などの制約から解放され、その楽しみ方、使用範囲、被写体を飛躍的に拡大することになる。

“CITY JACK”という愛称は、全国から寄せられた9万余の一般応募から決定されたもので、タレントの小林克也をフィーチャーしたCMとともに大きな話題を呼んだ。

●VHS方式と互換性のあるVHSコンパクト方式の採用により、世界最小・最軽量の本体重量 2 kgを実現 ●クイック着脱方式採用のバッテリーなど3電源タイプ ●録画の確認が確実なオートクイックレビュー採用 ●AEF機構/録画ロック機構/パワーセーブ回路/テープ残量表示/シャトルサーボ機構



ビデオカメラが手のひらにあれば、
ほら、楽しさまでもフリースタイル。
これさえあれば、女性たつてババークになる。

●カメラ撮りの楽しさをさらにひろげるアクセサリ

“撮るビデオ”時代の幕開け VHSビデオムービー登場

昭和58年。VHSビデオをめぐる環境は、ビデオの目覚ましい技術革新による商品開発の急進展、使用者の多様化、用途に合わせたビデオの複数所有の伸長などによって急速に拡大しつつあった。こうした時代を背景にしてVHSビデオムービーGR-C1は登場する。そしてそれは、まさに“撮るビデオ”というビデオ新時代の主役のデビューであった。

ビデオムービーの開発の基本コンセプトは、“いつでも、どこでも、誰にでも”をキャッチフレーズに、気軽に、しかも確実にビデオ撮りが楽しめるということだった。これはホームビデオが年齢や性別に関係なく楽しまれるようになり、さらに、ビデオの本来の姿であるコミュニケーション・メディアとしての働き、すなわち自分が撮った映像を介して家族や友人と交流することへの欲求が顕在化してきたことに応えたものといえる。

優れた互換性や性能を持つVHSコンパクトビデオと高性能カラービデオカメラを一体化したGR-C1は、再生機能はもちろん、AEF機構、マクロ機構付き6倍パワーズームレンズ、シャトルサーチ機構、各種オート機構などの多彩な機能を搭載。しかも、口径41φの小型シリンダー、新4ヘッド順次記録方式、270°巻き新パラレルローディング方式などの採用によって、本体重量はわずか1.9kg。ビデオの入門者からベテランまで、誰にでも簡単にビデオ撮りを楽しむことができる高性能、高操作性を獲得しつつ、また家庭内から旅先まで、どこへでも手軽に持ち運びができる小型・軽量化を実現したのである。

このVTR一体型ビデオカメラの出現で、“撮るビデオ”の人気は急激に高まり、“ムービー人口”が増えるにしたいがい、多くの人々が自分達の手による映像でブラウン管を自由に使いこなす新しい時代が到来する。

ビデオの用途を飛躍的に拡大した VHSコンパクト方式の登場

ビデオが普及するにつれ、自らカメラ撮りを楽しむファンの数も次第に増え、成長スナップ、旅行、結婚式、地域の文化活動と、気軽にビデオを活用する機会が増えてきた。

そうした、いわば“ビデオを使いこなす時代”に応じて登場したのが、VHSコンパクト方式ビデオだった。

まず、昭和57年7月、軽くて小さいハンディータイプのビデオカセットーHR-C3が登場。

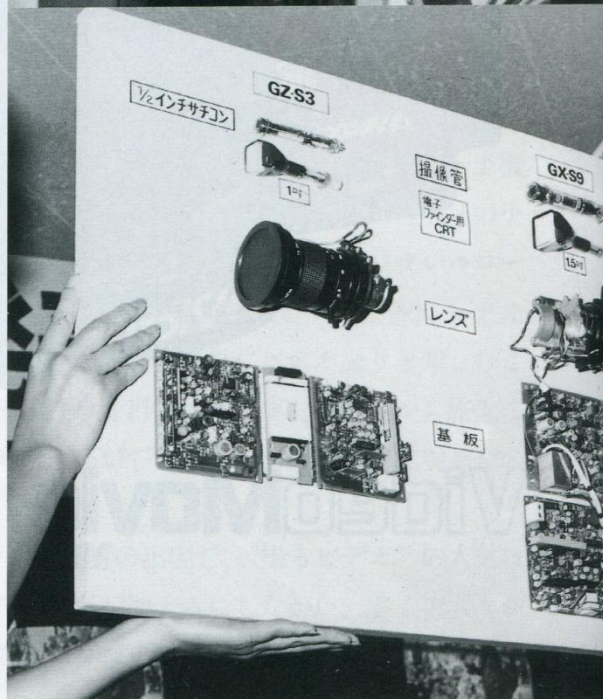
従来のカセットテープの約3分の1という小型サイズながら、鮮明な映像とVHSとの互換性を備えた“VHS-Cテープ”の採用によって、それまでのポータブル機HR-2200より、容積で37%、重さで45%と大幅に小型軽量化。持ち運び自由自在のコンパクトビデオとしてビデオライフの空間をひろげたのである。

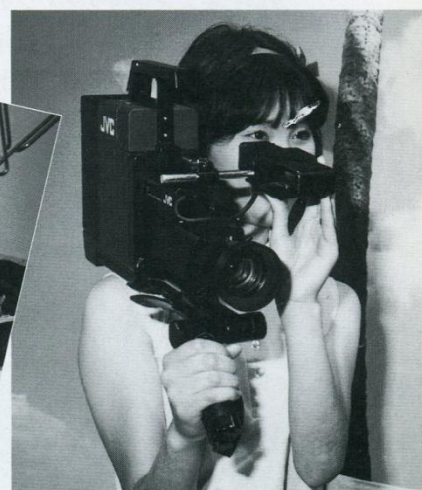
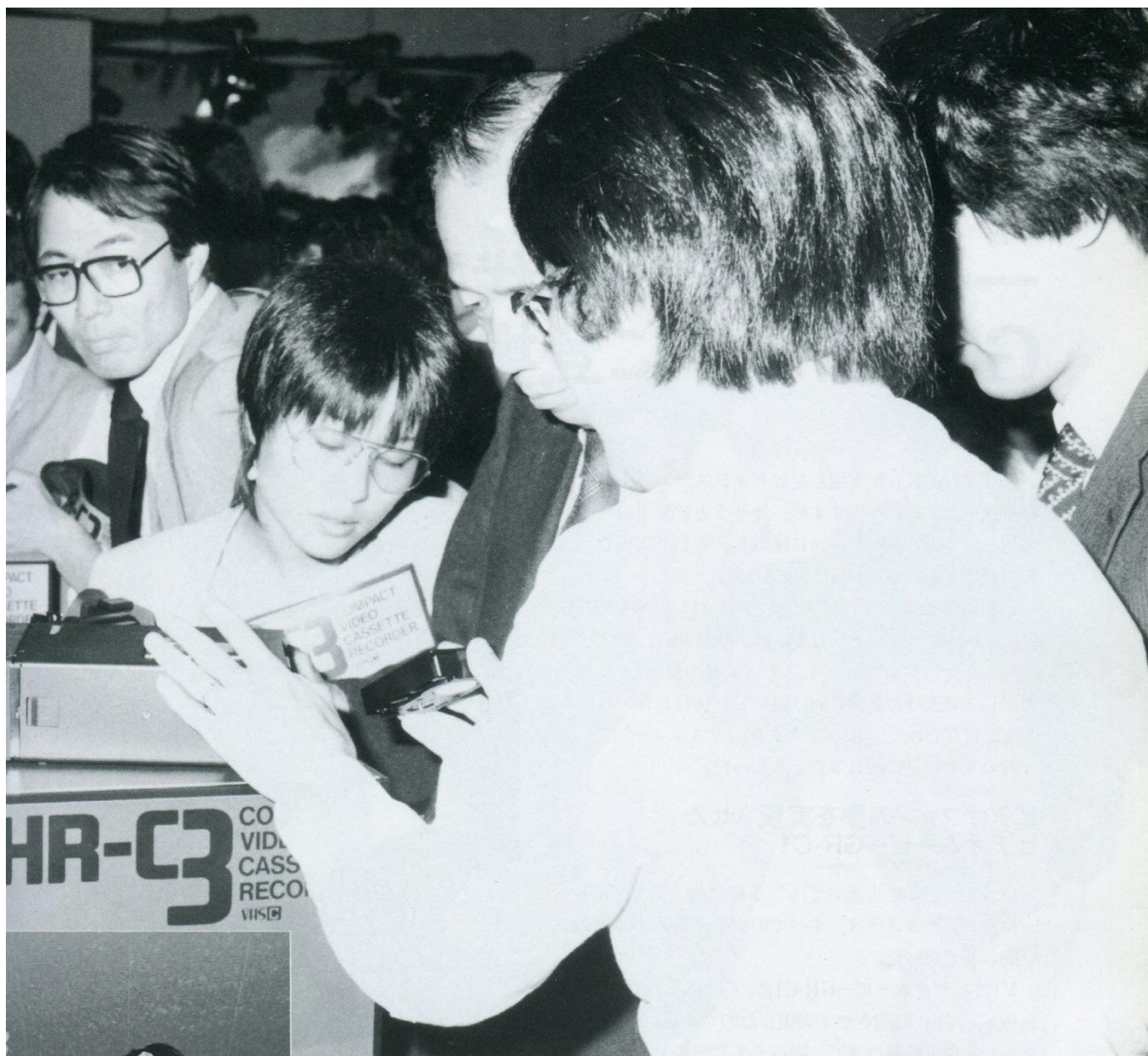
ワンハンドビデオシステム “CITYJACK”の誕生

続いて、昭和57年8月には、超小型コンパクトカメラGZ-S3が登場。HR-C3と組み合わせた小型軽量ビデオシステム「CITYJACK」が誕生した。GZ-S3は、サチコン管採用による高品位画質と、バイアスライト採用による低照度撮影を実現。しかも片手でレンズグリップをにぎって、すべての操作が集中して行なえるという、ワンハンドビデオとしての高い機能性を持っていた。

またそれまで困難とされてきた一般家庭の電灯下での撮影や夜景、結婚式などの撮影も手軽に行なえるようになった。

“録るビデオ”から“撮るビデオ”へ。VHSコンパクト方式による画期的なワンハンドビデオシステム「CITYJACK」の登場で、ビデオの用途はまた飛躍的に広がったのである。





HR-C 3 の発表会では一体型の構
想も披露された

一体型ムービー時代の到来 GR-C1ついに登場

「CITYJACK」が実現したビデオシステムの小型軽量化を、さらに一歩すすめて、カメラとビデオの一体化という未曾有のテーマに挑戦し、そして実現したのがビデオムービーGR-C1だった。

昭和58年9月2日、西ドイツで開かれた「ベルリンショー」でデビュー。日本では、9月28日、ホテルニューオータニでのハイファイビデオHR-D725のプレス発表時に公開され、続いて、10月6日から大阪で行なわれた「'83エレクトロニクスショー」で一般の人々の目に触れることとなった。

ビデオファンの夢を実現させた ビデオムービーGR-C1

“いつでもどこでも誰にでも”手軽に扱えるVTR一体型ビデオカメラは、すべてのビデオファンの長い間の夢であった。

VHSビデオムービーGR-C1は、その夢を、わずか1.9kgの本体に凝縮させて実現したのである。

しかも再生機能つきで、撮ってすぐ映像のチェックができるビューファインダー、ケーブルのわずらわしさを解消した一体型設計、お年寄りやメカに弱い女性にも簡単に扱える操作性など、高機能を満載していた。

またAV出力端子をつけることで、VHSビデオ愛好者だけでなく、他の規格のビデオを持っている人にも、あるいはビデオを持っていない人にもカメラ撮りの楽しさが味わえるよう親切な設計が施された。

ビデオムービーGR-C1は、最も身近な映像メディアとして、手軽にスナップ感覚でビデオ撮りができる時代を切り拓いた。





VHS世界進出が本格化 日独英合併の「J2T」稼働開始



ヨーロッパにおけるエレクトロニクス業界の名門として名高いイギリス・ソーンEMI社と、西ドイツ・テレフンケン社、そしてビクターの3社による合弁会社「J2TホールディングスB・V」が昭和57年3月に設立され、その生産部門として開設された「J2Tビデオ」のベルリン、ニューヘイブン両工場が、それぞれ5月と10月に、相次いでVHSビデオの生産を開始した。

西ドイツ・テレフンケン社は、カラーテレビ、ラジオ、音響製品などで世界的に有名な企業。

一方、ソーンEMI社も、イギリスにおけるテレビ音響機器の指導的なメーカーとして世界に知られた

企業。

そこにビクターが加わって、強力なトリオを組み欧州における高品質ビデオの供給に本格的に乗り出したのである。

日欧間の経済摩擦解消にも 「J2T」は大きく貢献

古くから電子産業の中心地として知られているベルリンの町にオープンした「J2Tビデオベルリン」では、3本のラインで稼働を開始。各部品が、いかにもドイツらしい手固さで次々と製品に組み立てられ、450人の従業員によって、月産2万台のVHSビデオ

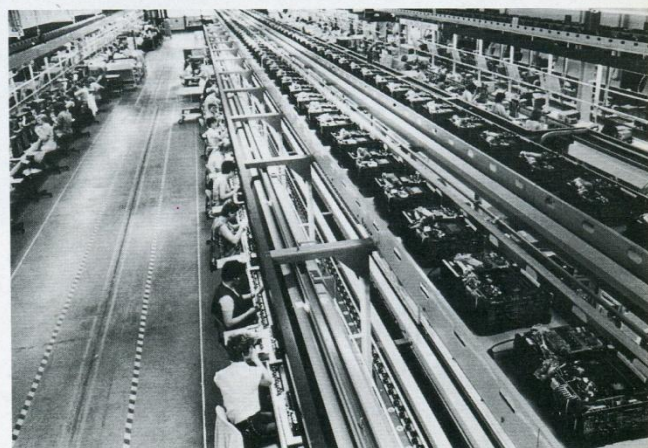


が生産された。

一方、ロンドン郊外の「J2Tビデオニューヘイブン」では、月産1万台の生産規模でスタート。

「J2T」は、合弁2社の経営と両工場従業員の雇用の安定に貢献しただけでなく、日欧経済摩擦を解消し、新しい企業間協力の好例を示すものとして各国から称賛された。そして業界各社が、これを手本にして現地生産に取り組む契機ともなった。

より多角的な国際協調体制を整えて、VHSビデオは、いよいよヨーロッパにおける本格的な生産に入ったのである。



西独でもVHSテープを生産 「JVCマグネテープ社」設立

西ドイツ、デュッセルドルフからライン河を渡って車で1時間ほど走ると、壮麗な大聖堂をもつ美しい地方都市の、メンヘングラートバッハ市に着く。10世紀に、修道院を中心とした町づくりが行なわれ、その後、綿織物などの工業で発展してきた町である。

その、メンヘングラートバッハ市に、海外初のVHSビデオテープの生産会社「JVCマグネテープ GmbH」社が設立され、昭和58年5月、操業を開始した。

近くをアウトバーンが走り、工場の背後には広大な森林公園がひろがるという絶好のロケーション。総面積66,000平方メートルの同工場は、年間300万本の生産規模でスタートしたのである。

JVCのイメージアップに はかりしれない効果

同工場の完成はそれまでヨーロッパのユーザーたちを悩ませていたVHSテープ不足を一掃し、JVCテープの占有率をいっそう高めると同時に、深刻な不況に悩んでいた西ドイツ経済に対し、雇用促進、地域振興に効果を上げ、ひいては対日貿易摩擦の緩和につながると、各方面から高い評価を受けた。

「地域社会に適合し、公害を避け、できるだけ多くの材料を西ドイツで入手し、良い職場環境を提供する」という同工場の基本方針は、現代的な産業の誘致を進めてきた地元の人々からも暖かく迎えられた。

先に行なわれた西ドイツテレフンケン社は、イギリスソーンEMI社との合弁生産開始につづく「JVCマグネテープ」社の設立で、テープ供給の面からもバックアップが約束され、名実ともに、VHSのヨーロッパ体制が確立したのである。

JVCが国際企業として発展していくためのひとつのエポックとして、多くの意義を持つ操業開始だった。





盛大に開かれた開所式典。紅白の幕がいかにも日本的だった

日本流地鎮祭でクワ入れするボルツェニウス市長



フランスの最大手電機メーカー トムソン社と技術援助契約

昭和58年4月、フランスの最大手国有電機メーカー、トムソン社との間に、VHS方式ビデオのメカ部分の生産に関する技術援助契約が結ばれ、日仏同時に発表された。

もともと、昭和53年のVHS方式によるOEM供給以来、親密な関係にあったトムソン社ではあったが、先に行なわれたビクターとソニーEMI、テレフンケン社との3社合弁「J2Tビデオ」が順調にVHSビデオの現地生産を開始し、製品品質と事業経営姿勢に称賛が寄せられていたこともあり、合意にいたったもの。

そこには、すでにその優秀さでは定評のあるVHSで業績向上を図ると同時に、自社技術のレベルアップを図るというトムソン社の積極的な姿勢があった。

日仏間の経済にVHSが 切り拓いた新しい時代

具体的には、まずVHSの組立てに必要な部品づくりに始まって、「J2T」に供給しながら次第に技術レベルをあげ、ECが欧州製品として認定する基準（構成部品の75%以上が域内生産）まで範囲をひろげ、やがてはVHSの完全自社生産をめざすというものであった。

調印後、トムソンS.A.社のゴメス会長は、それまでのいきさつを振り返りながら、「まわり道をしたが、結果的には最も正しい選択になりました」

と述べ、ヨーロッパにおけるビデオ業界の将来に大きな期待をかけた。

それまで、とかくスムーズにはかどらなかった日仏間のVTR問題を、一気に解消したトムソン社との契約だった。





アメリカでもVHSの地位確立 ゼニス社とOEM契約

RCAとならんで、アメリカでもトップクラスといわれる家電メーカー、ゼニス社とのVHS方式ビデオのOEM供給契約が合意に達し、昭和58年12月、正式に調印が行なわれた。アメリカの企業としてはこれが初めての提携であった。

ゼニス社は、アメリカ国内で有数の電子、電機業界の代表的企業。

米国市場において、VHSの占有率がますます高くなってきたため、おりからの景気回復いちじるしい経済環境をバックに、ビデオ産業へのいっそうの振興をはかるべく、この契約に踏み切ったのである。

業界で指導的な立場にあるゼニス社の参入によって、アメリカ国内のVHS方式ビデオの普及には、いっそう拍車がかかった。

調印にあたって、ゼニス社販売部門の代表であるジェラルド・M・マッカーシー氏は、

「アメリカの消費者および小売店の希望に応える商品を販売したいという当社の意志を強く示した結論です」と、提携にいたった背景を説明した。

VHSこそ家庭用ビデオ の世界規格

調印後、ゼニス社では、さっそく据置型ビデオ、ポータブルビデオ、ビデオカメラ、あるいはVHSビデオムービーなど、幅広いビデオ関連用品の販売を開始。据置型ビデオだけをみても、CATV、衛星放送など数多くのチャンネルが楽しめるアメリカだけに、大幅な需要の拡大が約束されたのである。

すでにイギリスソーネEMI社、フランストムソン社、西ドイツテレフンケン社をはじめとする世界各国の主要企業と技術提携を結び、家庭用ビデオの世界規格として築き上げたVHSの地位をいっそう高め、不動のものとしたゼニス社との調印だった。





ハイファイでも規格統一 VHS方式で10社が合意

ビデオの音質を飛躍的に向上させるハイファイビデオに関しVHS採用メーカー10社は、昭和58年7月27日、VHS方式による規格統一に合意した。

ハイファイビデオとは、従来、専用の固定ヘッドで行なわれていた音声の記録を回転ヘッドで映像トラックに記録、音の革命といわれる高いクオリティーをもつハイファイサウンドを実現したものだ。

その場合、映像トラックに記録された音声信号と映像信号が干渉しあっては意味がない。

そこで、回転ヘッドに、新たにハイファイ音声専用ヘッドを搭載し、まず、ハイファイ音声専用ヘッドがテープ深層部に音声を記録、続いて、映像ヘッドが表層部に映像を記録するという“深層記録方式”をとった。これは、画質をそこなうことなく、高品位の音が記録、再生できるという画期的な技術として、高い評価を受けた。

オーディオファンも 思わずナットクのHi-Fi音声

ハイファイビデオの登場によって、ビデオの音質が飛躍的にアップ。デジタルオーディオに迫るハイファイサウンドが楽しめるようになった。

音楽番組を録画する、続々発売されるハイファイ音楽ソフトを楽しむ、あるいはオーディオデッキとして使用するなど、ビデオの用途を一挙に拡大した。

まさに“聴くビデオ”にふさわしいハイファイビデオの登場。しかも、あくまでもユーザーの立場に立って、統一された規格のもとに発表されたVHSハイファイビデオの誕生は、VHSビデオの可能性をさらに大きく広げるものであった。





HR-C3を月産30,000台 順調に稼働開始した横須賀工場

なだらかな丘陵を背に、目の前に湘南の海が広がるという恵まれた自然環境のもと、テクノロジーの最先端を結集させて、昭和57年11月、横須賀工場が完成した。現在は普及型VHSビデオの主力工場であるが、発売以来、爆発的な人気を呼んだVHSコンパクトテープ採用のHR-C3専用工場としてスタートしたのである。

総面積19,470㎡。1ラインの全長は約120mで、1台のHR-C3を組み立てるのに要する時間がわずか30分、という高生産性を誇っていた。

当初、1ラインで操業を開始した横須賀工場だったが、やがて需要の拡大にともなって4ラインへと規模も拡大。HR-C3を月産20,000台、据置型のHR-7100を月産10,000台という生産能力を持つにいった。

環境アセスメント認可第1号 地域にとけこんだ横須賀工場

“安全と品質第一”をメインテーマにかかげた横須賀工場は、HR-C3の心臓ともいえるドラム部分の組立て工程を自動化したのをはじめ、静かでスムーズな搬送ライン、半導体組立て工程の自動化などを実現し、随所に最先端技術を活かした専用工場として年々その生産能力を高めていった。

同時に、横須賀工場は、地域にとけこんだ企業として環境整備にも力を注ぎ、FAラインの搬送コンベアに、トリプル・フリーフローチェーンを採用して低騒音、低振動環境を実現するなど、随所にキメ細かな配慮をみせた。

神奈川県が環境保護のために施行した「神奈川県環境影響評価条件」、いわゆる環境アセスメントの施行後認可第1号に選ばれ、注目を集めたのも、そうした努力が実を結んだ結果であった。





素朴な疑問に答えて大ヒット 「親切的デンキ屋さん」

ホームビデオの普及率が20%を超えた昭和58年の暮れ、ひとつのキャンペーンが街中の話題をさらった。

「親切的デンキ屋さん」キャンペーンがそれである。

4軒に1台ずつビデオを所有する時代に突入しながら、一方では、いざビデオを買う段になって、「果たして、どんなビデオがいいのか」「どの機種を選んだらいいのか迷ってしまう」という、ユーザーの側の混乱と不安があったのも事実。

そんな心理をたくみについた「親切的デンキ屋さん」キャンペーンでは、とくにユニークなTVコマーシャルが話題となった。

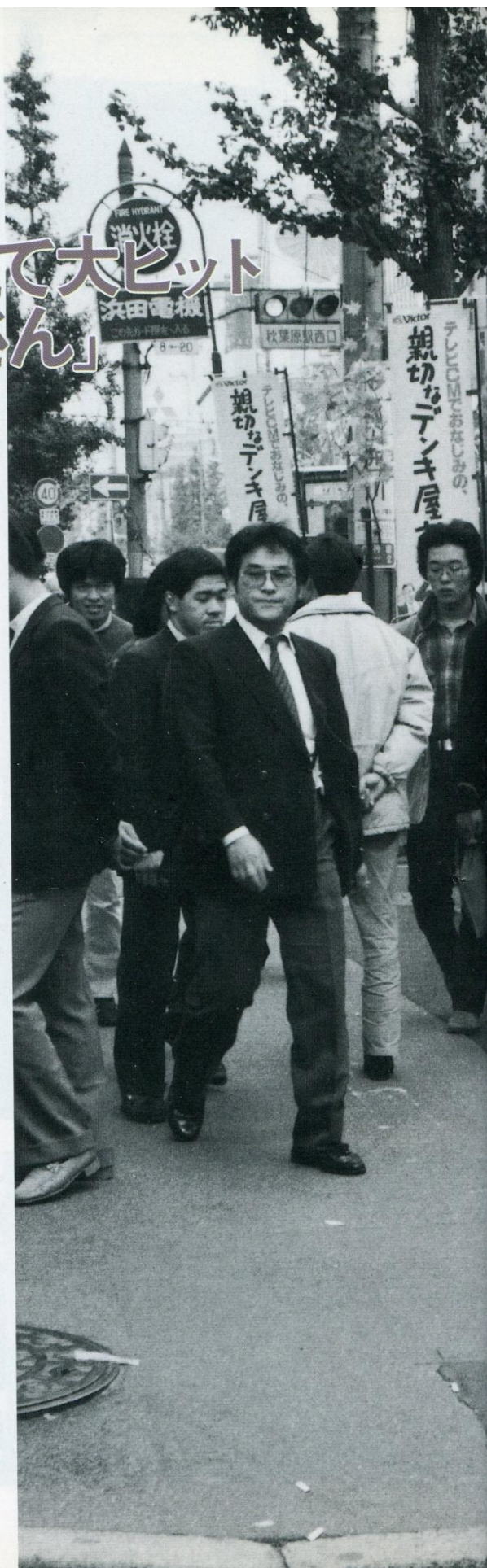
まず、ブラウン管に女の子があらわれて、「あの一、ビデオは4ヘッドがきれいって、ホントーですか」

と、問いかける。それに対して、あるときは船長さんが、あるときは駅長さんが、

「そーゆーことは、親切的デンキ屋さんに聞いてください」

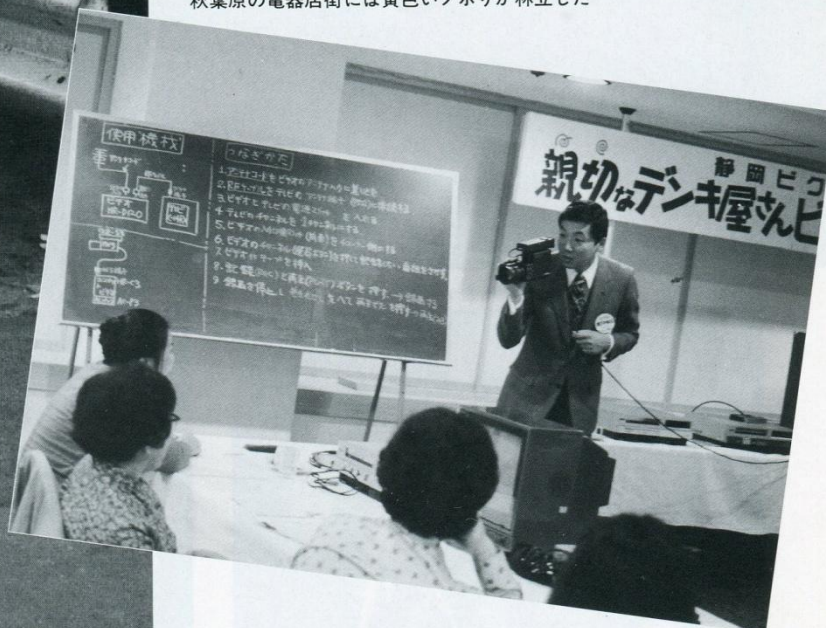
と、アドバイス。街に出れば、各デンキ店の店頭には「親切的デンキ屋さん」と大書されたノボリが立てかけられ、「親切ビデオ読本」やデモテープを使って、4ヘッドビデオのクオリティーの高さをアピールしていくという仕組みであった。

ビクターの独立専用4ヘッドはなぜきれいか、ユーザーに合った使いやすいビデオとは何か、親切的アドバイスと、丁寧な接客は、やがてキャンペーンが終わってもユーザーの心に残り、ひいては固定化につながると、そのユニークなアプローチが高く評価されて、昭和59年7月、すぐれた広告キャンペーンにおくられるOAC主催の「日本広告キャンペーン賞1984」を受賞したのである。





秋葉原の電器店街には黄色いノボリが林立した



キャンペーンの一環として、電器店の奥さまの方のためのカメラ撮り講習会も開かれた(講師は中村知好氏)

世界のジャーナリストも集まった ビクター創立55周年総合展

日本ビクターが創立55周年を迎えた昭和57年。さまざまな記念事業の一環として「日本ビクター総合展」が開催された。これは創立55周年を記念して、JVCのイメージアップを図るとともに、あわせてビクターの確固とした基本姿勢ならびに全体像にふれてもらうことを目的としたものであり、海外の一流ジャーナリスト8名も来訪された。

イギリス、アメリカ、フランス、西ドイツ各国の第一線で活躍するジャーナリストたちは精力的にスケジュールをこなし、日本のジャーナリストたちとの情報交換に、「アキハバラ」電器街の視察にと、積極的な取材を行なった。

世界中のマスコミに JVCの話題が続々と登場

帰国後、それぞれのジャーナリストたちの目に映ったJVCや日本のエレクトロニクス産業の様子が続々と世界各国のマスコミに登場した。

「80年までは単なる変わったおもちゃだったVTRは、日に日に広範囲な消費者向け商品となりつつある。フランスで売られているすべての、そしてアメリカ、ヨーロッパのほとんどのVTRの源はひとつ、すなわち日本である。この成功をどう説明すべきか。JVCの歴史はその良い例だ」(フランス、ル・モンド)

「ビデオテープレコーダーに続いてビデオディスク、高精細テレビ、超軽量カメラ、デジタルカセットと、日本は未来へ本格的に足を踏みこんだ。6年間で2,000万台のVHSが全世界の家庭に浸透した。そして早くも、次のコンパクトタイプのVHSを用意している」(フランス、レ・ゼコー)

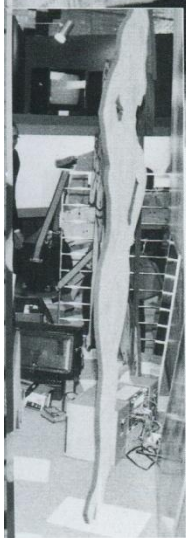
公平な目にJVCがどのように映ったか、興味のつきないジャーナリストの来訪だった。



世界各地から一流のジャーナリストが来訪された



会場には松下電器の松下幸之助相談役もお見えになり、熱心にご覧になった



国賓として来日のペルチーニ 伊大統領。横浜工場を見学

国賓として来日されていたイタリア共和国のサンドロ・ペルチーニ大統領とエミリオ・コロンボ外相が、昭和57年3月12日、そろって横浜工場を視察された。

これは、同大統領のわが国の民生用電子機器工場見学の強い希望に対し、ヨーロッパでの躍進著しく、また急成長をみせているビデオの国内メーカーであるビクターが選ばれ、実現したものであった。

来日中の訪問先のなかで、ただ1か所の民間企業として横浜工場を訪れたペルチーニ大統領は、約45分間にわたって、ビデオの組立工程をご覧になった。

なかでも、ビデオの心臓部ともいえるドラム工程には、とくに強い関心を持たれたご様子だった。

大統領は、85歳というご高齢にもかかわらず、気さくな人柄で人々を暖かく包み、出むかえた歓迎の人々に、気軽に投げキッスを送られたり、作業中の女子社員の肩を軽くたたいて励まされたり、終始なごやかなムードで視察を続けられた。

当日の様子を扱った速報ビデオに ペルチーニ大統領も感激

視察後、大統領は用意されたテレビで、それまでの視察の様子を撮影したビデオをご覧になったが、その映像のすばらしさに、驚きの表情を隠しきれないご様子だった。最後に、「私どもは、いつの日か機械が人間を使うようなことになってしまっては危険であると考えていました。今日、人間尊重のこの工場を視察させてもらったことを感謝します」

と、感想をのべられ、短いながらも心のこもった視察を終えられた。

ビクター55年の歴史のなかでも、国賓をお迎えしたことは初めての経験であり、記念すべき一日であった。





G大賞受賞、そして南極探険と 話題独占の「CITY JACK」

昭和57年は、ワンハンドビデオシステム「CITY JACK」が、さまざまな話題を呼んだ年であった。

まず、すぐれたデザイン、品質、機能をもつ商品に与えられる通産省認定のグッドデザイン賞。その最高の栄誉である大賞を10月に受賞。

「総合的かつシステマチックにデザインされた全体のとまり、バランスのよさにおいては、先端技術の開発力の裏付けをともなっており、そのできばえは本年度の選定商品の中で最もすぐれたもの」というのが、その受賞の理由であった。

VHS-Cテープを採用したコンパクトなVTR部とカメラを、システムとしてデザインした「CITY JACK」は、ワンハンドビデオのひとつの方向を示すものとして、高く評価された。



流氷をつき破ってすすむ「ふじ」 南極の映像は迫力いっぱい

一方「CITYJACK」は、第24次南極地域観測隊にも正式採用され、11月25日、観測船「ふじ」で南極を目指して出発していった。

小型軽量、かつ高性能な点が評価されての採用であった。

強化プラスチック製の特製耐寒耐水ケースに収まった「CITYJACK」を手にしなが、出発前、「氷の下に付着している海洋生物の観察を中心に使用する予定です。ビデオのプロでない私にも扱いやすそうですし、耐寒耐水ケースが水中やきびしい極地での使用に大いに役立ってくれるでしょう」

と、抱負を語っていた佐々木隊長は、翌年、帰国後、

「小型で扱いやすい。接写できる。そのうえ暗いところでも撮影できて便利でした」

と、成果を報告。流氷を突き破って進む「ふじ」や、純白の氷山と紺碧の海が描くあざやかなコントラストなど、迫力いっぱいのシーンを紹介した。

引き続き「CITYJACK」は、第25次越冬隊にも手渡され、貴重な映像の記録を撮り続けていった。



高野専務^(現副社長)、国内外で最高の栄誉 “マン・オブ・ザ・イヤー”と“藍綬褒章”

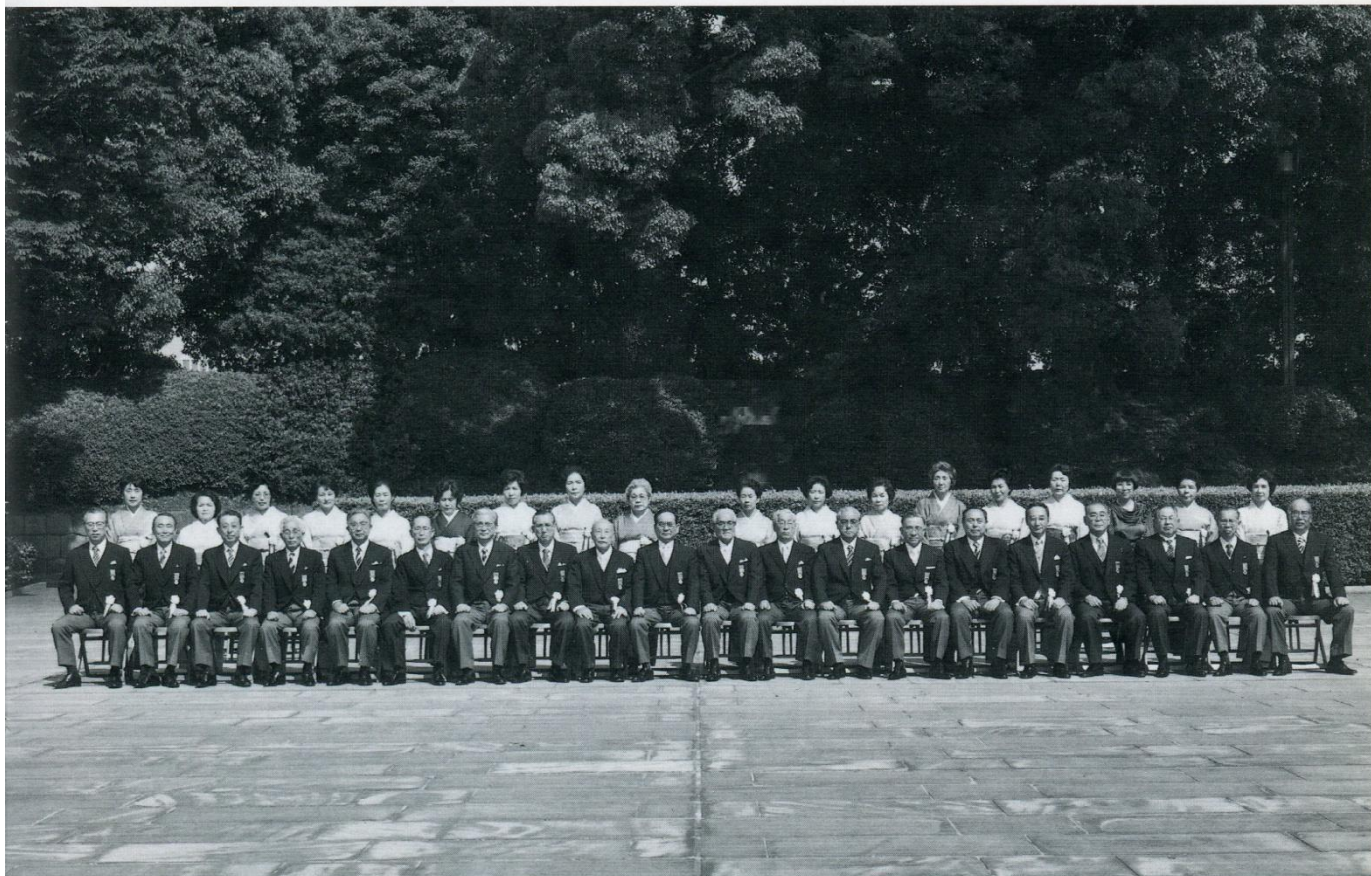
米国タイム誌とITA(インターナショナルテープ協会)が共催して、毎年、その年の“最高の男”に贈るITA/TIME誌“マン・オブ・ザ・イヤー賞”。その1983年の受賞者に、ビクターの高野鎮雄専務、松下電器産業の谷井昭雄副社長、RCAのジャック・K・ソーター副社長(いずれも当時)の3人が選ばれた。

ITAの受賞選定委員会では、VHSを最もすぐれたホームビデオシステムとして認め、その開発から

生産、市場開拓まですべての分野にわたって陣頭指揮をとってきた3社のそれぞれの責任者に栄えある賞を贈ることになったもの。とくに高野専務は、VHSの開発者として高い評価を受けた。

そしてこの3氏は、'83年3月、タイム誌の表紙を飾ったのである。VHSビデオを前に、3氏が固く手を組んでいるイラストが添えられたこの表紙は、まさに世界市場を席卷したVHSの勢いを象徴するものであった。





政府も認めたVHSの功績 高野専務、陛下と謁見

さて、高野専務はこの前年の昭和57年にも、「科学技術者功労者表彰」を受けているが、アメリカのタイム誌の表紙を飾るという国際的評価を受けたあと、国内において、さらに荣誉ある藍綬褒章を受けることになった。2年後の天皇誕生日、昭和60年4月29日のことである。

伝達式は5月30日、東京・港区の農林年金会館で行なわれ、竹内科学技術庁長官から褒賞を受けたあと、皇居で天皇陛下に謁見された。

藍綬褒章は、教育、衛生、殖産開発などの事業を通じて公衆の利益に著しい功績をあげた人や、公共の事務に励んで功労顕著な人に与えられるもの。あらためて述べるまでもなく、高野専務の場合は、家庭用 $\frac{1}{2}$ インチVTRとしてのVHSビデオの開発育成に対して与えられた。

この受賞によって、VHSは名実ともに「ホームビデオにおけるもっとも優れた規格」として認定されたことになり、不動の地位を確保したといえよう。



♪きんさい きんさい ♪わしらのビデオは「CITY JACK」

“スナツプ感覚の撮るビデオ” HR-C3とGZ-S3/S5を組み合わせた初のコンパクトビデオシステムの愛称は、1万種類を超える一般公募から「CITYJACK」と名づけられ、発売直後よりビッグヒット商品となった。

その売れ行きをバックアップしたCMが、ユニークな音楽活動で人気急上昇中の小林克也さんの歌(?)、とこれまたイマイタッチがヤングにウケる湯村輝彦さんのイラストだった。ワイキキの浜辺を舞台にアロハ姿の小林さんが流行のラップ感覚と広島弁をミックスさせて歌いまくったのは、こんなヒョーキン・ソングー

♪ビクターがの ビデオをの 小型にしたんじゃ 名前はCITYJACK
NICE TO SEE YOU

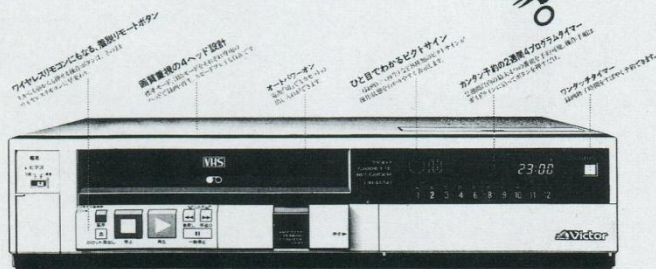
カメラとの デッキでの ベリーハッピーじゃ!

♪きんさい きんさい こっちへきんさい
わしらのビデオは ビクターじゃけん!

ずいぶん流行った昭和57年のCMである。



使いやすさに
サをつけて
新登場。



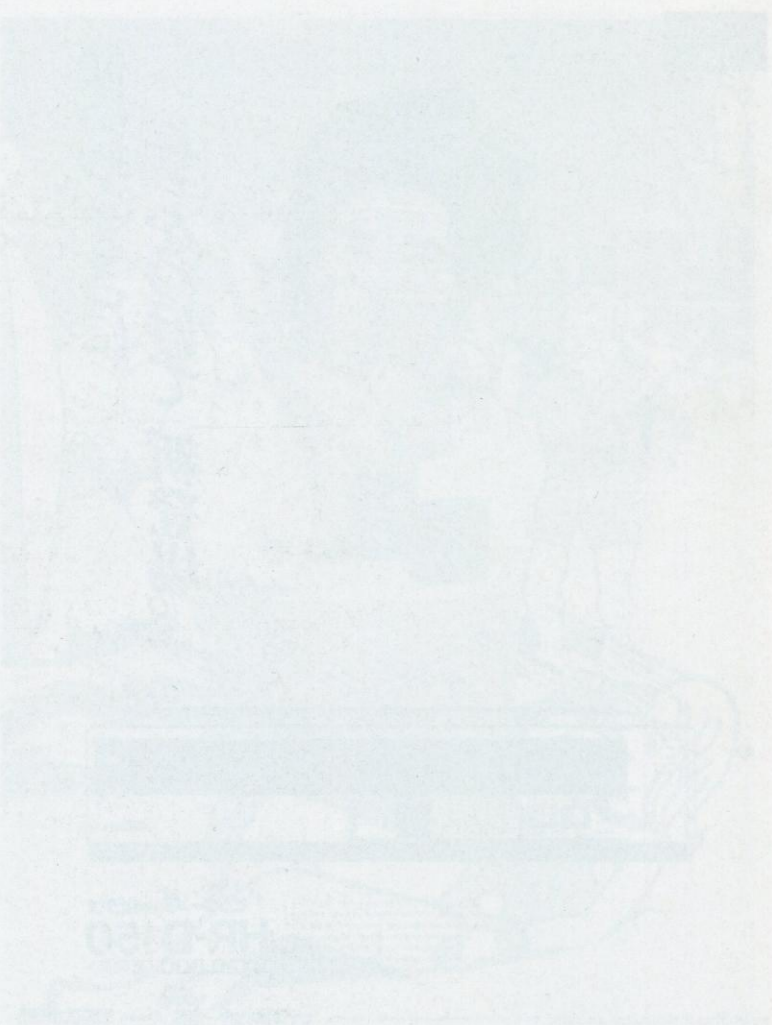
ちよつと量がつく
ビクター4headビデオ
HR-D150
¥129,800〈新発売〉

女性からお年寄りまで家族全員で簡単に楽しめるHR-D150のコンセプトがほのぼののタッチで茶の間に届けられたのだ。

ビデオはビクター VHS 先進の個性 日本ビクター株式会社

日本の経済成長と国際競争力

日本経済の成長は、戦後から高度経済成長期にかけて、年平均約10%の速さで進んだ。これは、戦後世界で最も高い成長率の一つであった。この成長は、主に製造業の輸出拡大によるものであった。特に自動車、電子機器、機械などの分野で、日本は世界市場を席巻した。この成長は、日本社会の豊かさを生み出し、国際競争力を大幅に向上させた。しかし、高度経済成長期以降、日本経済は停滞期に入り、成長率が低下した。これは、人口の減少、少子高齢化、技術革新の遅れなどの要因によるものである。現在、日本は再び国際競争力を高めるための取り組みを行っている。特に、デジタル技術、人工知能、ロボティクスなどの分野で、競争力を向上させることを目指している。また、環境技術、持続可能な開発目標（SDGs）などの分野でも、日本の強みを活かした取り組みが行われている。今後の日本経済の成長は、これらの分野での競争力向上にかかっていると考えられる。



4

クォリティ追求の時代

'85~

(昭和60年~)

●ハイクォリティ時代を拓く高画質化技術“HQ方式”	98
HR-D565	
●ニュートンジェント方式で“きわめつけ”の高音質を実現	100
HR-D470	
●“撮るビデオ”に要求される条件をすべて満たしたVHS10年の集大成	102
GR-C7,GR-C9	
PUBLICATION	
●世界中に反響をまきおこしてGR-C7衝撃のデビュー	106
CAMPAIGN	
●ニコニコわが子をボーヤハント「10万人愛撮るキャンペーン」	108
TOPICS	
●「バック・トゥ・ザ・フューチャー」でビデオムービーが大活躍	110
●英王室でもビデオブーム。スペンサー伯爵横浜工場を見学	112
●GR-C7、カナダの上空をアクロバット飛行	114
●「礼儀正しい紳士たれ」と題されたVHS開発物語が今秋米国で出版	116
COMMERCIAL	
●「肌色」で高画質をアピールする格調志向の“マジメディア・HQ”	118
●かわいいムービーGR-C7でかわいい“ボーヤハント”	119

ハイクオリティ時代を開く 高画質化技術“HQ方式”

’80年代前半がビデオの利用者、活用方法などを拡大していく普及時代だったとすれば、ビデオの普及率が40%に達した後半は、AV一体となった展開をみせるニュービデオ時代、より高画質・高音質が求められる“ビデオハイクオリティ時代”といえよう。現代では、ビデオソフトの再生、長時間録画・録音でのより鮮明度の高い画質・音質はもちろん、将来のビデオライフの発展に対応可能な機能、システム性、そして幅広いユーザー層を考えた高操作性など、ビデオに総合的なクオリティが求められるようになってきた。

VHSビデオは、コミュニケーション・メディアとしてのビデオの必須条件である「規格の互換性」を保持しつつ、しかも飛躍的な高画質化を実現した“High Quality (ハイクオリティ)”方式を確立、採用することで、こうした時代の要求に答えていく。

ハイクオリティ方式とは、輝度信号の白レベルを20%アップして映像にメリハリをつけ、特に輪郭や遠近間にキメ細かな表現を可能にする「クリップアップサーキット」、映像信号を補強する時に発生するノイズを、高精度なCCD1Hディレイラインや巡回型くし形フィルターなどの採用により、高域から低域まで大幅に低減し、S/N比を向上させた「YNR(輝度信号画質改善回路)」と「CNR(色信号画質改善回路)」、録画時に細部を強調する「ディテールエンハンサー回路」などからなる、互換性を損なうことなく高画質化を実現した技術。

このHQ方式採用の第1号機であるHR-D565は、定評あるエクストラ4ヘッドとHQ技術、画質調整機構、AEF機構などの画質重視の基本設計による高画質に加えて、PCMに比肩するハイファイの高音質、さらには10KEY操作部に代表される使い勝手のよさ、ハイコストパフォーマンスな設計などにより大きな評価を得て、“ビデオハイクオリティ時代”の先陣を飾る人気機種となった。

ニュートンジェント方式で “きわめつけ”の高音質を実現

“ビデオハイクオリティ時代”の流れの中で、高画質・高音質のハイファイビデオの普及は着実な伸びをみせ、昭和60年末にはホームビデオ全体の約1/3を占めるようになる。このハイファイビデオの高成長は、オーディオファンのビジュアル化傾向、ビデオ購入者の若年化とパーソナル使用の増加、クリエイティブな楽しみの顕在化などの諸要因に支えられたものといえよう。

こうしたAV本格化時代のパーソナルユースに対応して商品化されたHR-D470は、VHSテープを縦方向に挿入するニューコンセプトの“サイドローディングシステム”によって可能になった、省スペース化を図ったコンポサイズ(横幅31.5cm、高さ9cm)のスタイルで話題を呼んだ。しかしながら、HR-D470の真価は、やはりその充実した機能、内容にあるといえるだろう。

今やVHSビデオ高画質化の基本技術となったエクストラ4ヘッドとHQ技術のフル搭載に加え、輝度信号を高帯域化し、クロスカラーを大幅低減、さらにコントラストを安定させ、信号情報量を10%向上させた輝度信号くし形フィルターの採用によって実現した、鮮明でノイズの少ない、安定感のある高画質。そして、信号補間回路の性能を高めた新オーディオ技術“ニュートンジェント方式”(補間信号の傾きとスイッチング時間を前後の信号から計算してつなぐ方式)により、スイッチングノイズを大幅に低減し、オーディオファンの厳しい耳からも絶賛された高品位の音質。

この高画質、高音質の基本性能をベースにして、任意の頭出しができる「カウンターGO-TO」、「ミュージックスキャン」、「RECポーズバー」など、一段と発展するAVライフに対応した多彩で便利な機能を満載し、システム性の向上を図ったHR-D470は、画質、音質、機能のすべてにわたって最高水準のクオリティを追求した、まさにAVクロスメディアの“きわめつけ”といえる。

HQ

高機能、高画質、高音質のHQ&ハイファイビデオ HR-D470

●エクストラ4ヘッドと、クリップアップサーキット、クリーンビジュアル・サーキット、ディテール・エンハンサーのハイクオリティ方式に加え、高性能輝度信号くし形フィルター回路の採用により、きわめつけの高画質を実現●新オーディオ技術“ニュートンジェント方式”により、スイッチングノイズを大幅に低減●サイドローディング方式の開発、採用により、幅31.5cmのコンボサイズを実現●ミュージック・スキャン／カウンターGO-TO／RECポーズバー／多機能ワイヤレスリモコン／72局対応FSチューナー／DUBモード／ACオンライン機構など、AVシステム対応の充実機能



夜が、スクリーンになる。

美しい音と映像を、気ままに楽しめる。
なんて、贅沢な時間だろう。
これが、ビデオと僕の新しい関係だ。

H-FI LIVE SYSTEM
ビデオの部屋は、ただのS席になる

PRIVATE THEATER SYSTEM
居心地よいお部屋を、手に入れた

Extra SYSTEM
ビデオのサービスを思いのままに操ろう

個性の数だけ、発展します。
自由に組めるAVシステム例。

本格的ムービー時代を拓く GR-C7、そして……

昭和61年。VHSビデオの累計生産台数の1億台突破が目前に迫り、ビデオの世帯普及率も40%に達するなど、ホームビデオの世界的な普及を背景にして、本格的なホームビデオムービー時代が到来しようとしていた。

そうした中で特に高まりをみせていたのが、市販ソフトなどを再生して楽しむオーディオ&ビデオ(AV)と、“撮るビデオ”の人気である。AVファンが高画質・高音質のハイファイビデオ市場を、また“撮るビデオ”ファンがムービー市場を、それぞれに大きく拡大していったといえるだろう。

“撮るビデオ”の楽しみは、ビデオカメラやVTRが小型・軽量化され、取り扱いが簡単になり、さらにVTR一体型ビデオカメラであるビデオムービーが登場するにいたり、女性や子供、お年寄りなどにも、年齢、性別を問わない広がりを見せてきた。子供の成長記録や家族の記録を気軽に、スナップ感覚で撮影し、さらにそのオリジナルの映像を編集したり、ビデオレターにして送ったりと、ビデオをコミュニケーション・メディアとして使いこなす人々が増え、“撮るビデオ”をめぐる環境は、成熟期と呼ぶにふさわしい活況を呈し始める。

“いつでも、どこでも、誰にでも”を基本コンセプトとして開発されたVHSビデオムービーGR-C1/C2は、この時代の牽引車として大きな務めを果たしてきた。そして昭和61年1月、GR-C1/C2の後継機であり、“撮るビデオ”の決定版ともいえるGR-C7が待望のデビューを飾る。

GR-C7は、単なる小型・軽量化ということだけではなく「ビデオの本質はコミュニケーション・メディアである」という基本思想をベースに、同一規格の映像メディアとしては歴史上類を見ない普及を遂げたVHS方式ビデオとの互換性を保持することを第一に開発



VideoMovie

VHS-C

世界最小・最軽量・フル機能搭載 VHSビデオムービー
GR-C7



●世界に1億台普及のVHS方式と互換性をもったVHSコンパクト方式●1/2インチ高感度CCDの採用などにより、世界最小・最軽量の1.3kg(録画・再生機能付きビデオムービーとして)を実現
●イメージセンシング方式オートフォーカス、オートホワイトバランス、オートアイリスの各種オート機構採用、マクロ機構付6倍パワーズームレンズ搭載などのフル機能●HQ技術搭載

による高画質。また、VHS-EPモードにより最大60分の録画・再生が可能●フレームブランキング方式AEF機構●ボタンひとつで録画スタンバイ状態になるワンタッチ録画方式●集中インジケータ機能付き超小型電子ビューファインダー／3電源対応／任意クイックレビューシステム／自動録画ロック機構／ホワイト・フェーダー／逆光補正

された。

そして、高密度実装技術により本体重量1.3kgの、録画・再生機能付きビデオムービーとしては世界最小・最軽量を実現。高感度1/2インチCCDとHQ技術の採用による高画質化、オートフォーカス、オートホワイトバランス、オートアイリスなどのフルオート化による操作性の向上などを徹底的に追求した結果、“撮るビデオ”に要求される条件・機能をすべて満たすことになったのである。

さらに、VHS-EPモード搭載により、最大60分の録画を可能にしたほか、AV入出力機能、マクロ機構付き電動6倍ズームレンズ、見やすい電子ビューファインダーなどの充実機能を満載し、また人間工学設計に基づいた持ちやすいパームフィットグリップなど、使いやすさへの細心の配慮が施されているGR-C7は、どんな場面でも、誰にでも、鮮明な映像が簡単に、しかも確実に記録できる信頼性を備えているといえる。

この、まさに“撮るビデオ”の究極のスタイルと実力を持ったGR-C7は、発表以来大きなブームを巻き起こし、家庭で、また旅先で、気軽なスナップ撮影を楽しむ人々が急激に増加した。このことは、ビデオが真に手軽で簡単な、誰にでも扱える身近なものになり、おとなから子供まで家族全員で楽しめるものとして多くの人の生活の中にまで浸透し、定着してきたことを示す現象といえるだろう。

そして61年9月9日。VHS方式ビデオが産声をあげてから10年目に当たるこの日、本体重量わずか750gという録画専用ムービーGR-C9が登場した。世界で1億台もが普及し、どの1台をとっても規格の互換性を持つVHSビデオだからこそ、コミュニケーション・ツールとしても大きな意味を持つこの録画専用ムービーGR-C9の登場で、VHSビデオムービーは“いつでも、どこでも、誰にでも”ポケットカメラなみの手軽さ、ワンボタン操作の簡単さで撮影でき、そしてどこでも見られる、究極の楽しみを獲得した。

VHS10年の集大成GR-C9

GR-C9

ズシャッター装備など、誰にでも使える簡単・確実操作●色再現性と動解像度特性に優れた1/2インチCCD採用。最低照度10ルクスの高感度・低残像設計●HQ技術搭載で鮮明画像で最大60分(VHS-EPモード)連続録画が可能●重ね書きなしの鮮明なつなぎ撮りができるゼロフレームエディティング(ZFE)機構搭載●業界初りのグリップバッテリーなど、人間工学に基づく設計



VideoMovie
VHS
Hi8
Hi8
Hi8
GR-C9 (ブラック)

(外形寸法)幅95×高さ111×奥行208mm



コンパクト化へのアイデアです。
グリップ・バッテリー共用設計。

右側にあるグリップ・バッテリーは、なんとグリップと共通の
このようにコンパクト化へのアイデアを考案したのが
上にもあるように、手になじむ持ちやすさや、グリップ
と一体化した。しかも、右側のグリップ・バッテリーが
（※）グリップ・バッテリーは、なんとグリップと共通の

[illegible][illegible][illegible]

VideoM
GR-C9(W)...

世界中に反響をまきおこして GR-C7衝撃のデビュー

ビデオムービーGR-C1の登場は、女性やお年寄りなど、より広い層の人々に、身近な生活記録を撮っていく楽しさを提供したが、ビデオが浸透するにつれ、ビデオムービーそのものに対する現場からの要望も、より一段と強いものになっていった。

互換性を保つことはもちろん、よりいっそうの小型軽量化、高画質化、容易な操作性、豊富な機能を備えていること、などが求められてきたのである。

これらの条件を、すべて満足させて登場したのがGR-C7だった。

本体重量わずか1.3kg。これは、録画、再生機能付きのビデオムービーとしては、世界最小、最軽量だった。しかも、フル機能、フルオート機構でハイクオリティー(HQ)技術を搭載して高画質化を実現するという完成度の高さであった。

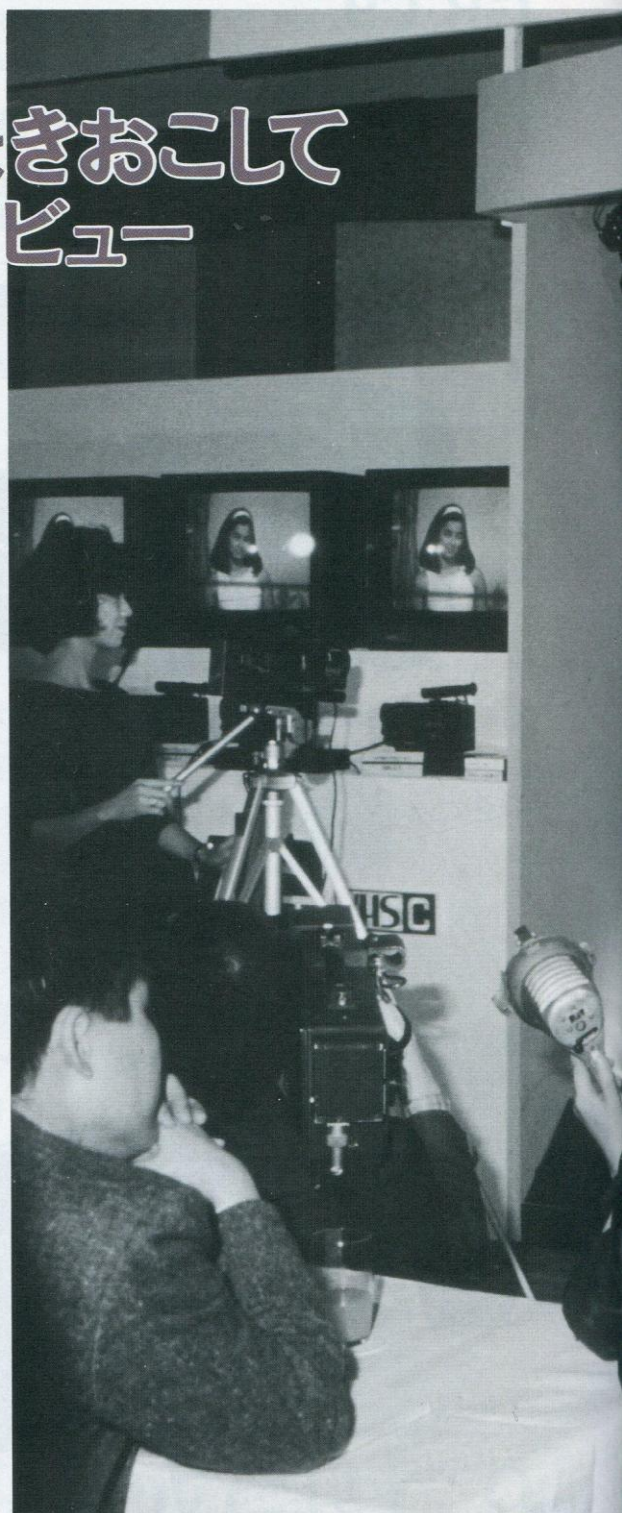
初めての女性でもすぐ撮れる 手軽な操作性にオドロキの声

その発表会が行なわれたのは新春気分もさめやらぬ昭和61年1月8日。場所は帝国ホテル「さくらの間」。NHK、日本テレビ、TBSなどテレビの主要各局をはじめマスコミ陣で満員となった場内で、さっそくデモンストレーションが行なわれた。

初めてビデオを操作するという女性にGR-C7を手渡し、その映像を合計10台のテレビでモニター。

ズームイン、標準/EPモード切替などの操作をラクラクこなし、画質の良さもさることながら、女性にも全く負担を感じさせない小型軽量設計、誰にでも扱える手軽さが印象づけられた。

VHSが10周年を迎えて、電子機械工業界の調査にもみられるように、国の内外ともに、一体型ビデオの需要が大きく見込まれているときにあって、その新時代を告げるGR-C7の登場は、国内はもとより世界中に大きな反響を巻き起こした。





ニコニコわが子をボーヤハント 「10万人愛撮るキャンペーン」

「軽い、小さい、簡単、高画質、そしてVHS」というビデオムービーGR-C7を直接手にして、シャープなカメラ撮りの楽しさを体験してもらおうと企画されたのが、昭和61年の5月から、3か月にわたって全国的に展開された「10万人愛撮るキャンペーン」であった。

各地の特設会場に、26歳から36歳までの子育てファミリーを招待。生まれながらの映像世代であるカップルたちにGR-C7を貸し出して、ムービー体験してもらおうというものだった。

これまで、どちらかといえば一部のファンに限られていたビデオの撮影を、ハンディーかつフルオート機能搭載のGR-C7登場をきっかけに、一気に若い母親にまで広めて、その手軽な操作性を知ってもらうと同時に、わが子の成長記録を中心としたビデオ撮りの楽しさと効用を体験してもらうことが狙いであった。

静岡、名古屋、九州などで、いち早く始まったキャンペーンの各会場は、子どもたちを中心に若いカップル、そのうえ、おじいちゃんおばあちゃんまで加わって、たいへんなにぎわい。さっそくGR-C7を手手に、"ボーヤハント"が始まった。

ほとんどの人が、ビデオ撮り初体験だったにもかかわらず、ムービーの手軽さと簡単な操作性に、会場のあちこちから、

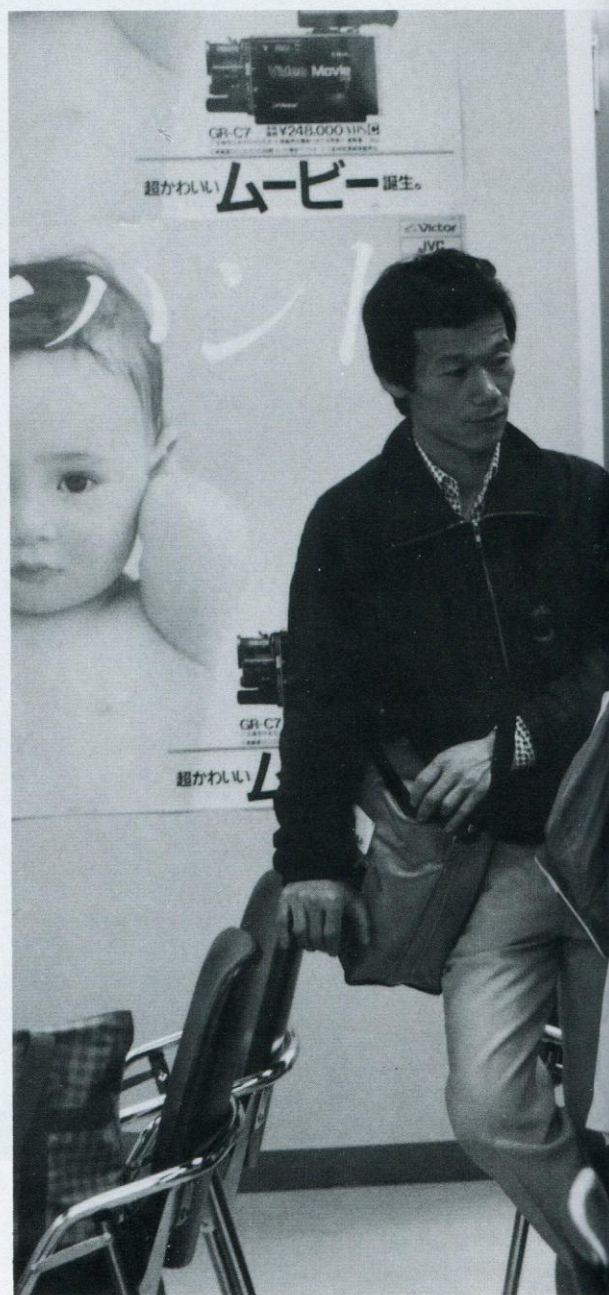
「こんなに軽いなんて」「思ったより簡単」

と、感想がのべられ、イキイキとブラウン管に映し出されるわが子の表情に、

「想像以上にきれいに撮れているわ」

と、オドロキの声があがっていた。

録画したコンパクトテープ(VHS-C)のプレゼントも好評で、各地の撮影会は大きな成果をあげたのである。





「バック・トゥ・ザ・フューチャー」でビデオムービーが大活躍

ハラハラ、ドキドキ、そして大爆笑。ハリウッドのヒットメーカー、スティーブン・スピルバーグが、またまた大ヒットさせた映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』で、主人公と一体の大活躍を見せたのがビデオムービーGR-C1だった。

物語は1985年の現代に始まる。ハイスクールに通う主人公マーティーは、ある日、科学者ブラウン博士の作ったタイムマシンに乗るハメにおちいる。

その実験の様子をビデオムービー「GR-C1」で撮影中、思わぬハプニングから、一気に35年前へとタイムスリップしてしまうのだ。

甘いフィフティーズが流れる1950年代の街。そこでマーティーが出会ったふたりのティーンエイジャー。見るからに気の弱そうなサエない少年と、マーティーにひと目ボレしてしまったかわいらしい少女。その2人こそ、実はマーティーの……と、ストーリーは展開していくのである。

「ビデオは大した発明だ」 博士がつぶやく名セリフ

ストーリーの意外性、ヒネリにヒネった脚本のおもしろさ、そしてラストのドンデン返し。SFXを駆使した迫力いっぱいのおもしろムービーは、まずアメリカで大ヒット。ついで、昭和60年の年末には日本に上陸して、お正月映画の本命となった。

その話題作のなかで、キラリと光るワキ役として活躍したのがビデオムービーGR-C1だった。

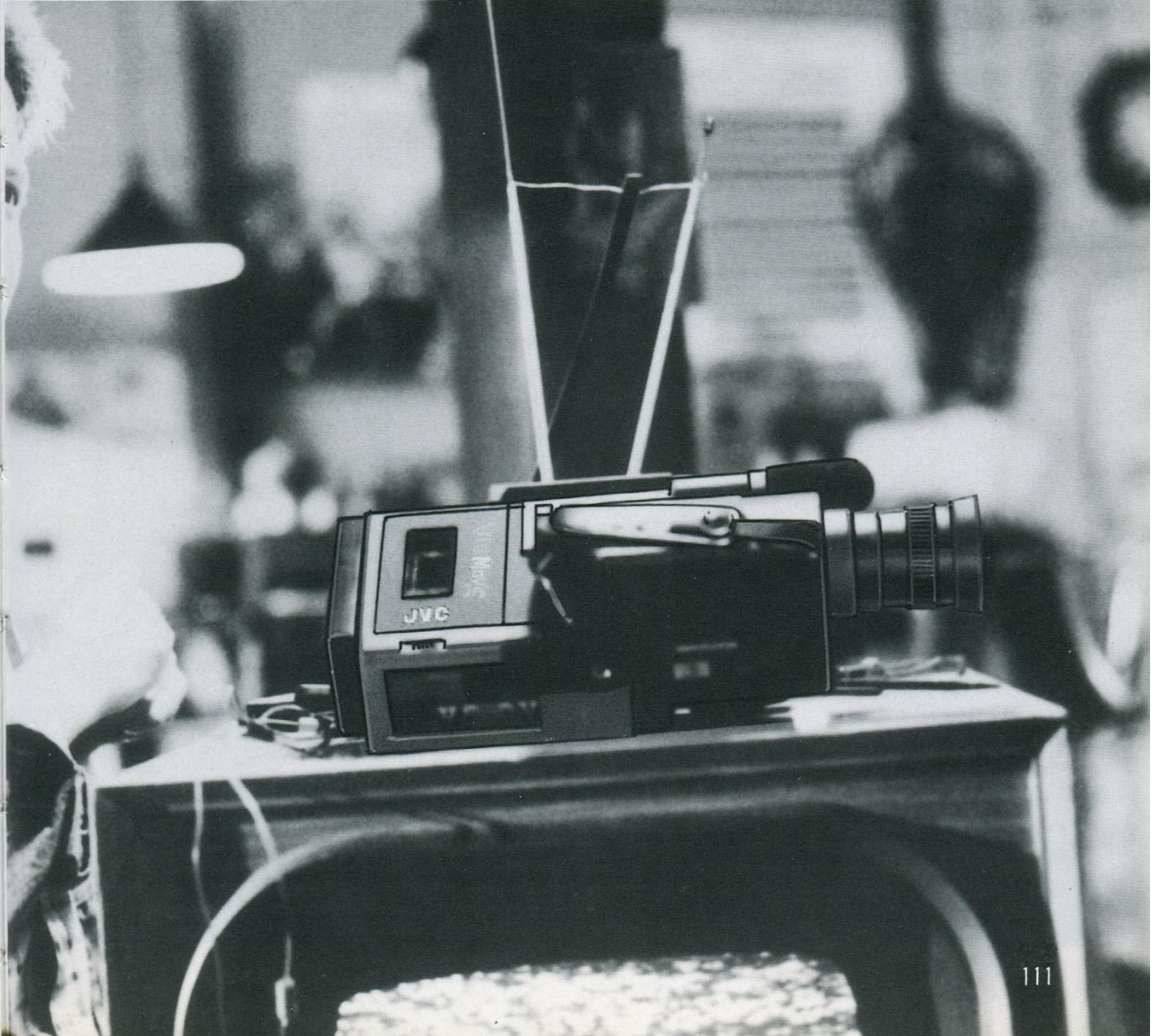
現代の最先端技術を象徴する道具として登場したビデオムービーは、やがて主人公が現代に帰るために欠かせない大切な手段として大活躍を始める。

まっ赤なボディーと、ブラウン博士がつぶやくセリフ、「ビデオは大した発明だ」が印象的なこの映画によって、JVCのビデオムービーはますます人気を呼んだのである。





cic
VIDEO



英王室でもビデオブーム スペンサー伯爵横浜工場を見学

17世紀のイギリス国王、チャールズII世の血をひく名門で、長年、エリザベス女王とその父君ジョージ6世に侍従として仕えられ、最近では、ダイアナ妃のご両親として知られるスペンサー伯爵夫妻が、そろって横浜工場を見学された。

日本中をダイアナブームにまきこんだチャールズ皇太子ご夫妻の訪日に先立つ昭和61年3月、英国の歴史と自然をPRするために来日されたご夫妻は、

「これを機会に、日本の最先端のエレクトロニクス工場を、それも、できればVHSメーカーであるJVCのビデオ工場を見学したい」

というスペンサー伯のたつての希望を実現されて、31日、横浜工場を約1時間にわたって視察された。





手にしたGR-C7に思わず 「これは素晴らしい」

カメラマニアとしても有名なスペンサー伯は、VHSビデオムービーGR-C7を手になされて、そのコンパクトさに感心、さかんにファインダーをのぞかれていた。

一方、レース伯爵夫人は、ラインで行なわれている調整作業やロボットによる自動組立工程などに興味を持たれたご様子で熱心に質問を投げかけられた。

視察後、関係者となごやかな懇談会がひらかれ、席上、GR-C7をプレゼントされたスペンサー伯は、さっそく手にとり、カメラ撮り。「これは素晴らしい」と、笑みを浮かべられた。

英国王室では、すでにGR-C1をお持ちのチャールズ皇太子に続く今回のGR-C7と、ちょっとしたビデオムービーブーム。

アンドルー王子のご成婚もあり、楽しいコミュニケーションづくりに一役買っているに違いない。

GR-C7 カナダの大空を アクロバット飛行

カナダ・バンクーバーの'86万博でオープニングを飾り、世界中のアクロバット飛行チームが結集した8月の航空ショーではリーダーを務めるなど、いま世界の注目を集めているカナダ国防軍のアクロバット飛行チーム「スノーバーズ」のcockpitに、ビデオムービーGR-C7が搭載され、上空から見た雄大なカナダの自然など、迫力あるシーンが撮影された。

「スノーバーズ」は、カナダ製のジェット練習機「カナディアンCT-114チューター」9機で編成された北アメリカ唯一のヨーロッパスタイルによるアクロバットチーム。

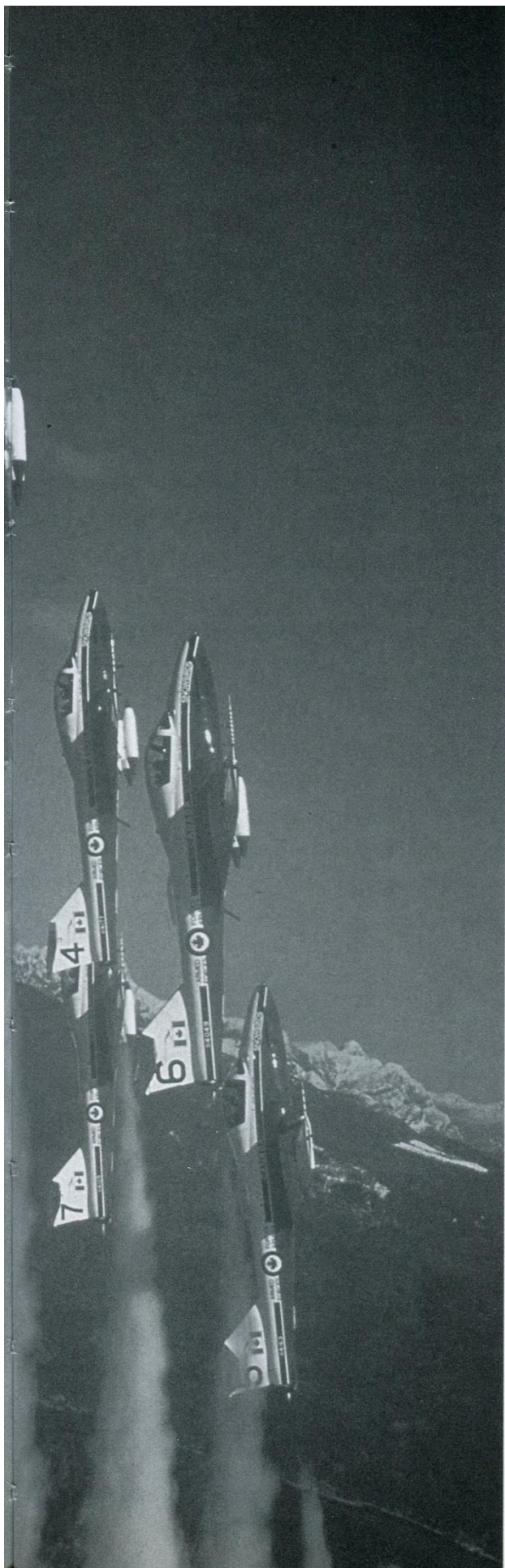
そもそも、その飛行ぶりを雄大なカナダの自然をバックに撮りたいということから持ち上がった企画だったが、一切の無駄を排除した超精密メカニズムの極致ともいえるジェット機には、大型ビデオ機器を積みこむ余裕はいっさいない。そこでGR-C7が採用されたのである。

ジェット機のメカニズムに負けない GR-C7の高度な機能

コンパクトで高画質のGR-C7は、あるときはcockpitの前後左右に、またあるときは機体の真下にとりつけられ、緊張するパイロットの表情、cockpit内の様子、さらには広がるカナダの大自然など、数多くの傑作シーンをカメラに収めた。

コバルトブルーの空を切り拓いていく真紅の機体。はるかに見おろす白い嶺。ダイナミックにくりひろげられるアクロバット飛行の数々…。小型軽量、フルオートのGR-C7ならではの迫力いっぱいの映像は、人々を大空へと誘ってやまない不思議な魅力に満ちている。





「礼儀正しい、紳士」と題された VHS開発物語が米国で今秋出版

『Breakthroughs! (ブレイク・スルー)』——『画期的発明』というような意味の表題のついた単行本が、この10月、アメリカで出版された。

著者は、アーサー・D・リトル社副社長の、Dr.P・ランガナス・ナヤクと、同じく上級副社長のDr.ジョン・ケッタリングハムの2人。

アーサー・D・リトル社は、経営および技術のコンサルティング会社で、技術の発明・開発のフロンティアともいえるべき企業。今年創立100周年を迎える名門である。

そうした経験豊かな専門家の手による本書は、過去20年間に人々の生活をすっかり変えたほどの爆発的な売れ行きを示した12のヒット商品を取り上げて、その誕生から市場を席卷するまでの産業プロセスを描いた物語である。

その商品を開発する際の「創造性、発明の才、商品化の努力と闘い、販売戦略と宣伝、決断とそれを助けた幸運の内幕をのぞいてみた」と本書のプロローグ(第1章)には書かれているが、本書の焦点は、そうした『画期的発明』を生み出した「人々」にあてられており、ビジネスマンはもちろん一般の読者も楽しめる「ヒューマン・ドキュメンタリー」に仕上げられている。

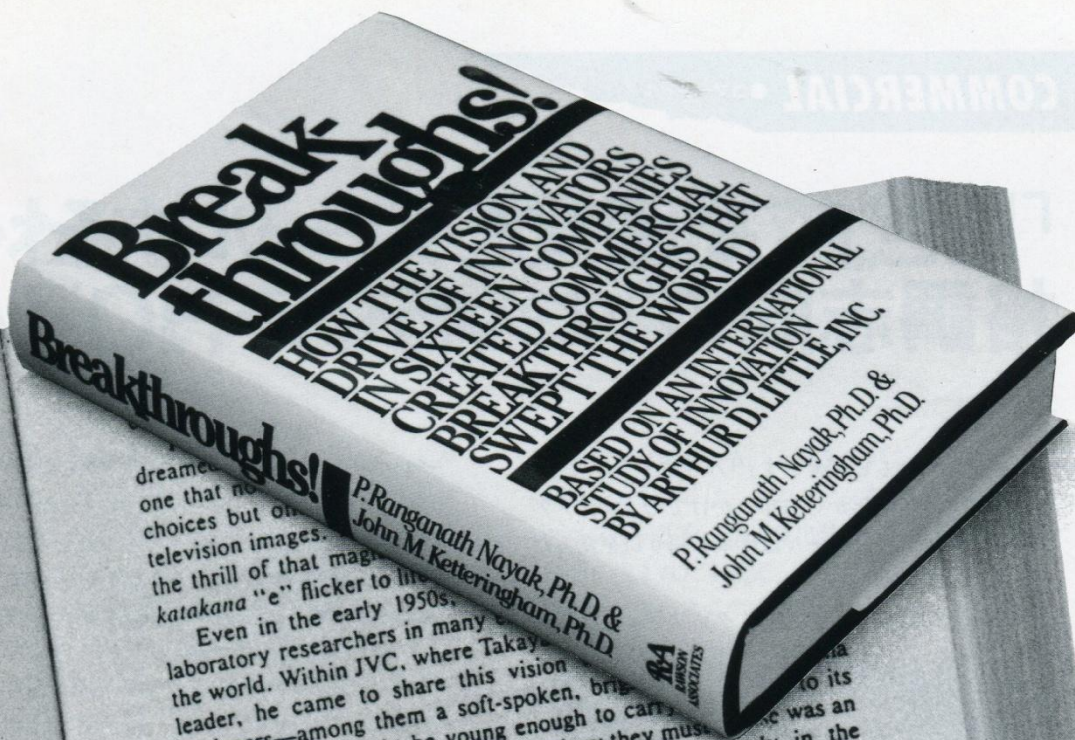
そして、その12のヒット商品の第1番目に取り上げられているのが、ビクターの開発したVHSビデオなのである。VHS開発前夜のエピソードなどが綿密な取材によって語られ、さらに、コミュニケーション・メディアとしてのビデオの効用に触れ、「ビクターは世界中の人々に素晴らしいプレゼントをもたらした。ビデオによる『共通言語』の登場である」と語っている。また、このVHS開発ストーリーに付けられたタイトルが「礼儀正しい紳士たれ」というのも興味深い。なお、本書は来春、日本でもダイヤモンド社から刊行の予定である。

2 JVC and the VCR "You Should Be Very Polite and Gentle"

In 1926, when inventor Kenjiro Takayanagi created the image of the Japanese katakana ideogram inside a cathode tube, he created one of the most important inventions of the 20th century. The invention shows. It was the beginning of an industry that has been born again in other nations at other times. In the years, would become the most pervasive in human history.

But in the early 1950s, when Takayanagi was thirty years, he did not see an entirely new accomplishment and social good. For one of the most important inventions of the 20th century, the Victor Company of Japan, Ltd., or JVC, had profited much from the emergence of the electric industry after World War II. For years after the war, JVC had been a wholly owned independent subsidiary of the Electric Industrial Company, Ltd., JVC's parent company. JVC's first products were graph records and hi-fi sets.

When, in the 1950s, Takayanagi lost his job, he saw a remarkable commercial and social good. For one of the most important inventions of the 20th century, the Victor Company of Japan, Ltd., or JVC, had profited much from the emergence of the electric industry after World War II. For years after the war, JVC had been a wholly owned independent subsidiary of the Electric Industrial Company, Ltd., JVC's parent company. JVC's first products were graph records and hi-fi sets.



Miracle

ed the trembling
the letter "e"
world's first televi-
y that would be
hat, within thirty
nment medium in

oked back at those
ect view of great
his company, the
d not exploited or
ion as a worldwide
53, when it became a
iant Matsushita Elec-
business was phono-

at television's impact,
hological breakthrough
throughout the world,
stantaneous awareness.
a handful of broadcast
CBS, NHK, BBC, ZDF,
ay over whole nations of
ass medium that too often
re. Between moments of
brilliance, it spent vast
en, artistically crude, and
networks proliferated, the

dreamed
one that no
choices but on
television images.

the thrill of that mag-
katakana "e" flicker to life
Even in the early 1950s,

laboratory researchers in many
the world. Within JVC, where Takay-
leader, he came to share this vision
engineers—among them a soft-spoken, bright
Shiraishi—who might be young enough to carry
fruition many years later. The technology they must
awesome challenge—because, as Shiraishi noted early in the
search, the only practical way to store images in the way Takay-
anagi had imagined was on some form of magnetic material, proba-
bly tape. But the tape would have to be very wide—much wider
than the tape used for sound recording—and the electronic machin-
ery to transfer the images from tape to picture tube would be
immense and very costly. How could you make this equipment so
small and inexpensive that any family could use it to make their
own TV programs? And how would JVC compete against such
competitors as Matsushita, a corporation ten times the size of JVC,
and Sony, a company whose reputation for research and innovation
had made it a household word on three continents?

It seemed a task no ordinary human could achieve.
Indeed, the three JVC leaders who carried the baton forward,
despite overwhelming competition from far bigger Japanese elec-
tronics companies, even in spite of the resistance of their own top
management, where hardly ordinary. Kenjiro Takayanagi was a
famous man in Japan, even outside JVC, because of his pioneering
discoveries in television. Yuma Shiraishi was gifted not just as an
electronics engineer but as a conceptual thinker. But the key
member of the group might have been Shizuo Takano, another
engineer and also a bundle of energy with a talent for taking risks
and for rallying people to a common cause so passionately that they
lose their fear of the risks. JVC assigned Takano to work with
Shiraishi, making them perhaps the oddest couple in Japanese
industry. The commitment they came to share to Takayanagi's
vision gave them a union with one another that would have been
impossible in normal circumstances.

「肌色」で高画質をアピールする 格調志向の“マジメディア・HQ”

「絵画鑑賞できるビデオです」「ハイクオリティで、毛穴まで」……60年から61年にかけての“マジメディア・HQ”の commercials は従来と語り口を変えた格調志向のアプローチ。

それもそのはず、ビデオハイクオリティ時代に対応して開発された HQ (High Quality) 方式は、VHSビデオの「規格の互換性」を保持しつつ、飛躍的な高画質化を実現した新技術だからである。

画面に登場する女性たちの裸身の肌色が印象的なのも、ビデオの基本色が肌色にあるから。その肌色を美しくだけでなくキメ細かく再現したところが HQ 方式の高画質化に他ならない。従来の VHS ビ

デオで録画しておいたテープもさらに鮮明に、しかも音はステレオ Hi-Fi……アールヌーボー調の commercials 画面が訴えるのも、そうした高画質 HQ がビデオの楽しさに、美しさを加えたという、まさにハイクオリティ時代のビデオのあり方なのである。

ハイクオリティで、毛穴まで。



Victor
JVC

マジメディア HQ

ビクター ハイクオリティ VHS ビデオ
HR-D565・¥189,800 VHS

VHS

かわいいムービーGR-C7で かわいい“ボーヤハント”

今、お茶の間のママたちが「カワイイ！」と声をそろえるのが“ボーヤハント”のテレビCMでお馴染みの可愛いベイビー。いつでも、どこでも、誰にでも——長年にわたってビクターが追求してきたビデオ撮りのコンセプトを具体化した「撮るカタチ」のきわめつけ、GR-C7のCMキャラクターだ。

ピンク色の画面の中であどけない笑顔をいっぱいにふりまく赤ちゃん……そんなかわいさは万国共通というわけで、バックにはこんなナレーションが。「ボーヤハントは母のたしなみ。小型軽量フルオート。未来を育てるVHS」

いつでも気軽に簡単に、イキイキ場面は身近な人

こそキャッチできる、というのがこのCMの言いたいポイント。では、世のファンたちに“ボーヤ”のプロフィールを。中近東出身のパパと日本人のママの間に生まれた1歳児。名前はサラちゃん。なんと実はボーヤにあらず女のコです。



GR-C7 本体 ¥248,000 VHS

1 互換性のあるVHS方式 2 録画再生機能つきの世界最小・最軽量 1.3kg 3 高画質のDCCもHQ搭載 4 2000時間フルオート 5 長時間連続録画再生

超かわいい ムービー誕生。

「肌色で自然な表情を演出する」が、 格調志向のメンズガウンのトレンド

「肌色で自然な表情を演出する」が、格調志向のメンズガウンのトレンド。これは、最近のメンズガウンのトレンドを一言で表している。肌色で自然な表情を演出する、これは、最近のメンズガウンのトレンドを一言で表している。

「肌色で自然な表情を演出する」が、格調志向のメンズガウンのトレンド。これは、最近のメンズガウンのトレンドを一言で表している。肌色で自然な表情を演出する、これは、最近のメンズガウンのトレンドを一言で表している。

「肌色で自然な表情を演出する」が、格調志向のメンズガウンのトレンド。これは、最近のメンズガウンのトレンドを一言で表している。肌色で自然な表情を演出する、これは、最近のメンズガウンのトレンドを一言で表している。

「肌色で自然な表情を演出する」が、格調志向のメンズガウンのトレンド。これは、最近のメンズガウンのトレンドを一言で表している。肌色で自然な表情を演出する、これは、最近のメンズガウンのトレンドを一言で表している。



VHS コミュニケーション 21

いままでのテレビ番組にはない、また市販ソフトにもない、まったく新しい録画専用番組『VHS録画チャンネル4.5』（フジテレビ系）。ホームビデオの楽しみ方をまたひとつ広げてくれたユニークなこの番組のなかで、5人の方々が「わたしとVHS、わたしのVHS」を語っていただきました。



ドラマづくりにも なくてはならない存在になった



ジェームス・三木
(脚本家)

家庭用ビデオが登場してから、私は自分の作品を録画して保存しているが、あとからビデオでじっくり見ると新しい発見をしたりすることが多い。

たとえば15分の帯ドラマを1ヵ月ぶんまとめて見ると、毎日見ているのとはだいぶ印象が違う。ドラマづくりの上では、毎日ヤマ場をつくって、次回への期待を持たせるようなつくり方をするが、それをまとめて見ると、その部分が作品にリズム感というか、うねりを生んで、それが非常に心地よいのである。

また、脚本を書く上で意外に役に立つのがまったく畑違いのテレビ番組である。ニュースとかドキュメンタリーをビデオに撮っておいて研究すると、実際に人に会って取材するよりもかえってよくわかるということがある。

それに私は高校野球が大好きで、それも甲子園ではなく、地区予選の準決勝あたりが、なんとなく哀愁があって好きなのだが、ビデオがとらえた彼らの表情が実にいい。大事な場面で三振したときの顔、つるべ打ちにあっているのに降板できない投手の顔などに、彼らの気持ちが表われる。これがドラマづくりにも大いに役立ったりする。

さらに、キャスティングの参考に、新人俳優の出演番組を録画しておくことも多い。何度も繰り返して見ると、その俳優の本質がよくわかるのだ。

このように、いまやビデオは私の仕事にとってなくてはならないものだが、ビデオがここまで普及して、録画専用の番組も登場するようになると、作者としてウカウカしてはいられない時代になったものだと思う。



コミュニケーション改革 と情報管理



加藤 寛

(慶応大学教授)

アメリカのサンタモニカ市では、ほとんど市議会が開かれないという。それは市議会議員と市当局とがパソコンネットワークで結ばれていて、双方のコミュニケーションはすべて電子メールで処理されているからである。

今、行政改革が叫ばれているけれども、会議のために多くの時間や人手をさくのは、税金のムダ使い以外の何ものでもなく、日本においてもこのようなコミュニケーションの効率化が急務であろう。つまり、行政改革はコミュニケーションの改革から出発しなければならない。

同じようなことは家庭内においてもいえる。ビデオが普及したおかげで、私たちは昔のように1日中テレビの前にかじりついている必要はなくなった。必要なときに必要な情報を必要な量だけ得

ることができる。そしてそのぶん、私たちは時間を有効に使って、本来の仕事ができるようになったのである。

いまやソフトイノベーションの時代である。昔はテレビ局が王様で、私たちはテレビ局の意のままに一方的に情報を受け取るだけだった。それが現在、私たちはVTRによって、情報を管理することができる。必要だと思われる番組をピックアップして録画し、休日に1週間分まとめて見ることも、それも早送り再生で時間を短縮して見ることも可能になった。

ますます発達する情報化社会。これからはビデオを活用しなければ生きていけない時代に入ったといえよう。

ちょっとオシャレな もうひとつのおもてなし



沼田早苗

(写真家)

気の合ったお友達を呼んでの気軽なホームパーティーが、最近では盛んになってきましたが、こんなときにVHS ビデオムービーはパーティーを盛り上げてくれる小道具として大いに活躍してくれるでしょう。撮ったその場で再生したり、クジ引きでそのテープをプレゼントすると、パーティーがより楽しいものとなります。

パーティーといえば、お茶とか食事のおもてなしがすぐ思い浮かびますが、これからは絵、それも動く絵つまりBGVもおもてなしのひとつに加えるべきでしょう。市販の環境ビデオもいいけれど、ムービーで自作のBGVを流すのもオシャレです。

音楽のライブ物も、音量を絞って流しておく、

少しも邪魔にならないし、音楽だけのときとは趣きが違うものです。

このようなBGVは、ゆったりとしたいい雰囲気がつくれるだけでなく、会話が途切れたときにも気まずい思いをしないですむので、ホステス役も安心してキッチンに立つことができるのです。

さらにお客さまの顔ぶれや時間帯に合わせて、ソフトのメニューを考えておくのも楽しいもの。ライブラリーが充実したら、お客さまの好きなソフトを選ばせてあげるというのも、ちょっと素敵な“もうひとつのおもてなし”になるのではないのでしょうか。

エアチェック・テープを通じて 新しいコミュニケーションを期待したい



泉 麻人
(コラムニスト)

僕が生まれたのは昭和31年で、その2年後の33年に東京タワーが完成して本格的なテレビ時代に入りました。だから僕はバリバリのテレビっ子として育ったわけです。

中学に入った頃、小さなテープレコーダーを買ってもらいました。そしてそのマイクをテレビのスピーカーに近づけて、好きな番組の主題歌やらCMソングなんかを録音したものです。いまでもその頃の録音テープが残っていますが、なにしろ裸のマイクをテレビに近づけていますから、遠くから母親が「ごはんですよ」なんて呼んでいる声が入っていたりして、いま聴くとなんとも恥ずかしくなったりするんですね。

しかし、その時代にVTRがあったら、映像と一緒にその時代の番組やCMがファイルできたわけで、非常にくやしい思いがします。VTRが登場

したのは僕が大学へ入ってからで、あのときは驚異的なものができたと感心したものです。

ですから僕にとってVTRの妙味というのは、やはりエアチェックにあるわけで、これからもユニークな番組を録っておきたい。たとえば地方のテレビ局では、東京ではとてもやらないような意外な映画——たとえば植木等の無責任シリーズなど——を放送してくれるし、あるいは、全国の観光旅館のCM集なんかを録っておくと、東京にいながらにして、旅先の宿でテレビを見ているような雰囲気味わえるわけです。

でもこうしたテープはひとりで録画することはできないから、全国各地の人とテープ交流をすることになる。なにしろいまや1億台以上のVHSが全世界にあるのですから、新しいコミュニケーションが生まれることを期待したいと思うのです。

言葉でモノを考えず 見ることにこだわってみたい



手塚 真
(ヴィジュアリスト)

ぼくは世界でただ1人のヴィジュアリストです。ヴィジュアリストすなわち視覚主義者とは、見ることでモノを考える人間です。

いまの世の中、言葉でモノを考えすぎるんじゃないか。たしかに人間にとって言葉は大切です。しかし、言葉にこだわりすぎると、ギクシャクして、かえって気持ちが伝わらないことも多いんじゃないか。まだまだ、言葉にならないもの、言葉にしないほうがいいものが、たくさんあるんじゃないかと思うのです。見たままに思い、見たままに考える。ヴィジュアリストとは、見ることにもう一度こだわってみる人間です。

だからそんなぼくにとって、ビデオは欠かせない道具です。ヴィジュアリストにとって、VHSの映像は心の栄養だといっていい。いま世界には、

1億台以上のVHSがある。ということは、1億人以上の人間がVHSの映像を通して“見る”ということを経験しているわけです。これは素晴らしいことだと思う。

ところで、見ることでモノを考える人間にとっては、自分の姿を客観的に見ることも必要だ。だからぼくはよく、VHSビデオムービーで自分自身を撮ってみる。ビデオで自分自身を見るのは、鏡で見るのとは違って、とても新鮮で刺激的です。それは自分自身とのコミュニケーションであり、それがひいては他人とのコミュニケーションに役立つんじゃないかと思う。

VHSビデオムービーを手にしたら、ぜひ自分自身を撮って、“自画像体験”をしてみることをおすすめしたい。

21世紀に向かう VHSコミュニケーション

——おわりのことばにかえて——

本書の冒頭で述べたように、ビデオには①テレビのエアチェック②ビデオカメラによる撮影録画③レコーデイド・テープなど各種ソフトの再生という3大機能があり、それぞれが互いに関連しながらメディアを形成していくという考えを、ビクターはVHS開発当初より持っていました。

そして10年を経た現在、世界で年間7千万巻ものレコーデイド・テープが市場に出回るほど市販ソフトは充実、拡大してきましたし、小型・軽量の一体型ビデオムービーの登場によって、プライベートソフト制作を楽しむ人も急速に増えました。さらには年間5億巻にもものぼる生テープの消費量からもわかるように、テレビのエアチェックはますます盛んになり、エアチェックを想定した番組づくりも行なわれるようになってきたのです。

その象徴的な番組が、ここにご紹介した『VHS録画チャンネル4.5』（フジテレビ、関西テレビ、東海テレビ）です。午前2時から早朝6時25分まで、延々4時間半にわたって放送されるこの深夜番組は、あきらかにビデオによる録画専用のプログラムです。いままでのテレビにはない、かといって市販ソフトにもない、眠っているあいだに新しいソフトが増えるという、画期的な番組といえるでしょう。

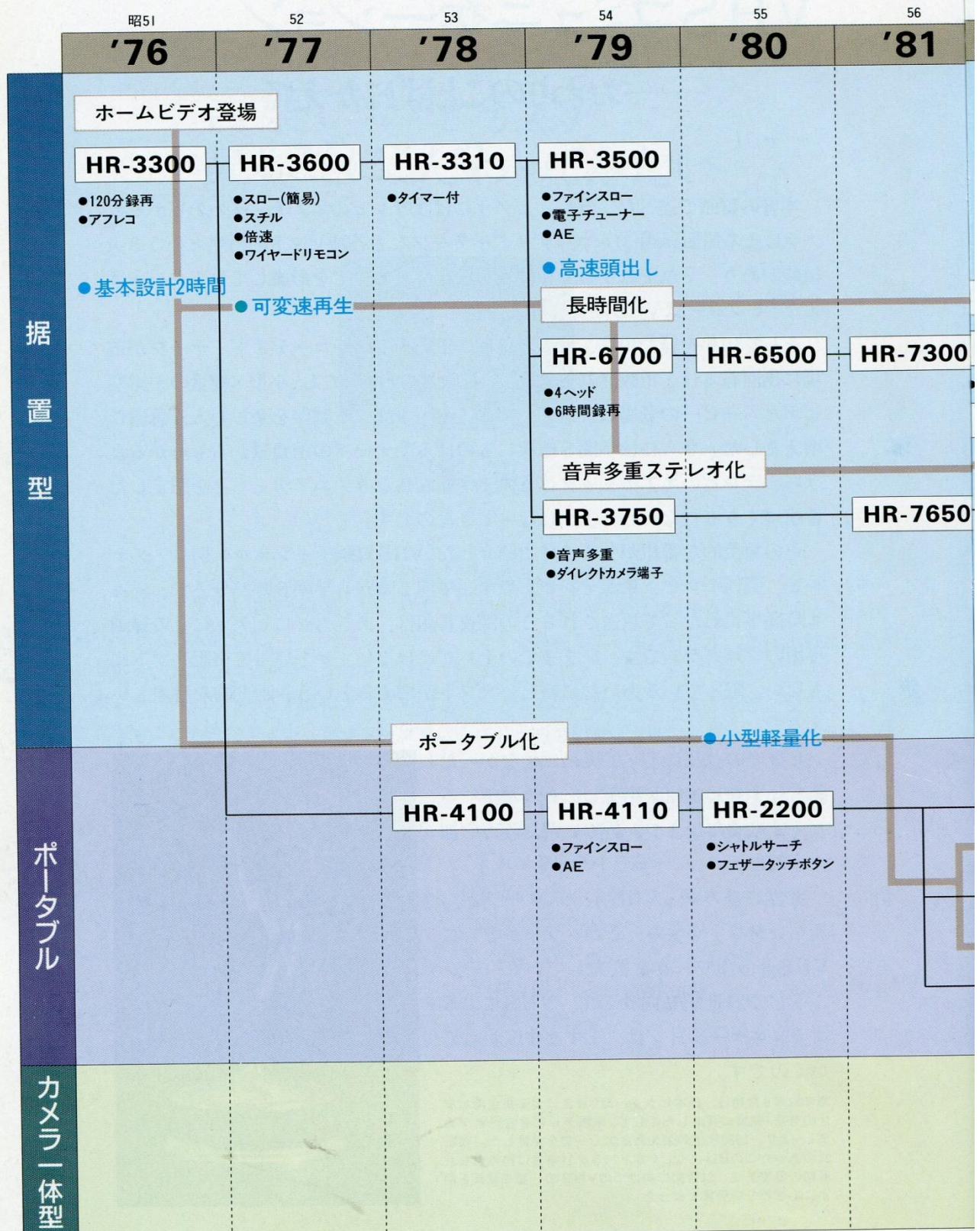
ビデオの普及によって従来にはなかった新しいテレビ番組が出現し、それがホームビデオにまたひとつ、新しい楽しみ方を加えました。

世界にひろがるVHSネットワークが、新しいソフトを生み、そのソフトがさらにVHSネットワークを拡大していく……。こうして21世紀に向かって、VHSによるコミュニケーションは、ますます広がっていくのです。

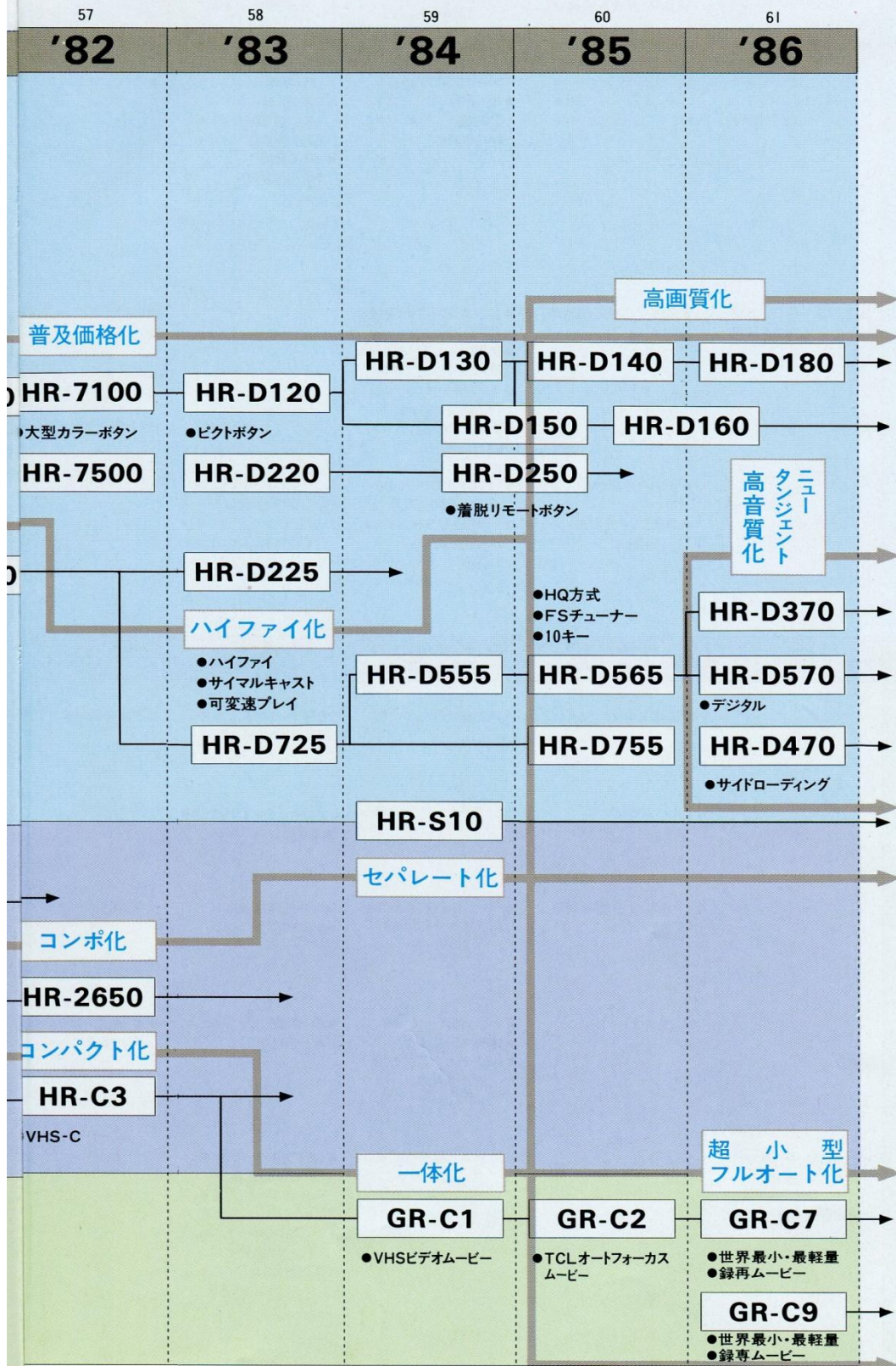
昭和61年9月10日、日本ビクターはVHSによる民生用ビデオの普及・発展に貢献したとして、米国テレビ芸術科学アカデミーより、1986年度の栄えあるエミー賞を受賞した。表彰式のあったこの日は、くしくもVHSが11年目に踏み出した最初の日であり、21世紀に向けてのVHSの一層の発展を期すにふさわしい受賞となった



ビクターVHSビデオの流れ



2HV 関係年表



VHS関連年表

	'76 (昭51)	'77 (昭52)	'78 (昭53)	'79 (昭54)	'80 (昭55)
技術開発	VHS方式発表(9)	ベルリンショーでPAL、SECAM方式を発表(8)		ファインスローシステム(6) 4ヘッド6時間ビデオ(12)	
商品開発	HR-3300(9)	HR-3600(9) (倍速ビデオ)	●HR-4100(1) ●GC-3350(1) ポータブルシステム ●CV-G30 CV-G50 CV-G70(6)	●HR-3500(6) ●HR-3750(6) ●HR-4110(6) ●GX-V3(7) GX-V6(7) GX-V7(7) ●HR-6700(12) 4ヘッド6時間	●HR-2200(6) ポータブルビデオ ●HR-7300(8)
VHS採用の動き	日立、シャープ、三菱、松下の各社VHSを採用(11、12)	●西独サバ社とOEM契約(12)	●仏、トムソン・ブラント社とのOEM契約(3) ●英国ソーレン社VHS採用(6) ●ランク・オーストラリア社とOEM契約(9) ●テレフンケン社VHS採用(12)		西独SEL社がVHS採用(9)
海外進出		●サマーCESでVHS発表(6) ●全米にVHS(ビディスター)発売(10)	●「JVCビデオフランス・A」設立(4) ●「JVCドイチェランドGmbH」設立(4)		VICロンドン開設(2)
生産体制		伊勢崎工場(2)	水戸工場(5)	マグネテープ(9)	ビデオ事業部創立10周年(3)
キャンペーン		アルバムビデオ		いきいきビデオまつり全国展開(2)	
宣伝広告		「小さなビデオの大きな宣言」	●ジャニス・ディキンソン起用	夏の甲子園広告(8) ジャニスのファインスロー	浅井慎平(テープ)
プロモーション		VIC東京オープン(10)	●VIC大阪オープン(9) ●青梅マラソン判定 ●中京テレビ・ビデオリポータークラブ発足	●第1回東京ビデオフェスティバル(3)	●第1回ビジネスビデオシンポジウム(11)
トピックス				●エドアルト・ライン賞(3) (白石開発部長)	

※()内の数字は月を表わします。なお「商品開発」欄の月は、発表月。

	VHSコンパクト方式	TCLオートフォーカス方式 ハイファイVHS方式		HQ方式 ニュートンジェント方式	
●BR-6400(6) - 業務用VHS ●HR-7650(12)	●HR-2650(4) ●HR-C3(5) ●GZ-S3(8) (シティジャック) ●HR-7100(10) ●HR-7500(10)	●GZ-S5(7) - TCLオートフォーカス ●GX-AF8(7) ●HR-D120(7) ●VHSビデオムービー(8) ●HR-D725(9) ●HR-D220(10) ●VHS採用10社 ハイファイVHS規格で合 意(7) 米ゼニス社VHS採用(12)	●GR-C1発売(1) ●HR-S10(5) ●HR-D130(6) ●HR-D150(11) ●HR-D555(11)	●HR-D250(5) ●HR-D140(6) ●GR-C2(6) - オートフォーカスムービー ●HR-D565(7)	●GR-C7(1) ●GR-C9(9) 東芝、シャープ、松下、日 立の各社VHS-Cムービー 採用(5~6)
	●J2Tホールディングス B.V稼働(オランダ)(3) ●J2Tビデオ GmbH (ベルリン)設立(5) ●J2Tビデオ(英ニューヘ イブン)LTD.設立(10)	●トムソン・ブラント社と技 術援助契約(4) ●JVCマグネテープ GmbH (西独)生産開始(5) ●J2Tビデオ(西独) 操業開始(5)			
'81 (昭56)	'82 (昭57)	'83 (昭58)	'84 (昭59)	'85 (昭60)	'86 (昭61)
藤枝工場	横須賀工場(11) ダイナレックテープ発売(12)	郡山工場(VHS-C専門) (7)			
		親切なデンキ屋さん			愛撮るキャンペーン(5~)
松井功・チャコの 「2人でレッスン」	小林克也「CITY JACK」	大友柳太郎 「親切なデンキ屋さん」 DO / SPORTS	石原真理子 「なぜなんだろう」 「団のつくビデオ」	マジメディア・HQ	ボーヤハント
●ビデオケーションスタート (6)					
●文化勲章受章(10) (高柳頼問)	●ベルチーニ伊大統領 横浜工場訪問(3)	●高野専務「マン・オブ・ザ ・イヤー」賞		●映画「バック・トゥ・ザ・フュ ーチャー」にムービー GR-C1登場	●スペンサー伯爵横浜工 場見学(3)
●機械振興協会賞(11)	●創立55周年総合展 (10)			●高野専務監製褒章(4)	●VHSビデオ1億台突破 (5)
	●CITY JACK グッドデザ イン大賞(10)				
	●CITY JACK 南極観測へ (11)				

VHS関連年表

1986年 10月15日 本書が第1427号として発行された。

VHS コミュニケーション

昭和61年10月15日 初版発行

発行／日本ビクター株式会社

ビデオ事業部

編集／株式会社りびんぐ社

印刷／株式会社金羊社

本書の作製にあたり、さまざまな方面より古い資料や写真を提供していただきました。そのため、不鮮明な写真が一部にありますことをご容赦ください。

